真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

波瀾 紡

目　次

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！
◆第1エピソード『真逆の双子姉妹』
第1話：真逆の双子姉妹〈1〉
第2話：真逆の双子姉妹〈2〉
第3話：真逆の双子姉妹〈3〉
第4話：真逆の双子姉妹〈4〉
◆第2エピソード『舞衣と亜依には彼氏がいる？』
第5話：舞衣と亜依には彼氏がいる？　〈1〉
第6話：舞衣と亜依には彼氏がいる？　〈2〉
第7話：舞衣と亜依には彼氏がいる？　〈3〉
第8話：舞衣と亜依には彼氏がいる？　〈4〉
第9話：舞衣と亜依には彼氏がいる？　〈5〉
◆第3エピソード『亜依と舞衣はなんの部活に入る？』
第10話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？　〈1〉
第11話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？　〈2〉
第12話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？　〈3〉
第13話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？　〈4〉
第14話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？　〈5〉
第15話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？　〈6〉
◆第4エピソード『文芸部部長・黒木久美』
第16話：文芸部部長・黒木久美〈1〉
第17話：文芸部部長・黒木久美〈2〉
◆第5エピソード『離れないで……』
第18話：離れないで……〈1〉
第19話：離れないで……〈2〉
第20話：離れないで……〈3〉
第21話：離れないで……〈4〉

第22話：離れないで……〈5〉
第23話：離れないで……〈6〉
◆第6エピソード『舞衣とデート？』
第24話：舞衣とデート？　〈1〉
第25話：舞衣とデート？　〈2〉
第26話：舞衣とデート？　〈3〉
第27話：舞衣とデート？　〈4〉
第28話：舞衣とデート？　〈5〉
第29話：舞衣とデート？　〈6〉
第30話：舞衣とデート？　〈7〉
◆第7エピソード『亜依を可愛くしてやる！』
第31話：亜依を可愛くしてやる！　〈1〉
第32話：亜依を可愛くしてやる！　〈2〉
第33話：亜依を可愛くしてやる！　〈3〉
第34話：亜依を可愛くしてやる！　〈4〉
第35話：亜依を可愛くしてやる！　〈5〉
第36話：亜依を可愛くしてやる！　〈6〉
第37話：亜依を可愛くしてやる！　〈7〉
◆第8エピソード『偽のデートは甘酸っぱい』
第38話：偽のデートは甘酸っぱい〈1〉
第39話：偽のデートは甘酸っぱい〈2〉
第40話：偽のデートは甘酸っぱい〈3〉
第41話：偽のデートは甘酸っぱい〈4〉
第42話：偽のデートは甘酸っぱい〈5〉
第43話：偽のデートは甘酸っぱい〈6〉
◆第9エピソード『亜依と舞衣』
第44話：亜依と舞衣〈1〉
第45話：亜依と舞衣〈2〉

あらすじ：

おいおいおい。

　姉の舞衣は明るくて優しくて人気者なのに、なんで妹の亜依は僕にそんなに冷たく当たるんだ!?

しかも綺麗な身なりの姉は『美少女』だと評判なのに、妹はコミュ症で髪の毛ボサボサ、ダサダサメガネ。だからみんなは双子って気がつかないくらい。

　高校に入学したばかりの舞衣（マイ）と亜依（アイ）は、双子なのに真逆の美少女姉妹だ／／

だけど二人と幼なじみの僕は、妹・亜依の良さも充分理解してる……つもりだった。

だけど亜依のつっけんどんな態度に、僕もついつい負けずにやり返してしまう。

だけど本当は――／／

僕は誰も知らないホントの亜依を知ってる。ホントは優しくて、めちゃくちゃ可愛くて……

そんな僕と美少女双子姉妹の――すれ違い、じれじれで、ラブラブな――

正統派ミステリーです。

※基本1話2,000文字程度なので、気軽にサクッと読んでください。

「小説家になろう」にも掲載中

掲載ページ:

https://kakuyomu.jp/works/1177354054891886313

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第1エピソード『真逆の双子姉妹』

第1話：真逆の双子姉妹〈1〉

「なあ耕平（こうへい）、知ってるか？」

ホームルームが終わった途端、前の席の高木 勇介が後ろを向いて、にやっとスケベそうな笑顔を見せた。

やたら親しそうに話しかけてきたこの男は、実はまだ出会って半日しか経ってない。

世の中にはこんな、アホみたいに人懐っこい人間もいるもんだ。

――それが僕が高校に進学して、最初に学んだこととなる。

僕は彼を、心の中ではミスター・フレンドリーと呼ぶことにする。

「知ってるかって……なにを？」

勇介とは今日迎えた高校の入学式で列に並んだとき、前後になったことで初めて言葉を交わした。そして教室に戻ってきて、座席も僕の前が勇介だった。

高木勇介と、僕の名前、多岐川（たきがわ） 耕平が名前順に並ぶと連続する……ただそれだけの間柄。

入学初日の帰りのホームルームが終わったばかりの今。いきなり『知ってるか？』って訊かれても、何のことやらわからない。これでわかるんなら、僕はエスパーだ。

「隣の二組に、すっげぇ可愛い子がいるんだって！」

「そうなの？」

「ああ、そうだ。行くぞ！」
「どこへ？」
「どこへって、決まってるだろ！　二組の教室から出てくるその美少女を拝みに、いざ行かん！」
拝みにって、その美少女は弁天さんか、もしくは阿弥陀如来さまか？
後光が差すような、さぞかし綺麗な女の子なんだろな、きっと。
うん、そうだよ。
僕は、こんなに調子のいいヤツの言葉なんか、信じちゃいない。
どうせガセネタなんだろ。
それよりも僕は、偶然同じクラスになった、幼なじみの貴理山亜依が気になる。
亜依は家が隣の幼なじみ。あいつは人と関わるのが苦手だから、まだまと

もにクラスメイトと話をしていない。

まあ僕には関係ないと言えば関係ないけど、誰とも話さないで一人で帰り支度する亜依に、ちょっとくらいは声をかけてやったほうがいいかも……くらいに考えてた。

「なにやってんだ耕平！　美少女が帰っちまうじゃんか！」

「うぉっ！」

座ったままの僕に業を煮やした勇介が、いきなり右腕をつかんで引っ張るもんだから、変な声が出た。

そのままずるずると引きずられて、教室の出入り口まで、酔っ払いみたいなフラフラした足取りで向かうことになってしまった。

席に座ったままの亜依をチラッと見たら、視線が合った。

赤縁メガネをかけてる亜依は、一瞬――射抜くような殺気を帯びた視線

を、メガネ越しに僕に突き刺して、すぐにふいと横を向いた。そして何ごともなかったようにカバンを持って立ち上がる。

――うわっ、まずい。

僕はたぶん、元々――そう、中学の頃から――亜依に嫌われてる。

だけど、そうは言っても、他に誰も知り合いがまだいない新高校生活。

亜依はコミュ障で、友達づくりが苦手だ。だから例え嫌ってる相手だとしても――せめて顔見知りの僕が、少しは自分のことを気遣ってくれるだろうっていう、期待もあったように思う。

それが、亜依をほっぽらかして、どこかの美少女を眺めに行こうとしてるなんて。

そんな僕を見たから、たぶん亜依は殺気に溢れた視線を寄こしてきたんだ。実際に僕は、亜依のスナイパーのような視線に、瞬殺された気分になってる。

てる

――いや、待て。僕のせいじゃない！

僕は、自分から好き好んで、美少女を見に行こうとしてるんじゃない！

わかってくれ、亜依！

後でまた、僕を罵倒するのはやめてくれっ!!

＊＊＊

「ほらっ、あれだ、耕平!!　すっげー可愛いっ!!」

勇介に引っ張られて廊下に出たら、ちょうど隣の二組の出入り口から、勇介の言う美少女が出てきたところだった。

周りには男も女も数人が群がって、美少女はその中心に君臨……そう、まさに君臨するかのごとく、輝きを放ってるような佇まいで廊下を歩いて来

た。

その美少女は僕の姿に気づいて、にこりと笑顔を見せる。

「耕ちゃんも、今帰り？　一緒に帰ろっか？」

「え？　あ、ああ。そうだな」

横で勇介が、その美少女、貴理山（きりやま）舞衣（まい）と僕を見比べるようにして、その平凡な顔を何度も左右に振ってる。まるでテニスのラリーを見てる観客だ。

「こ、耕平!!　まさかお前、この美少女様とお知り合い!?」

「あ、ああ。まあな……」

中学が一緒で……って勇介に説明しようとしたら、舞衣の周りをついてぞろぞろ歩く男女の波に飲まれるように、勇介が流されて遠ざかって行く。

おお、勇介よ、かわいそうに。漂流しても、必ず生きて帰ってくるのだぞ。

――まあいっか。勇介には、また明日、説明しよう。

でも……同じクラスのコミュ障女子、貴理山（きりやま）亜依（あい）と、この明るく誰にでも好かれる貴理山（きりやま）舞衣（まい）は、実は双子姉妹なんだよってことは……言わないほうがいいだろう。いつも比べられて、亜依が嫌な顔をするからなぁ。

まあいずれは、みんなに知られるだろうけど。

第2話：真逆の双子姉妹〈2〉

＊＊＊

僕と貴理山（きりやま）姉妹の家は隣同士の一戸建てで、僕たちが入学した高校からは徒歩で通える。

僕たちの出身中学が高校の隣にあって、つまりは同じ町内に中学と高校があるってわけだ。

それもあって、僕が出た中学からは、結構な人数が同じ高校に進学した。

この高校は県内でも有数の進学校なんだけど、出身中学を人数順に並べる

と、我が中学(母校)が一番になる。

僕と舞衣(まい)が家に帰り着くと、ちょうど亜依(あい)も家の玄関先で、鍵をカバンから取り出そうとしてる時だった。

「あっ、亜依お帰りっ！」

亜依の姿を見つけた姉の舞衣が、いち早く明るく声をかける。

先に帰り着いてる相手に、後ろから来たほうが『お帰り』ってのも、なんだか変な気がするけど、『こんにちは』も『ごきげんよう』も、もっと変だから仕方がない。

「ああ、お帰り……舞衣」

――テンションひっくぅ！

相変わらずだな、亜依は。

「じゃあね、耕ちゃん！　また明日！」
「ああ、また明日」
明るく挨拶を交わす舞衣とは正反対に、玄関ドアに向かって、無言で鍵をカチャカチャやってる亜依の背中を見て、ああ、今日の帰りのことを謝らなきゃ、と思った。
亜依をほっぽらかして美少女を――まあそれは、結果としては姉の舞衣だったんだけど――見に行ってしまったことは、さすがに亜依に対して罪悪感がある。
「あのさ、亜依……」
チラッと僕を振り向いた亜依は無表情のまま、ひと言「死ね」とだけ言って、ドアを開けて家に入って行く。
いやいや、死ななきゃならないほどのことなんて、僕がしましたかーっ!?

僕を拒否するような亜依の背中が『私に話しかけないで、この変態っ！』って言ってるように感じた。

――あ、いや、『変態』は言葉のあやだ。別に変態チックなことを亜依にしかけたことは、今までかつてない。

でもしかし――なんだ、その態度は？

せっかく謝ろうと思ったのに。

はいはい、そうですか。

それほど僕は、亜依に嫌われてるってことなんですよねー

僕もお前なんて……

――決して嫌いじゃないんだけどなぁ。

「ごめんね、耕ちゃん。亜依が相変わらずあんなで……」

[illegible]

「いや、舞衣のせいじゃないから、謝らなくていいよ。あれがいつもの亜依だし」

舞衣の申し訳なさそうな顔を見てると、逆にこっちが申し訳なくなってくる。

そう――舞衣が悪いんじゃない。

例え亜依が、双子の姉の舞衣と比べられることでコンプレックスを抱いてるとしてもだ。それは舞衣が悪いってことにはならない。

舞衣は舞衣で、元々そんなに明るい性格だったわけじゃない。

どちらかと言えば優しくて、小学校の頃までは大人しいほうだった。

特に舞衣は小児喘息（ぜんそく）だったせいで、度々入院したり、学校を休んでた。

それで小学校で、みんなの輪に入るために、相当がんばってたんだと思

う

気がつけば舞衣は、中学の頃にはとても明るくて、いつもきらきらした笑顔を振りまく、クラスの人気者になっていた。服装や髪型にも気を遣って、凄く可愛い女の子になっていった。

一方の亜依は――

小学校の頃はまあまあ明るかった気もするけど、思春期を迎える頃には、気がついたらあんまり人前では表情を出さないようになってた。言葉も少なめで、自分から積極的に話しかけたりしない。

――そのくせ、なぜか僕にだけは、しょっちゅう毒舌吐いてくるけどな。

髪型や服装にも無頓着で、黒髪のショートヘアは割りとぼさぼさした感じだし、赤縁のダサいメガネも彼女のイメージを下げてる。

――双子の姉妹なのに、こんなにも見た目も性格も違ってしまうもんかねぇ。

見た目のイメージが違いすぎて、顔はそっくりなのに、『双子なんですよー』って言わなけりゃ他人は気づかないくらいだ。

僕は――これでも、それなりに亜依には気を遣ってきたつもりだ。

亜依は、姉と比べられて寂しい想いをしてるんだと、理解してる。

でもそんな僕の想いは、きっと亜依には伝わってないんだろう。

だからこその、あの嫌われ方だ。

僕は大きくため息をつきながら、自宅の玄関ドアを開けた。

＊＊＊

自室のベッドに腰かけて、スマホを手にした。

――やっぱり、せめてＬＩＮＥで亜依に謝るか……

くそ腹立つあんな態度をされた女子に、おめおめと謝るのか、僕は？

それでホントにいいのか？

男子の沽券はどうなる？

「アホらし」

ついつい独り言を口にして、スマホをベッドの上に放り投げた。

――つもりだったけど、ベッドの角でスマホがバウンドして、そのまま床にガツンという音とともに打ちつけられる。

「やっべーっ!!」

スマホを壊したりなんかしたら、母親にどやしつけられること間違いなし。

[illegible]

それはもう、亜依の罵倒なんか比較にならないくらい、ラスボスとコブリンくらい怖さが違う。

慌ててスマホを拾い上げて電源ボタンを押したら、無事に画面がついた。液晶に傷もついてない。

こりゃやっぱり、つまらん意地を張ったことに、神様がバチを与えたのかもな。

ごめん、神ちゃん。

――って、全然神を敬ってないな、僕。

改めてスマホでＬＩＮＥアプリを開いて、『今日はごめん』って打ち込んだ。すぐに既読がついたのに、なかなか返信がない。

ああ、やっぱり、亜依は相当怒ってるんだろうな。

くそっ。せっかくこちらから謝ったのに。

そもそも悪者はないじゃないか？

その態度はなんだ？

もういい。

明日学校に行っても、絶対に亜依とは喋ってやらん。

誰が何と言っても、例え百万円の札束を積まれても、金輪際亜依とは喋らん！

そう思って、スマホの画面を、もう一度チラッと見た。

んんん……やっぱりまだ返信がないじゃないか。

やっぱり亜依とは二度と喋らない！

僕は一度決めたら、強い意志でそれを貫徹する男だ。

さあ、後悔するがいいぞ亜依よ！

ピコン！　という着信音に気を奪われて、スマホ画面に見入った。

『耕ちゃん、こっちこそごめん。ありがとう』

来たっ！

亜依からの返信が来た！

――むふふ……

画面のメッセージを凝視してる僕は、自分の頬が緩むのがわかる。

いや、待て。こんなたったひと言で、さっきの決意を覆していいものなのか？

ニヤついてる場合ではないぞ。

いや、だめだだめだ。

明日は絶対に、なにがなんでも、亜依とは喋らないんだよ、僕はっ!!

そう心に誓いながらも、なぜか頬の緩みは収まらなかった。

第3話：真逆の双子姉妹〈3〉

◆◇◆◇◆

私は物心ついたときから、姉の舞衣と比べられてきた。まるでテレビCMの『当社比』くらいに頻繁に。

近所のおばちゃんや親戚のおじさんが、いつも最初に舞衣の頭を撫でて、『お人形さんみたいに可愛いねぇ』と言った。

私は常に二番目。ついでのように褒められた。

――だから私は、こんな拗ねた性格になっちゃったんだろね。

子供の頃、姉の舞衣は小児喘息（ぜんそく）で、よく咳の発作に悩まされていた。

発作が出るたびに両親は舞衣にかかりっきりになって、看病したり、病院に連れて行ったりしてた。

その度に私は、「いい子にしてるんだよ」と言われて、一人で過ごすことが多かったものだ。

――だから私は、こんな拗（す）ねた性格になっちゃったんだろね。

私たち姉妹には、隣に住む耕平君っていう幼なじみがいる。

小学生の頃は、姉の舞衣が身体が弱いってことで、耕ちゃんは舞衣にばかり優しくしてた。

中学に入ってからは、可愛く着飾ったり、明るく振舞う舞衣のことを、好

中学校のクラスメイトたちは、良く家で着物を着ている、女きになったんだろう。やっぱり耕ちゃんは舞衣にばかり優しくした。

――だから私は、こんな拗ねた性格になっちゃったんだろね。

私はそれでも小学校の頃は、良い子でいようと努力してた記憶がある。だけど舞衣ばっかり大事にされて、自分なんて嫌われる子なんだ……って拗ねた性格になったのは、思春期の頃だったと記憶してる。

中学生になった頃には、舞衣と比べられるのが嫌で、舞衣がロングヘアだから私はショートヘアにした。

舞衣が可愛いい女の子らしいワンピースなんかを好むから、私は普段はジャージとか真っ白で無地のティーシャツとかを選んで着た。目が悪くなって、あえてコンタクトはしないでメガネにした。

――そう。私は中学時代からあえて、地味にしたんだ。

決して……ショートヘアの方が手入れが楽だとか、ジャージや白ティーシャツだと何も考えなくて済むとか、決して、そんな怠惰な理由ではない。たぶん。

舞衣は周りから、よく「可愛いね」なんて言われるけど、私はあんまり言われたことがない。双子だから顔はほとんど同じはずなのに。

だから私はあえて、意識して無表情でいることにした。――そう、姉と比べられないように。目立たないようにしてた。

人と話をするのが億劫で、あんまり家族以外の他人と話をしないようにした。

――そう、私は中学時代からあえて、コミュ障のフリをしたんだ、決して本物のコミュ障なんかではない。たぶん。

そう思ってた。

しかし私は……

高校への入学を機に、変わるんだって心に誓った！

中学時代までの黒歴史に幕を下ろして、ハッピーな高校生活を送るんだ！

舞衣ほど派手に人気者になんて、ならなくていい。

だけど友達をたくさん作って、できれば彼氏も作って……

そんな超ハッピーな、盆と正月がいっぺんに来たみたいな、ハッピーな高校生活を送るんだ。

生活を送るんだと決めた

――いや別に、お盆はハッピーでもなんでもないけれど。

だけど現実は、相当厳しかった。

思ってたよりも、コミュ障卒業のハードルは高かった……

コミュ障は演じてただけだから、すぐに知らない同級生とも仲良く話せるよーん！

そう思ってたのに、実際は全然話せなかった。

――不覚だ。私の不徳の致すところだ。

演じてただけのつもりだったコミュ障は、中学時代に三年もの長きにわたってそういう生活をしてる間に、本物になってた。

恥ずかしすぎて、自分から他人に――ましてやよく知らない人に、話しかけるなんてできない。

もし話すことができたとしても、思ってることと違う、無愛想な、人を拒絶するような言葉しか出ない。

これはやっぱり、コミュ障からの卒業は無理ゲーっぽくないっすか、私？

だからついつい教室でも、耕ちゃんに救いを求めるような視線を送ってしまってた。

なのにあのバカ男（おとこ）……美少女を見に行くなんて言って、出て行きやがった。

舞衣が相手なら、いつもにへらにへら笑って親切にするくせに。

……とは言うものの、本心ではそれほど耕ちゃんを恨んだわけじゃない。

さっきだって玄関で、耕ちゃんが声をかけてくれた時、私は心の中では『なーに?』と言ってたんだ。

なのに口から出た言葉は『死ね』だった。

あーっ!

私の口は、いったいどうなってんのっ!?

自分の意思とは関係なく言葉が出るなんて、私は恐山(おそれざん)のイタコかいっ!?

――あ、イタコってのは、死者を自分に乗り移らせて喋る、あれね。

なぜか……私は口を開けば耕ちゃんの悪口とか、憎まれ口を叩いてしまう。私の『拗(す)ね子』の性格がそうさせてしまう。

別に耕ちゃんを嫌いとか、憎いわけじゃないんだけどなぁ。

全然そんなことは思ってないのに。なぜか思ってることと真逆のことが口

から出ちゃう。

なぜなら……憎まれ口を叩いておけば、耕ちゃんが私を嫌いになってくれるから。

耕ちゃんが舞衣のことを好きで、耕ちゃんが好きな相手が私じゃないのは……

私が憎まれ口を叩くからであって、決して本当の私に魅力がないからじゃない。

憎まれ口さえ叩いとけば、そう自分に言い訳が立つ。

――いや、ちょっと待って。

私はホントは、耕ちゃんが嫌いだ。

ごつごつ、ゴリゴリしていない、なよなよしていない耕ちゃんが嫌いだ。

[illegible]

嫌いだ、嫌いだ、嫌いだ。

私が耕ちゃんを好きなはずなんか……ない。

第４話：真逆の双子姉妹〈４〉

＊＊＊

私は帰宅してから、すぐに自分の部屋に入った。そしてメガネを外したらすぐにベッドにうつぶせになって、枕に顔を突っ込んだ。

隣の部屋では姉の舞衣が、なにか、がさごそと動く気配が聞こえる。

せっかく今日から、高校生になったのに。

何かが変わるって期待して、入学式に行ったのに。

あ～あ、結局なーんにも変わらないんだなぁ。

服装や髪型を変えたらいいのに……って言う人がいるかもしれない。

だけどそれもできない。したくない。

だってウチの高校は、中学が同じ生徒がたくさんいるんだよ。

急に見た目を変えたら、『高校デビューか？』なんて、からかわれるに決まってる。

そんなことを言われたら、恥ずすぎて、温泉に飛び込んで入水自殺したくなる。

――え？　なんで温泉？

だって気持ち良さげだから。

うん、ホントは死にたいなんて、全然思ってないんだけど。

でもやっぱり、中学までの黒歴史に幕を閉じたいって気持ちはある。

だから見た目も雰囲気も、徐々に変えていけたらベストオブベスト。

それにしても……

舞衣は中学のときよりもさらにグレードアップして、人気者になりそうな気配を既に発してるなぁ。

うんうん、確かに舞衣は、中学のときよりも三段階くらい可愛さがグレードアップしたかも。

セーラー服の舞衣も可愛かったけど、ウチの高校のベージュのブレザーの制服は、清楚な雰囲気の舞衣によく似合ってるな。

はぁーっ……

私のほうは……高校生活一日目にして、また今までの灰色の生活が約束

されました、ってとこかなぁ。

君との約束、ザ・プロミス！

――う～ん、英語で言ってみても、気分は晴れない。

耕ちゃんは……高校生になったら、正式に舞衣と付き合う気でいるのかな？

もし耕ちゃんが舞衣に告(こく)ったら、舞衣はきっとオーケーするだろなぁ。

――って言うか、私から見たらあの二人は、今までも充分仲がいいし、もう付き合ってるっていっても過言じゃないよね。

実際には付き合っていないって、知ってはいるけど……

はぁーっ……

また大きなため息が出て、また顔をまくらに突っ込んだ。

――ぴろりん！

ＬＩＮＥの着信音が聞こえる。

きっと舞衣からだね。隣の部屋なんだから、直接声をかけてくれたらいいのに。

そう思ってスマホの画面を見たら、耕ちゃんからだった。胸がドックンと鼓動を打った。

『今日はごめん』

なに？　何を謝ってるの？

もしかして中学の時に、私のスカートをめくったこと？

小学生ならまだしも、中三でそんなことが一回あった。何を考えてるんだ、あのバカ男は？

っていうかないか。

――って、そんなわけないだ

よく見たら、『今日は』って書いてあるし……

今日ホームルームが終わった後、私をほっぽらかして出てったこと？

耕ちゃんは気にしてくれてたんだ……

そっか……気にしてくれてたんだな。

なんか涙が出そうだよ。

スマホに『ありがとう』って入力した。

――いや、そう入力したつもりが、『なにを謝ってんの？　バカ？』なんて入ってる。

なんで？

なんでありがとうが、バカに変わるの？

しばらくじっと、自分が入力した文字を眺めてた。

――バカは私だ。

いや、バカじゃなくて大バカだ。
スペシャル・フーリッシュだ。
いや、やっぱり英語で言ってもなんの意味もない。
スマホを握りしめて、もう一度文字を入れ直す。
――バカな私よ。
せめてメッセージくらい……文字で入れるくらい、素直な気持ちを表現しなさい！
焦らなくていい。指先に全身全霊を込めて、ゆっくりと、想いを文字にする。
送信ボタンを押したあと、私はどっと疲れが出たように感じて、バスンと

音を立ててうつ伏せでベッドに倒れこんだ。
なんとか素直な気持ちを文字にできた。
たかが文字に気持ちを乗せるだけ――ただそれだけのことが、こんなに労力が必要だなんて、思いもよらなかった。
でも私はやり切った。
やり切ったぜバカ野郎。
私だってやればできるんだ。
見たか、この実力。
『耕ちゃん、こっちこそごめん。ありがとう』
――私の想いよ、耕ちゃんに届け。

＝第一エピソード　完＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

カクヨムコン五に参加しています。

「面白い」「続きを見たい」「応援したい」と思っていただけたら、★を付けてくださいませm(＿＿)m

（★は最新話の一番下か、表紙ページの中ほどから付けられます）

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第2エピソード『舞衣と亜依には彼氏がいる？』

第5話：舞衣と亜依には彼氏がいる？〈1〉

◆◇◆◇◆

「お、おはよ、亜依」

「あ……おはよ」

翌朝教室に入って、席に座ってる亜依を見かけた途端、僕は無意識のうちに挨拶を交わしてた。

いや、まんとここ無意識なんじゃってば。

いや、ほんとに無意識だったのだ。

別にあんなたったひと言のメッセージで、亜依とはもう喋らないっていう決意を覆したわけじゃない。

朝で寝起きで、まだ頭がボーっとしてたから、昨夜の決意が頭から抜けていた。

――そう、ただそれだけだ。

ほら、僕の挨拶に対して、亜依だって無愛想に短い言葉を返しただけじゃないか。

きっと亜依だって、僕の挨拶なんて待っちゃいなかったんだよ。

「おはよー耕平！」

「ああ、おはよう勇介」

朝っぱらから、得意の人懐っこさを最大限発揮してるな、勇介は。

僕が席に着いた瞬間に、前の席から後ろを振り向いて、満面の笑みを投

げかけてきた。
さすがミスターフレンドリー。
「耕平ってさ、あの噂の超絶美少女と知り合いだったんだな！　驚いたよ！」
「超絶美少女？」
「そうさ、あの二組の」
ああ、舞衣のことか。
凄いな舞衣。初対面の男子に、超絶美少女って言われるなんて。
まあ確かに幼なじみで見慣れた僕でも、かなり可愛いって感じるけど。
見慣れない人が見たら、余計にそう思うのかもな。
勇介の言葉が耳に届いたのか、ぴくっと肩を震わせて、亜依がこっちを見た。
僕と目が合うと、さっと前を向いてしまったけど。

「あの美少女、なんて名前？」
「えっ？　……舞衣（まい）……ちゃん」
「舞衣ちゃんかぁ！　やっぱ可愛い子は、名前まで可愛いよなぁ」
いや、名前はごく普通だと思うけど？
坊主憎けりゃ袈裟まで憎いってヤツだな。
――あ、逆か。
坊主可愛いけりゃ袈裟まで可愛いってやつだ。
もちろん、そんな慣用句はないが。
あえて苗字は言わずにおいた。
貴理山（きりやま）なんて珍しい苗字、そして舞衣と亜依っていう、いかにも双子姉妹でございますって感じの名前。
苗字を知ったら、勇介もすぐに気づくに違いない。

まあいずれみんなが知るところとなるんだろうけど、僕の口からそれを知らせるようなことはしたくない。

亜依が舞衣と比べられて、嫌な思いをするかもしれないからだ。

だったらわざわざ同じ高校に進学しなけりゃいいのに、って考えもある。

だけど亜依も舞衣も――まあもっと言えば僕もだけど（いや、自慢じゃない。決して自慢じゃないぞ）――中学ではトップクラスの成績だったから、自然と県立一番校のここを受験する流れになった。

「……で、耕平と舞衣ちゃんは、どんな関係なんだ？」

「ああ、中学校が一緒だったんだ」

さすがに家が隣同士とか、そんな恐ろしいことは口にできない。

きっと勇人のジェットスクリームが炸裂するに違いない。

さっと男子の姉妹のシュートエリート、人た僕を吹き飛ばしてしまうに違いない。

「へぇ、多岐川（たきがわ）とあの子は、知り合いなのかぁ……」

急に横から他の男子の声が聞こえて、顔を向けたら四、五人の男子が集まってきてた。

全員見たことがあるから、同じ一組の男子だろうってことはわかる。

でもまだほとんど顔と名前が一致しないから、誰が誰なのかわからない。

「ああ、まあね」

名前がわからないから、モブ君一号と呼んでおこう。

モブ君一号は、更に質問をしてきた。

「まさかあの子が、多岐川の彼女ってことは……？」

「いやいや、それはありえないでしょ！　なあ多岐川！」

横にいたモブ君二号が口を挟んできた。

いや、僕はまだ君が誰なのかもわからないんですけど……

いくら僕たちがまだ高一で、若気の至りって言葉で多くのことが許されるんだとしても、そう決め付けるのは失礼ってもんじゃないのか？

――とは言え。そんな強がりを言ったところで……

「ああ、そのとおりだ。僕の彼女だなんてことは、これっぽちもない」

「やっぱりなぁ」

やっぱり……なんなのだ？

やっぱり、お前みたいな平凡男子が、舞衣みたいな可愛い女の子の彼氏であるはずはないって言いたいのか？

「おい、待てよ茂部山（もぶやま）。そういう言い方は、耕平に失礼だぞ。なんてったってあの美少女は、耕平のことを『耕ちゃん』って親しげに呼んでたんだぞ」

「ええっ!?　ホントか！　それは驚きだっ!!」

いや、僕はモブ君二号の名前が、本当に茂部山（もぶやま）だったことの方が驚きだ。

「いや、まぁ……小学校から知ってたからなぁ。……ほら、割と小学校の頃って、あだ名で呼び合うのが流行ったりするじゃん」

「ああ、なるほど。それでか。でもあんな美少女と知り合いなんて、うらやまー！」

モブ君二号がのどを掻きむしって悶絶してる横から、また違う男子が声をかけてきた。

「じゃあさ、じゃあさ、僕らを彼女に紹介してよ！」

今度はモブ君三号が、まったくもって厚かましい――電車の座席で狭い空間にでかい尻を突っ込むおばさんと同じくらい厚かましい――要望を、なんの臆面もなく突っこんできた。

いや、君らとは、ほとんどまだ初対面みたいなもんだし。いきなりそんなこ

とを頼まれても……

その時、ありがたいことに始業のチャイムが鳴った。まさに救いの鐘だ。

「なあ、いいだろ、多岐川」

チャイムが鳴ったのに、まだ彼らはしつこく僕の席から離れようとしない。もはや今の発言主が、モブ君一号なのか二号なのか三号なのかさえもわからない。

そんなことよりも……

僕の視界の端には、時折こちらをチラッと見ては、はぁ～ってため息をついてるように見える、亜依の姿が映ってる。なぜかわからないけど、たいそう機嫌が悪そうだ。

「お前ら、早く席に着けよ～！　何してるんだ、そこ！」

もう、知らない間に担任教師が来てた。モブ君たちは知らん子を救うために

あ、知らない間に担任教師が来てた。キミ達たちに蜘蛛の巣を張らしたように、ばたばたとそれぞれの席に帰っていく。

普段なら教師の姿を見て嬉しいなんて思うことはないけど、今は自分を救ってくれる正義の味方のように見える。

ここは進学校だからって、入学式の翌日からガッツリ授業が始まるってのは、納得いかないけれども。

でもでかしたぞ、担任教師。その名は田中 太郎。

担当科目は体育。ホームルームを仕切るその姿も、どこかカッコよく見えるぞ。

それこそモブ感丸出しの名前だけど、がっちりとした体躯の強面（こわもて）先生だ。

おかげで僕は、彼らの『紹介して攻撃』から、命からがら逃げ出すことができた。

――いや、彼らの攻撃で、命を取られる可能性なんて、もちろんまったくゼ

口なのだけれども。

第６話：舞衣と亜依には彼氏がいる？〈２〉

＊＊＊

一時間目の授業が終わって、トイレに行こうと、僕が亜依のすぐ横を歩いてる時だった。

席に座ったままの亜依が、僕の顔を見上げて、ぼそっと「耕ちゃん、人気者だね」と、つっけんどんな感じで呟いた。

「あ、いやそんなことないよ」

「あ、いや、なんでもない。」

亜依は無表情のままで、その表情からは発言の意図がよくわからない。

だけどコミュ障の亜依のことだ。寂しい想いをしてるのかもしれない。

「ふーん。でもみんなに囲まれて、楽しそうじゃん？」

どこをどう見たら、あれが楽しそうに見えるんだ？

亜依の目は節穴かよ？

決してごまかしてるんじゃなくて、まったく楽しくなんかなかったし。

亜依は時々、こういう天然なことを言う。

「楽しくなんか、ないよ」

「嘘……」

「嘘じゃない」

亜依は無言で、そして無表情で、僕の顔を見上げてる。何かを言いたげだけど、亜依の口が言葉を発することはない。

「ホントだって。僕は亜依と話をしてるほうが楽しい」

――今度は本当に嘘をついてしまった。

亜依と話すのは嫌いじゃないけど、無愛想だし、僕のことを嫌ってるみたいだし……

決して楽しいって感じじゃない。

目の前の亜依は無表情だけど、きっと寂しい想いをしてるに違いないって思って、ついついそう言ってしまった。

「うぶっ……」

亜依が突然、何か言葉じゃない言葉を吐いて、そのまま顔を背(そむ)けて、下を向いた。

プッと笑うのを堪えたような、そうでなければブっと吐くのを我慢したよ

うな。

やべっ！　僕があまりにもわざとらしいことを言ったせいで、亜依は激怒したのか？

謝ったほうがいいのかも？

うつむく亜依の顔を、僕は腰をかがめてそっと覗き込んだ。

そこで僕が目撃したものとは……

普段は無表情な亜依が、にへらと表情を崩してる顔だった。そして「むふふ」とか気色悪い声を鼻から出してる。

なに？　どうした？

あまりに怒りが大きすぎて、亜依はおかしくなったか？

僕が覗き込んでるのに気づいた亜依は、急に焦った表情になった。

「な、なにしてるの耕ちゃん。そんなに顔を近づけて……あ、セクハラするつもりなんだっ!?」

周りに気づかれないように、決して大きな声ではないけれど、囁くように僕を糾弾してきた。

「あ、いや……ごめん」

セクハラなんて言われたらたまらない。

もちろん、そんなつもりは毛頭ないが……世間のおじ様達も『そんなつもりはなかったんだー!!』と言いつつ、極悪人に仕立て上げられるのが世の常だ。

僕は慌てて腰を伸ばして、英国の兵隊さんみたいにぴーんと背筋を伸ばした姿勢になってしまった。

突き刺さる氷のような亜依の視線……と思って亜依の顔を見たら……

ぅぇっ?

あれ？

亜依のヤツ、視線を落として、机の上を睨んでる。今度は机に喧嘩を売ってるのか？

バカか？

いや、それにしても……うなじが真っ赤だ。

もしかして、顔がニアミスしたことで、恥ずかしがってるとか？

――いやいやいや、それはないな。

亜依は僕のことを、男だなんて思っちゃいない。いや、それ以前に、人間とすら思ってないんだろう……たぶん。

きっと虫ケラ。ゴキブリやハエやカブト虫くらいにしか思ってないに違いない。

あ、最後のカブト虫は、せめてもの僕の希望的観測。

「さっさとあっち行け」
「えっ？」
「早くっ！」
うつむいたまま視線も合わせない、亜依の押し殺したような言葉に押されるようにして、僕は教室を後にした。

トイレで僕は、亜依のおかしなニヘラ顔と、真っ赤な首筋を思い出す。
――うーん、謎だ。
考えてることがわかりやすい舞衣と比べて、亜依が何を考えてるのかは、さっぱりわからん。

第7話：舞衣と亜依には彼氏がいる？〈3〉

＊＊＊

昼休みになると、またクラスの男子達がぞろぞろ僕の席にやってきた。みんな弁当を手にしてニコニコしてる。

「多岐川、一緒にメシ食おうぜ」

「多岐川君、弁当食べようか」

「タツキー、亜メンをデニー者こ！」

「イケメン　　屋、ベンを二人組」

誰がタッキーだ。

そんな男性アイドルのように呼ばれて、僕が喜ぶとでも思ったか？

それにしても、いきなり僕はこのクラスの人気者になってしまった。

もちろんそれは、舞衣が原因なんで、嬉しくもなんともないんだけれど。

それよりも、一人でポツンと座って弁当箱を開く亜依が、気になって仕方ない。

モブ君達と勇介は、そんな僕の気持ちを知るよしもなく、舞衣がどんな子なのか、僕を質問攻めにする。

「ねぇねぇ、舞衣ちゃんって、彼氏いないんでしょ？」

「ああ、いない」

「中学の時はいたの？」

「さあ、どうだろ？　わかんないなぁ」

舞衣は中学の時にも、彼氏はいなかった。

何人かから告白はされたようだけど、その都度断ってた。

理由を訊くと、『なんか違うんだよねぇ』っていう、わかったようなわからないような理由だった。

僕はそのことを知ってるけど、『彼氏はいなかった』って答えたら、またこの男子達は……

『なんであんなに可愛いのに、彼氏がいなかったの？』などと、根掘り葉掘り尋ねてくるに決まってる。

それが面倒くさいから、あえて知らんフリをしといた。

そしたら彼らは、僕が舞衣と同じ中学だったと偉そうに言っても――いや、別に偉そうになんか言ってないんだけど――そんなに親しくはなかったん

だろうって、勝手に推察したようだ。
僕にとっちゃあ、その方が都合がいい。
「舞衣ちゃんって、何か部活入るのかなぁ？」
「なんだ高木。もしかして、お前舞衣ちゃんと同じ部活に入ろうとしてるのか？」
モブ君一号が驚いた声を上げると、高木勇介はにやりと笑う。
「部活の種類によってはな。……で、耕平。舞衣ちゃんは中学では、何の部活やってたんだ？」
僕は一人で弁当を頬張る亜依が気になりながらも、この勇介の質問の前までは、なんとかまともに受け答えをしてた。
――ん？
誰だ、あれ？

だけど食事中の亜依に近づいて、声をかける男子の姿が目に入って、僕の意識は完全に亜依の方に奪われてしまった。

その男子生徒は亜依とふた言、三言言葉を交わした後、亜依の前の席に、亜依の方を向いて腰かける。

そして弁当箱を机の上に広げ始めた。

なんだー!?

なんで見知らぬヤツが、亜依と一緒に弁当を食べてんだ？

いや、見知らぬヤツと言っても、顔は見たことがある。間違いなく同じクラスの男子だ。

しかも結構高身長で、爽やかな感じのイケメン。

でも同じ中学のヤツではない。だから誰なのかわからん。亜依ももちろん、よくは知らない相手のはずだ。

「なあ、井戸ー！　ちっこいぶるなよー」

「なぁ、兼立、もったいないぞなぁ。」

「えっ？　なんの話だっけ？」

勇介の声で現実に引き戻される。

「舞衣ちゃんが、なんの部活をしてたのかって話だよ」

「あ、ああ……そうだったな。中学の時はテニス部だ」

「ほぇ～っ、サイコーじゃん！　舞衣ちゃんのテニスウェア姿を拝めるなら、俺はどんなに苦しい練習だって、耐えられそうだよ！」

勇介がアホみたいに能天気な声を出してる。

おいおいマジかよ？

テニスってのは、見た目以上にかなりハードなスポーツだって、舞衣がいつも言ってたぞ。

勇介のそのナンパな精神で、ホントに耐えられるのか？

勇介にそう言ってやりたかったけど――僕の意識は、亜依とその前に座る

男子に向けるのが精一杯で、勇介のバカな発言なんかに構ってる余裕はない。

あんまりじろじろと見るのも気がひけて、チラチラと何度も亜依の方を盗み見た。

どうせ亜依のことだ。

氷のような無表情で防御力を最大限発揮するだろう――

そう思ってたのに、少し恥ずかしげな顔つきで、薄くだけど笑みを浮かべてるではないか！

マジかよ？　なんで？

――いや、『なんで』はおかしいな。

せっかく亜依が、クラスメイトとコミュニケーションを取ろうとしてるん

だ。

その姿を祝福することはあっても、疑問を持つことなんてないはずだ。

――疑問？

いや、違う。僕の今の『なんで？』は、疑問じゃなく拒絶だ。もしくは嫌悪。

それこそなんで、僕は拒絶なんて気持ちを少しでも持ったのか？

いやいや、あり得ねぇ。

亜依にとって好ましい状況なんだから、祝福してやれよ。

――この素晴らしい状況に祝福を、だ。

「なあ耕平。お前は何か部活入るん？」

また勇介の声で現実に引き戻された。

「いや、僕は中学でも帰宅部だったし、考えてない」

「そっかぁ」

――そう言えば、亜依はどうすんだろ……部活。

アイツは中学の時は、文芸部の一人幽霊部員だった。

亜依が辞めると廃部の危機とかで、文芸部に籍は置いてたけど、時々部室で何か自由に遊んでただけみたいだし。

それにしても……

なんで亜依は男と一緒に弁当を食べて、少しとは言え、照れ笑いを浮かべてるんだよ。

亜依を祝福するって決めたばっかだけど、なんだか胸の奥のモヤモヤしたものが消えることはなかった。

第8話：舞衣と亜依には彼氏がいる？〈4〉

＊＊＊

一日の授業が終わって、生徒たちが三々五々帰って行く。

珍しく亜依がさっさと立ち上がって教室を出るのを見て、僕は慌てて帰り支度をした。

「なあ耕平。帰りにマックでも寄ってかね？」

「あ、えっと……悪い。今日はちょっと、早く帰んなきゃなんないんだ」

「あ、そうなの？」
「ああ、また今度な」
「ああ、バイバイ」

早く帰んなきゃならない用事。そんなもんはない。単に亜依が気になるだけだ。

下校路で追いついて、一緒に家まで帰ろう……

そう思って、早足で廊下から正門まで歩く。

校庭に柔らかく舞い散る桜の花が、まるで僕に『落ち着けよ』って言ってるみたいだけど、僕の心はまったく落ち着けない。

正門を出たところで、少し先を歩く亜依の後ろ姿を見つけた。

――相変わらず、背が低いな。

いや、そんなことはどうでもいいんだ。ちっちゃくて可愛いんだから、それはそれでいい。

そして亜依の横には――
男子生徒の姿があった。

少し距離を置いて、亜依の後ろ姿を追う。
なんだか無性に胸がざわざわする。
くそっ、なんだよ、この気持ち悪い感じは。
今まで経験したことのない感覚だ。

亜依とあの男子は、どこまで一緒に帰るのかと、もやもやしながら後をついて行く。すると途中の角で、男子はまっすぐに行き、亜依は左に曲がった。

まっすぐ行くと駅の方だから、男子は電車通学なんだろう。

左に曲がると、僕や亜依たちの家の方になる。

別れ際、男子生徒は亜依に手を振ったけど、亜依の方は軽く会釈しただけのように見えた。

亜依のその素っ気ない素振りに、なぜかホッとする自分がいる。

――何にホッとしたのか、よくはわからないけれど。

二人が別れたのを見て、僕は歩を早める。

亜依が曲がったのと同じ角を左に折れて、彼女の姿を目で追った。

――いた。

僕はさらに早足で亜依の背中を追いかける。普段こんなに早足で歩くのは、恐ろしい形相の亜依から逃げる時くらいだ。

なんて声をかけたらいいんだろう。

胸の鼓動がどんどん高まるのを感じる。

その鼓動の高まりは、早足が原因じゃないことなんてわかってる。

「亜依、今帰りか？」

亜依に追いついた途端、なんの考えもなしに、僕は彼女の背中に声をかけていた。

亜依が振り返る。黒髪のショートヘアがふわっと揺れた。

「うん、バイト。（おとこ）

「あ、バカ男、とうしたの？」
「誰がバカ男だ？」
「ここには耕ちゃんしかいないけど……もしかしてあんた、女？」
「男だ。疑問はそっちじゃない。『バカ』の方だ」
「ああ、なるほど。アホ男の方が良かった？」
「うるせぇ、アホ女」

亜依はひととおり罵倒を言い終えて満足したのか、また前を向いて歩きだした。

僕も並んで歩く。

「今、帰りだよ」

えっ？

――ああ、最初に僕がかけた言葉に、今さら返事したのか。

亜依って、ホントに変なヤツ。

でもそんなことよりも、僕の心を一杯に満たしてる思いは……

『あの男は誰？　何を話してたんだ？』

――それだけだ。

「あのさ、亜依」

「なに？　アホ男（おとこ）」

まだ言うか？

でもそこを突っ込むと、肝心な話が進まない。

僕は反論したい気持ちをぐっと抑える。

「さっきまで一緒にいた男子、昼メシを一緒に食べてた人？」

亜依はびっくりしたような顔を僕に向けた。

「見てたんだ……」

「ああ」
「いつから？」
「さっきの角を曲がる、ちょっと前からかな」
「ふーん……そうだよ。おんなじ人」
亜依は僕の視線から逃れるように、また前を向いた。
なんだ？　何かやましいことでもあるのか？
「良かったな、亜依」
「何が？」
「仲のいい友達ができて」
「仲のいい友達？」
亜依は僕のセリフをそのまま返した。
お前はオウムか？

それとも山びこかい？」

「彼はそんなんじゃない」

亜依が口にした『彼』という言葉に、どっくんと心臓が跳ねた。

この短い間に、亜依はあの男と、どこまで仲良くなったんだろう？

――いや、待て。

僕には関係ないことだよな。

それに亜依に親しい友達ができるのは、喜ばしいことのはずだろ？

「そんなんじゃないって……じゃあ、どんなの？」

「今日初めて話したのに、なんか、ずけずけ踏み込んでくるんだ」

「踏み込んでくる？」

あ、今度は僕がオウム返しをしてしまった。

僕こそ、オウムか、もしくは山びこだ。

「亜木みりこさん、支店はいるの？　なんてこんきなり丸いてくる　こ

「昼休みのとき、彼氏はいるの？　なんていきなり訊いてくるし」

「えっ？」

なんだアイツ。めちゃくちゃ肉食系っぽいじゃないか。

こんな地味で根暗な亜依に声をかけるなんて、どういう了見だ？

こういう暗めのメガネ女子が好みなのか……

それとも実は亜依は結構な美少女だって見抜いたのか？

亜依は舞衣と双子だし、顔もよく似てる。

つまり亜依だって、メガネを取って髪型を綺麗にしたら、舞衣と同じくみんなから美少女って呼ばれるはずだ。

「……んで、亜依はどう答えたんだ？」

もちろん亜依には彼氏なんかいないから、『いない』って答え以外あり得ないんだけれど……

「昼休みの時は、さあねぇってごまかした。そしたら放課後、帰ろうとしたら

また寄ってきてさぁ」

ああ、だから下校の時も一緒にいたのか。

「またしつこく、彼氏がいるかどうか訊いてくるんだ」

「ああ、そうなのか。しつこい男はダメだね」

「え？」

亜依が突然僕を見た。きょとんとしてる。

「どうした？」

「いや、耕ちゃんが、他の人をダメなんて言うのは珍しいなと思って……」

まあ確かに。僕はあんまりこだわりが強くない方だし、他人を批判するようなことはめったに言わない。――亜依に対して、は別だけど。

だけど今は……ついついあの男子のことを悪く言ってしまった。

反省だ。自省だ。猛省だ。

「で、亜依は……どうした？」

「気になる？」

その言葉と同時に、亜依の鼻から、フッと息が漏れたような気がした。

第9話：舞衣と亜依には彼氏がいる？

〈5〉

くそっ、今亜依（あい）は、鼻で笑った。僕をバカにしたよな？

間違いなくバカにされたよな？

気になるなんて、絶対に言ってやらねぇ。

意地でも、そんなことは言わん!!

「うぐっ……気になんか……なる」

ああ、なんで思ってることと、違う言葉が口から出るんだよ。

これで間違いなく、亜衣にバカにされるよな。

これて間違いなく亜依に絶対にバカにされるな。

へへーん気になるんだぁ、とか、また鼻で笑われるに決まってる。

くそっ！

……って思いながら亜依の顔を見たら、なぜか優しい感じの笑みを浮かべてる。

――ん？　なに？　どうした？

「そっか。あのね……彼には、『私、彼氏がいるからごめんね』って言っといた」

へっ？

――ええ～っ!?

心臓がばくばく暴れだす。

本日の最高血圧を余裕で更新する勢いだ。

「あ、亜依……お前、彼氏がいるのかっ!?」

思わず飛び上がりそうになった。

なんで？

彼氏ができたんなら、なんで僕に言ってくれなかったんだよ？

いくらなんでも、そりゃないだろ？

いや、別に、亜依がわざわざ僕に報告する義務なんかないのかもしれないけれど、それはあまりにも寂しすぎやしないか？

亜依にとって僕はやっぱり、たったそれだけの存在なのか？

――いや待て。冷静になろう。

亜依は僕を嫌ってる。

ということは、彼氏ができたとしても、わざわざ嫌いな相手に報告するまでもない。

ただそれだけのことだ。

逆に言うと、報告してくれなかったことが、亜依が僕を嫌いだという証拠だとも言えよう。

そうなんだ。ただそれだけのことだ。

「耕ちゃん……急に飛び上がったり、青い顔をしたり、忙しいねぇ」

ん？

確かに飛び上がりそうにはなったけど、もしかして僕はホントに飛び上がってた？

そんなカッコ悪いリアクションを、無意識にしてしまってたのか、僕は……

「いや、そりゃ、びっくりするだろう。亜依に彼氏がいたなんて……」

マジで、真顔な僕を見て、亜依はぷっと吹き出した。

「このバカ男（おとこ）！　彼氏なんかいないって。あんたは、そんなこともわかんない

の？」
「えっ？　どういうこと？」
「付きまとわれるのがうざいから、嘘をついただけ」
「そうなのか!?」
「うん」
亜依は楽しそうに笑ってる。
亜依のこんな笑顔を見るのは久しぶりだ。
笑うとやっぱり、亜依も相当可愛い。例えメガネをかけていても。
「どうしたの、耕ちゃん？」
「なにが？」
「ホッとしたような顔をして」
「ばっ、バカ女!!　誰が……誰がホッとなんかするんだよ！」
「ホッとしたんじゃない？」

「なぁ、どしたん？」

「違うっ！　断じて違う！」

僕が強い口調で否定したら、亜依は「ふぅん……」って言ったきり、寂しそうな顔でうつむいた。

ずるい。ずるいぞ亜依。

お前は普段は僕を罵倒して、僕のことを嫌いなくせに……僕が亜依のことを邪険に扱うと、すぐにそんな顔をする。

そんな顔をされたら、本当のことを言うしかなくなるじゃないか。

「ごめん、亜依。正直に言うよ……ホッとした」

「ふぅん……」

おいおい、僕の答えが変わっても、リアクションは同じかよっ！

だったらわざわざ言い直した意味がないじゃないかっ！

亜依の顎を思い切り極悪な表情で睨みつけてやろうと思って見たら、亜

依は耳まで真っ赤にして、満足そうに微笑んでる。そして亜依は僕の目を見つめて、ボソッとつぶやいた。

「『彼氏がいる』……かぁ……」

「はぁ？　なんだ亜依。やっぱ彼氏が欲しいのか？」

なんだよ。また胸がざわざわする。

もしかして亜依のやつ、誰か好きな人がいるのか？

「あ、いやいや……なんのことかなぁ？」

「いや、今、彼氏が欲しいようなニュアンスのことを言わなかったか？」

「空耳でしょ！」

「空耳なもんか！　確かに言った！　誰か好きな人がいるのか？」

「内緒っ!!」

そう言ったあと亜依は急に僕に背を向けて、タッタッタッと走りだした。

亜依のショートカットのぼさぼさ頭が、ふわふわと揺れてる。
僕は亜依の背中を追いかける。
「ちょっと待てよ、亜依！　内緒ってことは、いるってことなんじゃないのか!?」
亜依の背中に投げかけた言葉に、亜依は肩をピクっと震わせたように見えた。
そして亜依は急に立ち止まって、くるっとターンして、こちらを向く。
膝下のダサい長さのチェック柄スカートが、優雅にふわっと巻くように揺れる。
「知るかー、このバカ男(おとこ)!!」
亜依は右手の人差し指を眼の下に当てて、ペロッと可愛い舌を出した。
誰が見ても、どう見ても、アッカンベーだ。

明らかに僕はバカにされてる。
なんで突然、バカにされなきゃならないんだ？
僕が亜依に、なにかしたか？

そして亜依はにやっと笑うと、またブレザーとスカートをふわりと揺らして、軽やかにターンをすると、家の方に向かって走りだした。

「おいこら、待て、亜依！」
「やだ！　待たねぇよっ!!」
僕は亜依を追いかける。
亜依の背中が、肩が、笑ってるように上下に揺れてる。
くそ腹立つヤツだ。
ごナビニ　ここなに楽　そうな亜依を、久　ぶりに見た。

たけど……こんなに楽しそうな亜依を、久しぶりに見た

まぁ、しょうがねぇ。

今日のところは、僕をバカにしたことは許してやろう。

僕は亜依に、いいように扱われてるんだろうけど、心がほわっとしたいい気分になったから、良しとしといてやることにした。

＝第二エピソード　完＝

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第3エピソード『亜依と舞衣はなんの部活に入る？』

第10話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？〈1〉

◇◆◇◆◇

高校に入学して三日目の朝。

僕が玄関を出たら、たまたま隣の家の玄関から一人で出てきた舞衣（まい）と、鉢合わせた。いつも二人で登校してるはずなのに、どうしたんだろ？

「一人？　珍しいな。亜依（あい）は？」

「珍しいでしょー　亜依は寝坊しちゃって、後から来るって」

相変わらず舞衣のロングヘアは、朝からキチンと整えられてる。小顔で鼻筋が通った綺麗な顔を、美しい黒髪がより一層引き立ててる。

丁寧にブラッシングをしてるんだろう。

黒い髪の毛の一本一本がツヤツヤと光って、いわゆる天使の輪が綺麗にできてる。

さすが男子から『超絶美少女』と呼ばれるお方は、髪の手入れも怠らない。

――亜依もこれくらい、綺麗に髪を整えたらいいのに。

「ねぇ、耕ちゃん。昨日、亜依と何かあった？」

学校への道すがら、歩きながら、舞衣が困惑した顔で尋ねてきた。

「えっ？　何かって？」

あったと言えばあったし、なかったと言えばなかった。

いつものように亜依が謎な言動をして、僕が翻弄される。

まあ歯磨きするくらい、毎日の習慣みたいなもんではあるが。

「なんかさぁ。変なんだよね、あの子」

「変？　何が？　亜依はいつも変だけど？」

「いや耕ちゃん。そういうことじゃなくってね……」

舞衣が苦笑いしてる。

舞衣よ。わかっておるぞよ。

もちろん冗談である。

でも……舞衣の言葉で、昨日亜依が、彼氏が欲しいようなことを言ったのを思い出した。

確かに今まで亜依が、そんな発言をしたのを聞いたことはない。超貴重生

物並みのレアさ加減だ。

舞衣が言う『亜依がなんか変』ということに、僕は妙に納得した。まあ元々、かなり変なヤツではあるけれど。

「昨日晩ご飯の時もその後も、なんかずうっとニヤニヤしてるし」

「へぇ～」

うん、確かにあの無表情な亜依が、ニヤニヤし続けるなんて、想像もつかない。何か悪いもんでも食ったか？　笑い茸（たけ）とか。

それとも思春期特有の、ついついスケベなことを思い浮かべてやっちまう『一人ニヤニヤ』か？

いや、男子じゃあるまいし。そんなワケはないか。――いや、わからんな、亜依なら。

二『なんかいいことあった？』って聞いても、『別にぃ～』しか言わないし、耕ちゃん、何か思い当たることはない？」

「う～ん……何かいいことか……」

亜依にとっていいこと？

昨日、そんなことあったかな……？

確かに僕は亜依に気を遣って、『気になる』とか『ホッとした』って本音を口にした。

……いや、亜依の作戦『寂しそうな顔をしたら、ちょろい耕平なんてすぐにあたふたするだろう戦術』によって、（いや、長いな、この戦術名）――言いたくもない本音を、口に出させられてしまった。

その結果、亜依は『してやったり』と思っただろう。

『耕ちゃんに恥ずかしいことを言わせてやったわい』と――亜依は、嫌いな相手、業こそ対、とても、ご留次を下げこころう。

三、僕に対して、さきたし溜飲を下げたことだろう。

そのせいか、別れ際は楽しそうな顔をしてたけどな。

だからと言って……あれがそんなに、夜もずっとニヤニヤするほどのことは思えない。

別に僕が、コテンパンにやられたワケでもないし。

「特に思い当たることは……ないな」

「そっか。またなんかわかったら教えてよ」

「ああ、わかった」

舞衣は、まだ謎が解けないモヤモヤがあるようで、スッキリしない顔をしてる。

でもまあ仕方ないよな。この世の中は、謎だらけだ。

冴えない僕なんかが、美少女の舞衣と仲良くしてることなんかも、多くの人にとっては、きっと謎なんだろうし。

「ところで耕ちゃん、部活はどうするの？」
「部活かぁ……まあ僕は、中学でも帰宅部だったからなぁ。まあたぶん何も入らない。そう言う舞衣は？」
「私は昨日、テニス部の部活見学行ってきたよ」
「入るの？　テニス部」
「まだわかんないけど……たぶん、入るかな」
「そっか。また高校でもがんばるんだな」
「うん、そうだね」
「舞衣のそんな頑張り屋なとこが、僕は好きだな」
「えっ？　耕ちゃん、朝っぱらから、何を言ってるんだか……」
舞衣が僕の背中をバシンバシン叩く。
照れ隠ししようとする舞衣の顔が、耳まで真っ赤だ。

いや、あの……舞衣よ。

好きだなんて、気軽に言った僕が悪かった。

普通に、人として好きだって意味なんだけど……

――まあ、舞衣が嬉しそうだからいいか。

「あ、そうだ耕ちゃん。亜依を誘って、文芸部の部活見学に行ってくれないかなぁ？」

ふと舞衣は、思い出したように僕の顔を見た。

まだ顔が火照った感じで、妙に色っぽさを感じる。

――って、僕は朝っぱらから、何を考えてるんだ。だけどそこは、僕も思春期男子。許してくれ、舞衣様よ。

「なんで？」

僕は舞衣をちょっとエッチな気分で見てしまったことなんて、おくびにも

出さないでクールに訊いた。

まさか……舞衣に悟られてないよな？

「あの子……あんな性格だから、なかなか自分一人で行けないかもしれない」

「だって中学では、ちゃんと入部しただろ？」

「いや、あれは……」

苦笑いする舞衣が言うには、中学の時はたまたま文芸部の部室の前を通りがかった亜依が、先輩部員にとっ捕まって、無理矢理入部させられたそうだ。

「でも今は亜依も、文芸部に興味を持ってるみたい。見学に行ってみたいなぁ……なんて言って、大っきなため息ついてたもん」

「そっか。わかったよ」

亜衣は？共かっ？

――亜依は二年生！

僕たちは、もう高校生なんだぜ？

なんで自分一人で行動できないんだよ？

ホントに仕方ないヤツだなぁ。

誰かがついてあげないと、やっぱダメなのか……

いや、待てよ。もし亜依が部活に入ったら――僕と帰宅部同士で帰りがたまたま一緒になって、帰り道で罵詈雑言を浴びせられるリスクを避けることができる……とも言える。

そうだよな。

よし、部活見学に一緒に行ってやるか。

「……でさ。もしよかったら、耕ちゃんも亜依と一緒に、文芸部に入部したら？」

「えっ？　なんで僕が？　僕は別に、文芸部なんかに興味はないし」
「いや、あの……あれよ。亜依がいるからさ……」
亜依がいるから？
舞衣はおかしなことを言う。
亜依は僕を嫌ってる。だから僕が文芸部に入るなんて言ったら、亜依は嫌がる。
妹が嫌がることをさせようとする姉ってどうよ？　舞衣ってそんな、意地悪な性格だったっけ？
「まぁ、考えとくよ」
「うん」
静かに微笑む舞衣を見て、僕は『悪いけど、舞衣の意地悪に加担はできないよ』と心の中で呟いた。

第11話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？〈2〉

＊＊＊

えらいこっちゃ、えらいこっちゃ。

遅刻寸前だ。寝過ごしちゃった。

昨日の夜はなかなか寝つけなくて、朝のアラームが鳴ってたのに気がつかなかった。

こんなことになるなら、全部拼うやんのせいだ。

こんなことになったのも、全部耕ちゃんのせいだ
あのバカ男があんなことを言うから悪いんだ。
耕ちゃんには、責任を取ってもらわなきゃいけない。

だってさ。耕ちゃんは舞衣のことが好きなくせに……

私が他の男子と二人でいたら、『気になる』なんて言うし。
私に彼氏なんかいないってわかったら、『ホッとした』って言うし。
そんなことを言ったら、私が喜ぶとでも思ったのか。
そう言っとけば、私からの悪口が減るとでも思ったのか。
――私はそんな、チョロい女の子じゃない。
耕ちゃんなんて、所詮、舞衣のことが好きなくせに。
そんな耕ちゃんに、あんなことを言われて、私が喜ぶはずがないじゃん。

「ぐふふ……」

あ、ヤバい。

年頃の女の子に、あるまじき笑い声が出た。

あのバカ男がそんな変なことを言うから、昨日の夜は、耕ちゃんのセリフを何度も思い出してしまったではないか。

――あ、いや。

天に誓って言うけど、別に私は耕ちゃんのそんなあざといセリフを、思い出したくて思い出したんじゃない。

あのバカ男（おとこ）が私を舐めて、私を籠絡（ろうらく）しようとなんかするから、腹が立って腹が立って、ついつい思い出してしまったのだ。

耕ちゃんのセリフを思い出してたら、舞衣は私がニヤニヤしてるなんて

言ってきた。

舞衣は私の顔を見て『何かいいことあった？』とまで訊いてきた。

――舞衣はいったい何を言ってるのか？

いいことどころか、私は耕ちゃんのセリフを思い出して、ハラワタが煮え繰り返る思いをしてただけだ。

別に――何もいいことなんか、起こってません。

もしも……もしも百歩譲ってだ。私がニヤニヤしてたんだとしたら、それはきっと、昨日の晩ご飯のキノコが、笑い茸（たけ）だったに違いない。

ベッドに入ってからも、何度も耕ちゃんの憎たらしい顔と言葉が頭に浮かんで、ついついニヤニヤして――あ、いや……ついつい腹が立って、なかなか寝つけなかった。

[illegible]

だから今朝の寝坊は、完全に耕ちゃんのせいだ。

うん、間違いなく、そうだ。

これは耕ちゃんに、何か詫びをしてもらわなきゃいけない。

――例えばスイーツを奢ってもらうとか。

――例えば頭を、撫で撫でしてもらうとか。

いやいやいや、間違えた。

そんなことは、私は望んでなんかいない。

あんなバカ男に頭を撫でられた日にゃ、私にバカが感染ってしまう。

そんなことをぼんやり考えてたら、つい耕ちゃんに頭を撫でられる場面を思い浮かべてしまった。

「ぐふふ……」

あ、マズい。

なんか、なんか、変態、なんてこと、だ。

私は、なんて恐ろしいことを想像してしまったんだろうか

あまりに恐ろしすぎて……また変な笑い声が口から漏れたではないか。

「あ……」

私が洗面所の鏡に向かうと、そこにはニヤニヤしてる自分の顔があった。

なにこれ？　なんでまだ私の顔は、ニヤニヤ笑ってるの？

――どうやら昨夜の笑い茸（たけ）が思いのほか強力で、まだ効果が残ってるようだ。

今から登校するのに、いくらなんでもこれはヤバすぎる。

私は両手で頬をパシパシ叩いてからメガネをかけて、気合いを入れ直した。

第12話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？〈3〉

＊＊＊

僕が教室に入ると、いつものように前の席の勇介が話しかけてきた。

「おはよー耕平」

「おはよ」

「……で、早速なんだが。耕平は、いつ舞衣（まい）ちゃんに俺を紹介してくれるんだ？」

た？」

舞衣を紹介するって、僕が勇介にいつ約束をした？

まったくそんな記憶はない。

勇介が僕に、舞衣を紹介して欲しいって言ってきたのは覚えてる。

ついでに、モブ君一号から三号まで、そろいも揃って同じことを言ったのも覚えてる。

だけど僕が、それを承諾した覚えなんか皆無だ。

「紹介するって、約束したっけ？」

「ああ、約束してくれただろ？」

――嘘つけ。してないぞ。

「まあ、そのうちな。それより勇介。テニス部に入るんなら、僕が紹介なんかしなくても、舞衣と同じ部員になれるだろー

「あ……ああ。それな。テニス部に入るのは辞めた」
「なんで？」
「親の遺言で、テニス部にだけは入るなって、言われてたのを思い出したんだ」
――嘘つけ。そんなバカ親はおらんぞ。
「どうせハードな練習をするのが、耐えられないと思ったんだろ？」
「耕平……なんでわかるんだ？　おまえ、エスパーか？」
「いや、お前の言動を見てれば、例え出会って三日目であっても、なんとなくわかる」
勇介は苦笑いを浮かべながら、「可愛い女の子がたくさんいる文化部はないかなぁ」なんてバカを言ってる。
「勇介、おまえ……すべての行動基準は女の子か？」

「ええっ!?　耕平は違うのかっ!?」

なぜにお前は、そんなに驚いた顔をする？

今にも目ん玉が飛び出しそうだぞ。

みんながお前とおんなじ判断基準を持ってるなんて思うな。

それにしても、今どき珍しい肉食系男子だな。

ただし勇介は、『肉を食いたくて仕方がないヤギ』って感じもする。

肉食系のヤギだ。

――結局、肉なんて食えずに、餓死する運命。

「なにを言ってんだ、勇介。僕は違うよ」

「嘘つけー！　耕平だって、スケベそうな顔してるぞ！　おまえ、絶対に女好きだろーっ!!」

おいおい、急にそんな、教室中に聞こえるような大声を出すなよ。

[illegible]

クラスの女子から、僕が白い目で見られてしまうだろ。

でも――今日は、亜依がゆっくりの登校で良かった。

もしも今の勇介の発言を亜依に聞かれたら、何を言われるかわかったもんじゃない……

教室にいる女子たちの反応が少し気になって、周りを見回そうと後ろを向いたら、ちょうど登校してきて突っ立ってる亜依と、バッチリ目が合った……

亜依はまったくの無表情で、だけどメガネの奥から射抜くような鋭く冷たい目つきで、僕をじっと見てる。

僕の背中を、凍てつく風が吹き抜けたような気がして、ぶるっと震えた。

――このバカ男はやっぱりスケベの塊か。スケベな男なんて早く死んでしまえ。今すぐ死ね。

僕を見つめる亜依の冷たい瞳がそう言ってる。

僕を睨む亜依の冷たい両眼が、そう言ってる。

僕はまさに、ライオンに睨まれたヤギだ。

もうすぐライオンに食われてしまう、悲しいおのれの運命を悟ったヤギだ。

――ま、待ってくれ、亜依！

僕はスケベなこととか、女好きを証明するようなこととか、一切何も言ってない！

勇介が勝手に、なんの根拠も脈絡もない憶測を述べただけだ！

なあ、わかってくれよ亜依!!

僕のそんな願いも虚しく、亜依は氷点下よりも冷たく、凍りつくような表情のまま、ぷいっと横を向いて、自分の席まで歩いて、そして静かに腰かけた。

亜依と舞衣が姉妹であることを悟られないようにしたい。だから僕はこのクラスでは、亜依と僕が元々知り合いであることはカミングアウトしていない。

なので僕から親しげに、亜依に話しかけることは憚（はばか）られる。

僕は――亜依がカバンから教科書を出して、粛々と授業の準備をするのを、黙って見つめることしかできなかった――

＊＊＊

「なあ、亜依。僕はなんにもしてないからさ。機嫌を直してくれ」

昼休みにトイレの前で一人でいる亜依を見かけて、僕は小声で話しかけ

た。

今日は休み時間の時も亜依が僕の方を見ることはなくて、ずっと無視されてるような気がする。

だから意を決して、昼休みを待って声をかけた。

「なんの話？」

「いや……勇介が朝に言ってたこと。僕は別にスケベなことなんか、あいつと話をしてないから」

「ふぅん……」

「いや、ホントだって！」

「わざわざそんなことを私に言うために、声をかけてきたの？」

「そ、そうだよ……」

「バカ男（おとこ）……」

「はっ？」

亜依が相変わらず無表情なままで、ぼそっとつぶやいたのが怖すぎる。

「何もやましいことがないなら、わざわざそんな言い訳をしなくてもいいでしょ？」

うわっ、この言い方は……完全に疑われてる。

容疑者扱いどころか、きっと亜依は犯人確定だと思い込んでる。

そのうち、『真実は一つ!!』とか言い出しかねない。

「いや、それは……勇介があんなことを言ったから、誤解されてるかもと思って」

「別にスケベでもいいんじゃない？　耕ちゃんだって男なんだから……」

亜依が――常々僕に毒舌を吐いてる、あの亜依が……

男のスケベを容認するような女だとは、到底思えない。

元々亜依には兼ってるところは言え、そこまで子悪党なような兼悪党が上手く

テメ亜依には嫉妬れてるとは言え、さらに女度な女度な」呆したに違いない。

もう何を言っても無駄だ。この女は、僕の言葉を言い訳にしか捉えない。

わ……話題を変えよう。

「あ、あのさぁ……亜依」

「なによ？」

「今日の放課後、一緒に文芸部の部活見学に行かない？」

「えっ……？　耕ちゃんが？　文芸部？　興味あるの？」

亜依は一瞬固まったけど、ちょっと意外そうな表情を浮かべてる。

よしっ、話題変更作戦は、なかなかの成果を得たようだ。

「まあちょっとね。一緒に行こうよ」

「あ……えっと……考えとく」

考えとく？

もしかして作戦失敗か？

「あれっ？　亜依？」

亜依はメガネをクイっと押し上げて、『考えとく』とだけ言い残して、教室の方に帰っていってしまった。

やっぱり僕を軽蔑して、話すことすらも嫌になったのか……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

カクヨムコン五に参加しています。

「面白い」「続きを見たい」「応援したい」と思っていただけたら、この下の★を付けてくださいませm(＿＿)m

第13話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？〈4〉

＊＊＊

朝っぱらから耕ちゃんと高木君が、バカな話をしてるなぁ……って思いながら、私は教室に入って席に着いた。

耕ちゃんがスケベな話をしてるなんて意外だけど、もう私たちも高校生。特に男子なんか、そんな話をするなんてことも、当たり前かもしんない。

どって私こうは、大人の皆段を上ってる最中なんごとの。

カーテンの隙間を一ミリも見逃さないように
――なんちゃって。
そんなことはすっかり忘れてたのに、昼休みにわざわざ耕ちゃんが、私に言い訳をしに来た。やっぱりバカだ、この男。
高校男子がエッチなことを考えるなんて、別に構わないって思ってるのに。
私だって時々エッチなことを考え……ゲフンゲフン。
いやいや、ヤバいヤバい。
危うく危険思考に支配されるところだった。
でも――必死になって言い訳してる耕ちゃんの姿が、すこぶる可愛い。
頭をかいて、苦笑いを浮かべて、私に取り入ろうと一生懸命。
――そっかぁ。私にわざわざ言い訳をしたかったんだねぇ。
あっ、ダメダメ。危うくあのバカ男に騙されるところだ。

耕ちゃんは舞衣のことが好きで、私のことなんか、なんとも思っていないはず。

そんな男を可愛いなんて思ってしまったら、最後に泣くのはきっと私。

あのバカ男の言動にほだされないように、気をつけなければならない。

それにしても……

耕ちゃんが文芸部に興味がある？

ホントに？

耕ちゃんがまあまあ本好きなのは知ってるけど、わざわざ文芸部に入るほどだとは思えない。

いったいどういうこと？

もしかして――私と同じ部活に入りたがってるとか？

ぐふふ……

ああっ、また年頃の女の子にあるまじき笑いが出ちゃったじゃないの！

昨日の夜から、私やっぱり……おかしい。

お昼になっても、まだ昨夜の笑い茸の効果が切れてないなんて……

あの笑い茸、よっぽど強力なヤツだったんだ。

困るよ、お母さん。そんなに強力な笑い茸を買ってくるのは、もう金輪際やめにしてほしい！

（――って言うか、笑い茸なんて、お母さんはいったいどこで買ってきたのだろう？）

それにしても、あのバカ男。

部活見学に行きたいんなら、一人で行けばいいのに。

――耕ちゃんは子供かっ!?

私たちは、もう高校生なんだぞ？

なんで自分一人で行動できないの？

ホントに仕方がないヤツだなぁ。

誰かがついてあげないと、やっぱダメなのか……

えっと……耕ちゃんと一緒に、文芸部の部活見学、行ってあげることにしよう。

あのバカ男のために――

＊＊＊

放課後。文芸部の部室前の廊下に、僕と亜依（あい）は立っていた。

――いや、立ちすくんでいたと言った方がいいかもしれない。

なぜならば、地味なはずの文芸部室の引き戸が、違和感に満ち溢れた派手さで飾られていたからだ。

画用紙を何枚も貼り合わせて、そこに色とりどりのマジックペンで書かれた、新入生歓迎のメッセージ。

『歓迎!!　ようこそ魅惑の文芸部へっ！　～文芸部で、キミも青春を謳歌しよう！　～』

――魅惑？　青春を謳歌？

およそ文芸部のイメージとはかけ離れた、似つかわしくない煌（きら）びやかなワードが、その画用紙の上に踊ってる。

しかも『踊ってる』っていう表現が、単なる比喩ではないくらい、下手くそ

な文字だ。

大きさがバラバラで、一文字ずつ右に傾いたり左に傾いたり――ホントに文字が踊ってる。

いったいどんな人物が、この扉の奥の部室に巣食っているというのだろう？

マッドサイエンティストのような、狂気に満ちた人物？

それともこの文言（もんごん）どおりの、明るく爽やかな人物？

まだ見ぬ謎の文芸部員の姿を想像して、僕は身震いを覚える。

一緒に部活見学に行こうと亜依が声をかけてくれたから、舞衣との約束を果たせると、僕は正直ほっとした。

だけど今――やっぱり来なけりゃ良かったと、僕は後悔の海を航海してる。

「なにボーッと突っ立ってるの、耕ちゃん？　入るよ」

――って、おい！

そう言いながら亜依は、既に部室の扉に片手をかけてる。

なんてヤツだ!?

コイツには、恐れという感情はないのか!?

こんなに違和感バリバリの部室を見てもなんら動じることなく、まるで缶コーヒーのプルトップを開けるがごとく、いとも簡単に部室の扉を開け放とうと言うのか、亜依よ!?

僕のそんな動揺をまったく意に介さず、亜依は勢いよくガラッと扉を開けた。

なんで？

なんでそんなに飄々として、部室に訪問できるんだ？

それならば僕の付き添いなんか、まったく必要ではなかったのではないか？

僕のそんな疑問などサラッと置き去りにして、亜依は何の躊躇（ためら）いもなく、開けた扉から部室に足を踏み入れた。

――ホントに大丈夫なのか、亜依!?

何か恐ろしい生物が住んでたりしないか？

僕は亜依の後ろについて、恐る恐る部室内に歩を進める。

そしてぐるっと室内を見回すと、部屋の中央に、静かに佇む一人の小柄な女子生徒の姿が目に入った。他には誰もいない。

部室の右手には黒板があって、ここが元々は普通の教室であったことを、今でも主張してるかのようだ。

その黒板には、白や赤や黄色のチョークで、『welcome！　ようこそ文芸部へ！』と、人リコと同じハンドアートで書いてある。

部への『』と、入り口と同じくプラスチック製の札が踊った文字で書いてある。

その周りには念入りにも、色とりどりの紙で作ったペーパーチェーンやら、ペーパーフラワーが飾りつけられてる。

――お誕生日会かよっ!!

部屋の左側には、本棚が三台設置されてて、色んな本がビッシリと収まってる。

これを見たら、ようやくここが文芸部の部室だということが納得できる。

それ以外はパーティルームかよって感じ。

中央に立っていた女子生徒が、つかつかと僕たちに歩み寄ってきた。

第14話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？〈5〉

文芸部室の中央に立っていた女子生徒が、つかつかと僕たちに歩み寄ってきた。

黒髪のおさげと無表情なこぢんまりとした顔に、黒縁メガネ。

やはりオタク臭をまき散らかしてる。

その女子が、ボソボソと低い声で呟いた。

「ようこそ文芸部へ……いらっしゃい……」

――テンションひっくう！

――ミスミ……？
幼い顔つきのその少女は、自分は文芸部・部長で、三年生の黒木（くろき）　久美（くみ）だと名乗った。
――この童顔で三年生かよ？
黒木部長に向かって亜依も、これまたボソボソと低い声で返事する。
「貴理山（きりやま）　亜依（あい）、新入生です……部活見学に来ました……」
――こっちもテンションひっくう！
コイツら二人……似た者同士だっ！
もしかしたら、亜依はこんなタイプの人だったら、気が合うかもしれない。
黒木部長は今度は僕の方を向いて「あなたは……？」と、またボソボソと尋ねた。
「あ、同じく新入生の多岐川（たきがわ）　耕平（こうへい）です」
黒木部長は僕からすっと視線を逸らして、亜依の顔を見つめる。

黒木部長は僕から視線を逸らせず、亜依の顔を見つめる。

亜依も無言で部長の顔を見つめてる。

メガネ女子とメガネ女子の対峙だ。

おいおい、僕は無視かよ……

黒木部長は無言で亜依を見つめてる。

黒木部長は、まだ無言で亜依を見つめてる。

黒木部長は、またまだ無言で……って、いつまで無言で見つめとんねん！

――と思ったら、ようやく黒木部長が口を開いた。

「貴理山さん……あなた合格。入部を認めましょう」

「あ……ありがとう……」

亜依はフッと息を漏らして、薄く微笑みを浮かべてる。

はぁっ!?

なんだって!?

空耳……じゃないよな？

部長さんは、確かに『合格』とか言った。

この文芸部、入部テスト――と言うか面接があるってのか？

マジか？　こんなに閑散としてる部活なのに？

いったいどんな選考基準なんだ？

亜依が微笑んだのを見て、黒木部長も小さな唇からフッと息を漏らして、微笑を浮かべて、二人で見つめあってる。

もしかして――

この二人にとって今の微笑み合いは、大爆笑なのではっ!?

今のやり取りを一般的な人たちのテンションで再現したら……

『貴理山さん！　あなた気に入ったわ！　合格よっ！　入部を認めるわっ！』

『えっ？　ホントですかっ!?　やったー！　ありがとうございます!!!!　嬉しいです!!』

『これから一緒に文芸部を盛り上げていきましょうね、あははっ！』

『わかりました！　お願いします！　あははーっ!!』

――きっとこれくらいのテンションに違いない。

僕が呆れて二人の姿をぼんやり眺めてたら、黒木部長は今度は僕の顔をジーっと見始めた。

やめてくれ。そんなに無表情な顔で見つめられるのは怖すぎる。

もしかして今、僕も部長から品定めをされてるのか？

いや、僕は五反田さんと違ってここナビで、文芸部に入る気はないから、さ

いや……僕は亜依の件を済ませたばかりで、文芸部に入る気なんてさらさらないから。

「多岐川くん……」

「ふぁっ、はいっ？」

「あなた……不合格よ……」

「はぁっ？」

いやいやいや、待て待て待て！

僕が不合格っ!?

あ、いや……別に僕は文芸部に入りたいなんて、これっぽっちも思ってない。

だから不合格でも、なんら不都合はない。

不都合はないんだけど……いきなり不合格なんて言われると――しかもこんなコミュ障女子に宣言されると、なんだか僕の存在価値を、根底から否

定された気がする。

『お前なんて生きてる価値がない』

……いや別に、そこまでは言われてないんだけど、なんだかそう言われた気がするから不思議だ。

ショックで頭がくらくらする……

「冗談……」

「へっ？」

「冗談です……あなたも合格……」

「冗談……ですか？」

「はい……面白いでしょ……？」

お、面白くなんか、ねぇーっ！

なんなんだ、そのノリは？

全然笑えないからっ！

「くっくっくっ……」

――って、横で亜依が笑っとるじゃないかーっ！

今の黒木部長の冗談がツボにハマったのか、それとも僕の動揺がおかしいのか……

どっちにしても、僕は面白くない。

「結構です。僕は入部しませんから」

「「えっ……？」」

なんだなんだ？

亜依と部長が同時に驚く声を上げた。

とにかくこの二人は、気が合うようだ。

それならば尚更、仲良く二人で部活をすればいい。

[illegible]

僕には関係ない……

「部長さんはともかく、亜依までなんて顔をしてるんだ？　僕は亜依とおんなじ部活なんて入らないから……」

どうせ亜依も、嫌いな僕と毎日部活で顔を合わせるなんて嫌だろうから、『だから安心しろ』って言おうとして亜依を見た。

亜依は眉間に皺をよせて、頬をピクピクさせてる。

あ――亜依がめっちゃ怒ってる!?

……と思ったけど、悲しんでるようにも見える。

いやまさか、そんなことはあるまい。

僕が文芸部に入らないからと言って、亜依が何を悲しむことがあろうか？

「なんで？」

「なんで？」
「はっ？」
「なんで入らないの？」
「いてっ！」
突然脛（すね）に衝撃を感じた。なんだ？
亜依が言葉と同時に足裏で、ガシっと僕の脛を蹴ってきてた。
なんで蹴られなきゃいけないんだよ？
「えっ？　だって亜依は、部活でずっと僕と顔を合わすなんて、嫌だろ？」
「えっ？　……ああ、そ……そうだよ。バカ男と一日中一緒に過ごすなんて嫌だ」
亜依は、急に慌てた表情になって、顔を大きく左右に振ってる。
ほれ見ろ。やっぱり嫌なんだろ？

「じゃあ、いいじゃんか」
「そ、そうだ……ね。そのとおりだ。耕ちゃんなんか、文芸部に入るな」
「『なんか』ってなんだ？　なんかそう言われたらムカつく」
「じゃ……じゃあ入る？」
「入らない」
「はぁっ？　じゃあいい。絶対に入るな」
亜依の眉が片方、ピクっと吊り上がった。
ヤバ……これは亜依が怒ってるサインだ。

第15話：亜依と舞衣はなんの部活に入る？〈6〉

「ちょっと……あなた達……」

「はい？」

黒木部長が僕たちの間に、割り込むように入ってきた。

「あなたたちは……元々知り合い？」

「あ、はい、そうです」

「わ、私たち、幼なじみなんです……」

「へぇ　そうなんだ　ー

「……ちょっとだけ……」

黒木部長は亜依の言葉を聞いて、黒縁メガネの奥で目を少し見開いた。

たぶん普通の人なら、目を大きく見開いてるくらい、すごく驚いてるに違いない。

「二人で仲良く部活見学に来たんだから……多岐川くんも……入部すればいいでしょ……？」

「「二人で仲良く!?」」

僕も亜依も、思わず上ずった声を出してしまった。部長さんは何か勘違いしてる。

「ち、違います。この多岐川くんが……一人では部活見学に来れないなんて、情けないことを言うから……一緒に、来てあげたんです」

「はぁっ？　それはこっちのセリフだ。亜依が一人で行けないから、僕が一緒

に来てやったんだよ」

「はっ？　なに寝言、言ってんのか、このバカ男（おとこ）は……」

「バカはお前だ。いいカッコすんな」

「その言葉、そっくりそのままバカ男に返してやるっ！」

僕ら二人の真ん中に立って僕と亜依を交互に眺めてた黒木部長が、突如両手を横に広げた。

僕と亜依の目の前に手のひらを見せて、車をストップさせる交通整理員のような決めポーズ。

「貴理山さん……いいかな……？」

「な、なんでしょう……？」

「あなたは既に文芸部員……だから部長の命令は絶対なの……」

なんだ？　文芸部なのに、運動部みたいなノリのことを言ってるぞ？

しかもこんな大人しそうな女子が言うセリフとしては、めちゃくちゃ違和感がある。

マジで言ってんのか？

亜依もどう答えるべきか対応に迷ってるみたいで、無言で部長の顔を見てる。

「文芸部は一人でも多くの部員が必要……なので……多岐川くんに絶対に入部してもらいなさい。それが……私の、部長としての……絶対的命令。それが……あなたの……果たすべき使命」

はっ？　この部長さん……何を言ってるんだ？

スタートしたばっかのゲームプレイヤーに使命を伝える、マザーコンピューターか何かか？

……ヤバい人だ。

ちょっと怖いかも……

まあ亜依も、こんなバカな命令に従うことなんて、ないよな？

「なぁ、亜依……」

黒木部長越しに亜依を見たら、いつものような氷の視線で、僕を睨みつけてる。

「耕ちゃん……文芸部に入りなさい」

うぉっ、マジか？

急に変わるのかよっ!?

僕と一緒の部活なんて、亜依は死んでもやりたくないくせに。

「嫌だ。入らない。なぁ亜依。いくら部長さんの命令だからといって、従わなくてもいいんだぞ」

亜依はうぐっと息を飲んで、僕の顔を見つめてる。

これは嬉しい誤算だ。

これは僕なりの、亜依への気遣いだ。

きっとコミュ障の亜依は、部長の命令に逆らえないんだ。

だから僕が、あえて部長の目の前で、そんな命令に従わなくていいと言ってあげる。

――なあ亜依。お前は、僕と一緒の部活なんて嫌なんだろ？

僕だって、毎日毎日毎日、亜依と一緒に部活で放課後を過ごすなんて……

あ……そんな日々を、つい頭に思い描いてしまった。

結構、楽しそうだ……

――いやいやいや、ヤバい。それはない。そんなことはない。

楽しいなんて妄想を描いたら、えらいことになる。きっと罵詈雑言を浴びせられる毎日となるだろう。

「わかるだろ、亜依。部長さんの言うことなんか聞くな」

僕が亜依に囁くように語りかけたら、黒木部長が一歩前に出て、また僕と亜依の間に立ちふさがる。

「ダメ……部長の命令は絶対的……」

亜依に向かって部長がそう言うと、亜依は何かを決心したような表情を浮かべて、メガネをきらーんと輝かせて、僕の顔をグッと睨みつけてきた。

「な、なんだよ亜依？　やるのか？」

また蹴られそうな気がしたから、僕はぐっと身構えた。

来るならこいよ。蹴り返してやる。

だけど――そうじゃなかった。

亜依はなぜか切なげな表情で僕を見つめて、思わぬセリフを吐いた。

「耕ちゃん……私と一緒に、文芸部に入ろ？」

「えっ？」

「耕ちゃん……お願い……」

「は、はい……」

文芸部なんかには入らない。僕はそう決心してた……はずなのに。

あっさりと、僕は素直に承諾の返事をしてしまった。

なぜならば、亜依が『お願い』って言葉を、そのピンクの小さな唇から吐いた時――

亜依は、目を潤ませて少し微笑んで、コクっと小首を傾げた。
それにアイツの瞳には、懇願するような、すがるような色が浮かんでた。
まるで可愛い恋人がするような、甘えるような、そんな姿。
いくら黒木部長の命令を遂行するためだとはいえ……
ズルい。相変わらずズルいぞ亜依。
僕は――きゅんとしてしまってた。
そんな僕には、亜依のお願い攻撃を跳ね返すだけの防御力なんて、これっぽっちも残ってなかった。
僕はきゅんとして――そして死んだ。
だから「はい」なんて素直な言葉が、僕という死人の口から出たんだ。
「これで　二人の人部が決まり　－

「これで……二人の二人部活決定……」

黒木部長の声に、我に返る。

亜依はホントにそれでいいのか？

嫌々部長の指示に従ったんだろ？

亜依の顔を見たら、亜依はサッと顔を背けた。やっぱり後悔してるんだ……

横からちょいと覗き込んだら、横顔だけど亜依の表情がチラッと見える。

なんだコイツ？

僕が同じ部活に入るっていう、あまりに予想外の展開に、気が触れたか？

亜依の顔はなぜか――にへらっと気色悪い笑顔に包まれてた。

横で黒木部長が、ボソボソっと何かを呟いたけれども、亜依の表情に気を取られてた僕には、よく聞き取れなかった。

だけどこの時――僕は亜依と一緒に、文芸部に入部することが確定した

のであった。

＝第三エピソード　完＝

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第4エピソード『文芸部部長・黒木久美』

第16話：文芸部部長・黒木久美〈1〉

◇◆◇◆◇

昨日部活見学を終えた後、黒木部長は私に顔を寄せて、小さな声でこんなことを言った。

『明日……ちょっと話したいことがあるから……お昼休みに貴理山（きりやま）さんだけで、私の教室に来てください。一緒にお弁当を食べましょう』

耕ちゃんには、このことは言わないようにと釘を刺された。

いったい何の話なんだろ？

昨日、耕ちゃんが入部を決めた時に、黒木部長は――

『ホントに手のかかる二人……』

って、ボソボソっと呟いた。

それって部長がしたい話と、関係あるのかな？

部活中は支障が出るから、耕ちゃんと喧嘩するなっていうお達しの話かもしれない。

昼休み。黒木部長から教えられた三年三組の教室に行くと、部長に、校舎裏の小さな庭に行こうと誘われた。

部長いわく、ここは昔からある裏庭で、今は新しくてもっと広い広場ができたから、ほとんど誰も利用しない場所なのだそうだ。

あまり手入れがされてなくて雑草が生えてるけど、ベンチが一つだけ設置されてて、内緒話をするには最適な場所って感じだ。

部長と並んでベンチに座り、二人とも膝の上に弁当箱を置いて、食べながら話を始めた。

「貴理山さん。わざわざ呼びつけてごめんね」

え？　部長がすらすらと喋ってる。

見た目は昨日のまま、いかにもコミュ障のオタク少女って感じなのに。

「あ……いえ……大丈夫です」

「今日からあなた達と私、三人の文芸部がスタートするわけだけど……モグモグ」

「さ、三人？　他の部員は？　……モグモグ」

二人とも、弁当をモグモグと頬張りながら会話をする。

「いないよ。あなた達だけ」

「へっ？」

「元々私以外には部員がいなかったの。だから今年はたくさん入部してもらいたくて……せっかく気合い入れて部室の飾りつけをしたのに、来てくれたのは、今のところあなた達だけ……」

いやいや、逆にあの飾りつけが、訪問者を拒んでるのでは……？

まあいいか。何となく気が合いそうな部長と、耕ちゃんだけっていうのも、気楽でいいかも。

「……で、三人だけのメンバーだから、事前にちゃんと訊いておきたいと思ってさ……モグモグ」

「……

ーは……はぁ……モクモク」

改まってなんだろ？

それにしても黒木部長……ホントにすらすらと喋ってるなぁ。なんで？

「部長って……ホントは喋るの得意……なんですか？」

「えっ？」

「いや、あの……すらすらと喋ってるから」

「昨日のは、もしかして演技だったのか……って？」

「あっ……ええ、まぁ……」

「演技じゃないよ。貴理山さんは話しやすいんだ……なんだか、おんなじ匂いがする」

あはは、確かに。私もそう思ってた。

黒木部長とは話しやすい。

「ごナゾ男子が　多支川くんが一番こいるこ、ふうダメ。ふやいこ話すな

「なんで？」

「まだって……付き合う予定なんかないです」

「そうなの？　まだ付き合ってないのか……」

「ゴホゴホ……あ、いや……付き合ってなんかいません。単なる幼なじみです」

クラッカーから出るテープかと思うくらいに。

口から米粒が盛大に吹き出した。

「ブホッ！」

き合ってるの？」

「でも貴理山さんは、多岐川くんとはちゃんと話せるよね……あなた達、付

「そうなんですね……モグモグ」

い……モグモグ」

「なんと男二人……多岐川くん一緒にいると、もっとメンバーと言ってな

「カノン」

黒木部長はこぢんまりとした幼い顔に、きょとんとした表情を乗っけて、ごくごく素朴な疑問――という風に訊いてくる。

「なんでって言われても……」

「だって貴理山さんは、多岐川くんのことを好きなんでしょ？」

「ふぇっ……！」

思わず変な声が出た。

黒木部長は出会ってまだ一日しか経ってないのに、なんでそんなことを言うんだろ？

「き……嫌いですっ！　私は耕ちゃんなんて、大嫌いなんですっ！」

「へぇ……大嫌いな男の子がおんなじ部活に入ることになって、あんなに嬉しそうにニヤつく人がいる？」

あ……バレてた。

いや、あれは……

「笑い茸のせい……」

「笑い茸？　なにそれ？」

「あ……いえ、なんでもないです！」

まずいまずい。

マジで笑い茸だなんて言ったら、頭のおかしい子かと思われるところだった。

「とにかく私は、嬉しそうになんかしてません。部長の思い違いです」

「そうなの？　そうは思えないけど……多岐川くんの方も、貴理山さんを好きみたいだし」

「ふぇ、ふぇっ!!」

さっきよりも、もっと変な声が出た。

黒木部長って、激しく盛大なる勘違いをする人なんだ。

「そ、それこそ違います。彼には他に好きな人がいるし……」

「えぇっ？　嘘っ？」

「ホントです……」

「誰？」

なんで出会ったばかりの人に、そこまで言わなきゃならないの？

そう思って部長の顔を見た。

第17話：文芸部部長・黒木久美〈2〉

部長は真顔で私を見つめてる。

決して、興味本位って感じではない。

「言わなきゃ……ダメですか？」

「無理にとは言わないけど……せっかく入部してくれた二人だから、うまくやってほしいなぁ……って思うのが一つ」

「は……はぁ」

「それと貴理山さんが、なんだか無理してるって気がするの。だから少しでも力になりたいな……って思った」

――あ……なんか、この人の話し方と柔らかな表情が、すごく優しい……

昨日、初対面の時は、たどたどしい話し方と無表情だったけど、今はすごく優しい感じ。

「いえ、別に私は、無理なんかしてない……」

「それは嘘だ。私、貴理山さんのこと、なんとなくわかる。多岐川くんに文芸部に入って欲しかったくせに、素直にそう言えなかったでしょ？　だから私が命令って形で、あなたに指示をした」

うっ……図星だ。

もしかして……とは思ってたけど、やっぱり部長はわかってて、私に命令をしたんだ。

「ねぇ、貴理山さん。もしよかったら、私に話してよ」

無理なんかしてない……

無理なんか……

無理なんかしてないって――普段は自分に言い聞かせてる。

だけど黒木部長の優しい笑顔と声に――気がついたら、今まで親にだって、舞衣にだって明かしたことがないような話をしてた。

――部長が他人だからこそ、言えたのかもしれない。

「耕ちゃんは、子供の頃から今も、私の双子の姉のことが好きなんです……」

「ホントに？　双子のお姉さんがいるんだ……」

「はい。私なんかと違って、明るくて可愛くて……人気者の姉なんです」

「可愛いって……双子なんだから、貴理山さんと同じでしょ？」

「いえ……性格が違うし、可愛く装うなんて、私にはできないし」

「じゃあ貴理山さんも、好かれるように努力したらいいのに……」

黒木部長は不思議そうな顔をしてる。

だけど私は頑張っても、舞衣みたいに明るくなれない。

それに今のままの方が……私が努力しないから――嫌われるようなことをわざとしてるから、だから私は耕ちゃんに嫌われてるんだって、言い訳が立つ。

私って人間そのものが、舞衣に負けてるわけじゃないって、自分を慰めることができる。

精一杯努力したのに、それでもやっぱり耕ちゃんが舞衣を選んだら――舞衣を選んでしまったら……

「そっか……貴理山さんも、悩んでるんだねぇ……」

部長にそう言われて、「はい、そうです」なんて言うのは、何か違う気がし

た。

だから私は、黙って苦笑いを黒木部長に返す。

「でもさ、貴理山さん。多岐川くんの態度を見てると、決してあなたを嫌ってると思えない。だからあなたも好かれるようにしたらいいのに」

「そんなこと……できません」

「なんで？」

「耕ちゃんに何かいいことを言おうと思っても、素直に言葉が出ない。無理なんです……」

黒木部長は悲しそうな顔で、私を見つめてる。

悲しそうだけど……優しい顔だ。

「そっか……まあ焦らなくてもいいんじゃない？　幸いにも同じ部活で、同じ時間を共有するチャンスが生まれたんだし」

いや、それは　逆に、益々耕ちゃんに嫌われるチャンスが生まれたってこと

いや、それは……逆に、益々素直になれない女の子って感じがするけど……

と同義だ。

「私も、貴理山さんが素直になれて――そしてあなたの恋がうまくいくように、応援するよ」

「こっ、こっ、恋っ？　ちがっ、ちがっ……違います！　私の耕ちゃんへの気持ちは、そんなんじゃありません！」

断じて違う。

私は耕ちゃんに、恋なんかしてない。

「だけどあなた……多岐川くんのことが、好きなんでしょ？」

好き？

そう聞かれても、わからない。

確かに耕ちゃんのことは、幼なじみとして――まあ嫌いではない。

だけどそれが耕ちゃんへの恋心なのかと問われたら……わからないとしか

言えない。

——いや、『たぶん違う』としか言えない。

「いえ……違うと思います……」

「ふぅん……じゃあ私が多岐川くんを、好きになってもいいんだね？」

「ふぇっ!?　ちょっ、ちょっ、ちょっとそれは……」

まさか黒木部長……耕ちゃんを気に入っちゃったの？

「だって貴理山さんが多岐川くんを好きじゃないんなら、私だって恋愛は自由でしょ？」

「ああ、まぁ……それは……そ、そうですねぇ」

あ、ヤバっ……なんか今、私——すごく不機嫌な声を出したかも？

でも部長の言うとおりだ。私が耕ちゃんを好きでもなんでもないんなら、

部長が耕ちゃんを好きになっても、なにも文句は言えない。
「……まあいいや。（貴理山さんって、ホントに素直じゃない――）」
「えっ？　最後、なんて言いました？」
「なんにも言ってない。とにかく私が、また色々とアドバイスしてあげるわ」
「部長が……？」
「なに、その怪訝な顔は？　私はこう見えても、恋愛のことには詳しいんだから」
えっ、部長が？
失礼ながら、見た目と雰囲気から、男子と付き合ったことがないって思い込んでた。
――ごめんなさい、部長。
「リアルな男子とは一度も付き合ったことはないけどね……恋愛小説は一

○○冊は読んでるから、だから大船に乗ったつもりでいなさい」

いや……それは泥舟だ。

部長のアドバイスは、信用したら撃沈するヤツだ。

だけど真剣に私のことを心配して、力になってやろうという気持ちをガンガン発してる部長に、私は何も言えなかった。

「で、部長……わざわざ昼休みに私を呼んで、話したかったことって？」

「うん、もう済んだ。貴理山さんと多岐川くんの関係とか、あなたが彼をどう思ってるのか、聞きたかった」

「なんでまた？」

「三人限りの部活で、二人の関係性がわからないままなんて、うまくいくはずがないから。だから初めに聞いておきたかった」

「はあ　なるほど、そうですか　－

「はぁ……なるほど、そうですか……」

「まぁとにかく、今日から、あなた達二人は文芸部員。今日の放課後、部室で待ってる。よろしく」

部長の薄い笑み（部長にとっては満面の笑みなんだろう）を見て、黒木部長はいい人そうだし、文芸部に入部して、まぁ良かったかな……と私は思った。

＝第四エピソード　完＝

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第5エピソード『離れないで……』

第18話：離れないで……〈1〉

◇◆◇◆◇

一日の授業が終わった。

初めての部活を前にして、僕は期待と不安が入り混じった感情を持て余していた。

あれ？

そういえば、亜依はどこ行った？

亜依と一緒に文芸部に行こうと思ったのに、席を見たら、もう彼女はいな

い。

先に行っちまったのか？

おんなじ部活に入ったのに、そこまで僕を避ける？

――はぁっ……先が思いやられる。

慌てて帰り支度をして、廊下に出た。

少し先を歩く、亜依の背中が目に入る。

亜依が僕を避けたいんなら、ちょっと距離を開けて歩こうか……

そう思ったけど、亜依の歩き方がなんだか変だ。フラフラしてる。

コイツは昼間っから酒飲んで、酔っ払ってるのか？

――いや、女子高生がしかも学校で、なおかつ昼間っから酔っ払ってるなんて確率は、大人になれるマンボウよりも低いぞ。

大人になれるマンボウは、一億5,000万分の一って言われてる……

――いやいや、そんな上手い例えをしてる場合じゃない。

それよりも、亜依だ。

いくら変人の亜依とは言え、昼間っから酒を飲んでるとは思えない。

きっと体調が悪いんだろう。

僕は慌てて小走りになって、亜依に追いついた。

「亜依、どうした？」

「あ……耕ちゃん……」

歩きながら振り向いた亜依の顔は、火照ってりんごみたいに真っ赤だ。

「熱でもあるのか？」

「うん……一時間くらい前から急にね……熱い……」

まぶたが半分閉じて、目つきがポーッとしてる。

こりゃ、結構重症かも？

「早く帰って寝とけよ」

「ダメだよ。部活の初日なのに……」

亜依はフラフラしながら、手すりに頼って階段を降りる。

僕は思わず亜依のおでこに手を当てた。

周りに他の生徒がいて見られても、仕方ない……と思ったけど、幸い誰もいない。

「熱っ！」

おいおい、四十度近い熱があるんじゃないか？

かなり熱いぞ……

「やっぱりダメだ。黒木部長には僕から事情を説明しとくから、とにかく帰れ！」

ボーッとしたままの亜依は、それでもまだ反発するかと思ったけど……

「うん、わかった。ごめん、耕ちゃん」

案外素直に言うことを聞いた。

やはりよっぽど辛いんだろう。

階段を一階まで降りたところで、校門の方にフラフラと歩いて行く亜依を見送って、僕は部室に向かった。

「あの……すみません、部長」

部室の扉を開いて、部長に声をかけたけど……

中に入ると誰もいない。

黒木部長はまだ来てないっこ。

黒木部長はまだ来てなかった
仕方ない。
僕は部室の中で突っ立ったまま、部長が来るのを待った。
まだ入部したてで、自分の部室という気がしない。
だから勝手に椅子に座って待つのも気が引ける。
五分くらいすると、ガラガラと扉を開けて、黒木部長が姿を現わした。
相変わらずこぢんまりとして、お下げ髪にメガネ姿。オタク臭を漂わせてる。
「あ、部長。今日は二人で来るつもりだったんですけど……」
僕は、黒木部長に事情を説明した。
「――というわけで、部活初日に申し訳ありませんが、今日は僕一人の参加で許してください」

僕の言葉を聞いて、部長は無表情のまま口を開いた。

「ダメ……認めない……」

「えっ？」

なんだって？

高熱だって説明したのに、亜依の欠席を認めない？

なんてヤツだ。黒木部長は鬼か？

ちっこいから小鬼（こおに）だ。

今後は小鬼部長と呼んでやる。

「今日は……多岐川くんの部活参加も認めない……すぐに帰って、貴理山さんの看病をすること……家が隣……なんでしょ？」

あっ……そういうことか。

鬼だなんて思って悪かった。

この部長、優しいじゃないか。

今後は小天使（こてんし）部長と呼ぶことにしよう。

「でも……看病ですか？　亜依んところはお母さんがいると思うんで、僕なんかが行かなくても……」

「ダメ……部長の命令は絶対的。私の命令を守らないなら……明日から多岐川くんは来なくていい……」

うわっ、この部長。なかなか強権発動するなぁ。

せっかく入ったばっかの部活を、いきなりクビになるのも嫌だし……

「は、はあ……わかりました」

「わかったなら……グズグズしてないで……早く行きなさい……」

「あっ、はい」

無表情で睨む部長の迫力に押されて、僕は慌てて部室を飛び出した。

＊＊＊

帰り道の途中で亜依に追いつく可能性もあると思ったけど、結局家に帰り着くまで、その姿を見かけることはなかった。

案外しっかり歩いて、すでに家に帰り着いてるのか……

それとも途中で、どこかで倒れてるとか？

――背筋がぞわっとした。

亜依が倒れてるなんて、考えたくもない。

きっと既に、家に着いてるんだろう。

それを早く確かめたくて、僕は震える手で貴理山家の玄関のインターホンを押した。

ンを押した。
『はい……あら、耕ちゃん？』
亜依のお母さんの声だ。
『ちょっと待ってね。今、出るから』
――しばらく待ってたら、ガチャリとドアが音を立てて、亜依のお母さんが姿を現わした。
相変わらず美人で、優しい顔をしてる。亜依もお母さんを見習え。
「あの……亜依は、帰ってますか？」
「ええ、帰ってるわよ」
悪い予感は、外れた。
良かった。ホッとした。
「大丈夫そうですか？」
「うーん……どうかな？　熱が三八度出てるの。風邪だと思うけど……ー

「病院は？」

「近所のお医者さんが、今日は午後診察をやってないの。だから遠くの病院に行こうって、私は言ったんだけど、亜依は解熱剤を飲んで寝たら、すぐに治るからって……」

「じゃあ、亜依は、寝てるんですか？」

「どうだろ？　もう寝たかな？」

そうか。亜依は薬を飲んで、もう寝たのか。

それならば、やっぱり僕の出る幕はないな。

「じゃあ、亜依が起きたら、よろしくお伝えください」

「そう言わずに、亜依の顔を覗いてやってよ、耕ちゃん」

「えっ？」

亜依のお母さんが、目を細めて微笑んでる――

第19話：離れないで……〈2〉

亜依は病人なんだから、邪魔しないでゆっくり休ませてあげたほうが、いいんじゃないのか？

僕はそう思ったけど、亜依のお母さんが「いいえ」とかぶりを振った。

「もしかしたら、もう眠ってるかもしれないけど……もしもまだ起きてたら、耕ちゃんの顔を見たほうが、亜依（あい）も元気が出ると思うし」

いやいやいや、そんなことはないでしょ。

僕の顔なんか見たら、亜依は病状が悪化するに決まってる。

――三八度の熱が、きっと四〇度を超えてしまう。

いや、人間離れした亜依のことだ。五〇度を超えるかもしれない。

やっぱりお母さんの申し出を断わろうと思った時に、黒木部長の言葉を思い出した。

亜依の看病をすること。

部長命令を守らなければクビ。

まあ、実際には看病なんかしなくても――

看病をしたと、亜依に口裏を合わせてもらえば、バレることはない。

――いや、亜依が口裏を合わせてくれないって可能性もある

やっぱりちゃんと、看病すべきか……？

そんなことをうだうだと考えたけど、やっぱり部長の命令はちゃんと守ろう。

いや、決して亜依のことが心配で心配でたまらないなんて、そんな理由じゃない。

心配で心配でたまらないなんて……そんな理由じゃない。

――何度も繰り返さなくてもいいか。

僕はいったい誰に言い訳してるんだ？

病人の静養を邪魔することになるかもしれないけど……

でも亜依のお母さんは、僕が顔を見せた方が、亜依は元気が出ると言った。

「あの……おばさん。ホントに、上がってもいいんですか？」

「うん、もちろん。ありがとうね、耕ちゃん」

にこりと笑うお母さんの笑顔に、僕は少しホッとした。

「じゃあ、お邪魔します」

そう言って玄関を上がって、二階に上がる階段を見上げた。

亜依の部屋はこの上だ。

小学生の頃は、よくこの部屋に遊びに来たもんだ。

何年ぶりだろ？

「知ってると思うけど、亜依の部屋は二階に上がって手前だからね」

そうだ。手前が亜依の部屋。奥が舞衣の部屋だったな。

「じゃあ、勝手に上がって、亜依の部屋に行ってね」

「え……？」

てっきり亜依のお母さんが、一緒に部屋まで行ってくれるもんだと思い込んでた。

年頃の女の子の部屋に、男を一人で入れるものか？

――いや、子供の頃から僕を知ってる亜依のお母さんにとっては、そんなも

のなのかもしれない。

僕は一気に、心臓の鼓動が高まるのを感じる。

亜依の部屋に一人で入るってことは……亜依の部屋でアイツと二人っきりになるってことだ。

一＋一は二。

どう考えてもそうだ。間違いない。

小学一年で習う式のとおり。

もしも一＋一が三になったら、それは子供ができちゃったってことだから、それはもう二人っきりになるなんてちっちゃなことよりも、筆舌に尽くしがたいほど大変なことだ。

つまりは、部屋の中で、僕は亜依と二人っきりになってしまう。それは間違いない。

ごナごごこまで来て、帰るっナこはいかない。

たはどうして来て、帰るわけにはいかない
お母さんに『一緒について来て』って言うのも、なんか変な感じだし。
うーん、仕方ないな。
「あ、はい。失礼します……」
僕は亜依のお母さんにそう答えて、高鳴る鼓動を抑えながら、階段を上がった。

＊＊＊

階段を上がりきって、亜依の部屋の前に立つ。
ドアには木製のプレートに、『あい』と手書きのマジックペンで書かれた名札がかかってる。
これは確か、小学生の時に作ったやつだ。見覚えがある。

小学校の時に作った名札をそのまま使ってるなんて……

子供のままで成長しない、亜依を現わしてるみたいだ。

ちょっと可笑しくて、プッと笑いが漏れてしまった。

「亜依……」

小さな声で、ドアに向かって話しかける。

――しばらく返事を待ったが、亜依の声は聞こえなかった。

ドアをノックしようと、扉に拳を近づけたけど……

もしも亜依がすでに眠ってて、ノックの音で起こしてしまったら申し訳ない。

「亜依……開けるぞ……いいか？」

もう一度声をかけて、しばらく待ったけど、返事はない。

「毒舌女で可愛げのない亜依ちゃん……起きてるかーい？」

アイツは自分への悪口には地獄耳だから、囁くような声でもこう言われたら、起きてたら返事があるはずだ……

――でも、やっぱり返事がない。

仕方なくドアのレバーに手をかけて、ゆっくりと扉を開けながら、また小さな声で「亜依……」と呼びかける。

相変わらず返事はない。

亜依の部屋に、そっと足を踏み入れる。

真正面の棚には、ちっちゃなぬいぐるみが、山ほど飾ってある。

これも小学生の頃と同じだ。

――いや、あの頃よりも、かなり数が増えて、グレードアップしてる。

亜依は、相変わらずお子ちゃまだな。

[illegible]

壁際のベッドを見ると、掛け布団がこんもり盛りがってて、そこに亜依が横たわってるのがわかる。

ちょっと覗くと、亜依は顎（あご）まで布団に隠して、すやすやと寝息を立ててる姿が見えた。

――やっぱり眠ってたんだ。

僕は学習机の椅子を動かして、ベッドの横に置いて座った。

症状が落ち着いてるのか、穏やかな顔をしてる。

その顔を見て、子供の頃の亜依を思い出した。

最近は顔を意地悪く歪めたり、無表情だったり、ムカつくオーラをプンプン出してくる亜依だけど……

こうして寝顔を見ると――可愛い。

あ、いかん。ついついニヤニヤしちまった。

「　　？」

「……話……？」

亜依が薄目を開けて、僕を見てる。

しまった。起こしちまったか。

「僕だ」

「……耕ちゃん……？」

「うん。大丈夫か？」

「……うん、大丈夫。亜依ね、頑張ったんだよ……」

ん？　頑張った？

――なんの話だ？

「ワンちゃんが吠えて怖かったけど……亜依はね、ちゃんと走って逃げたよ……」

思わず亜依の顔を見た。ちょっと苦しそうだけど、薄目を開けて、ボーッとした顔で微笑んでる。

犬に追いかけられた？

確か小学二年か三年の頃に、そんなことがあった。

亜依は子供の頃の夢を見てて、意識が朦朧として、現実とごっちゃになってるのかもしれない。

第20話：離れないで……〈3〉

「そっか……亜依は偉いな」

亜依の話し方があまりに可愛くて、僕は思わず亜依の頭を優しく撫でていた。

「うん……」

熱で紅潮した頬を緩ませ、亜依ははにかんだ。

コイツ、こんな可愛い顔をするんだ。

普段の氷のような視線と、ケンカを売るような無表情とは大違い。

まあ、髪は相変わらずボサボサだけど。

「あのね、耕ちゃん……」
「ん？　なに？」
「耕ちゃんは……亜依のこと、好き？」
ドックンと心臓が鼓動を打った。

なんだ、急に？
なんて答えよう？
普段なら、間違いなく……
『嫌いだ、バーカ』
これしかない。鉄板中の鉄板だ。
だけど今、亜依は熱で苦しんでる。
そんな病体に鞭打つことなんてできない。
そして、亜依の意識は小学生の頃に戻ってるみたいだし……

「……うん。好きだよ……」

「良かった……亜依も耕ちゃんのこと、大好き……離れないでね……」

「あ……ああ、もちろん。離れないよ」

僕の言葉を聞いて、亜依は満足そうな笑みを浮かべて、また目を閉じた。

――思い出した。

そういえば小学生の頃は、こんな風に、亜依はよく僕のことを好きだと言ってくれてた。

『耕ちゃんのお嫁さんになる』とまで言ってた。

舞衣も同じように言って、よく姉妹二人で僕を取り合って、ケンカしてたっけ……

そしてケンカを見かねた僕が、こう言うと、いつもケンカが収まった。

『舞衣と亜依と、二人で僕のお嫁さんになってよ』

舞衣も亜依も、嬉しそうに『うん』と言ったものだ。

現実を知らない子供の世界――

あの頃は、気楽だったよなぁ。

現実を、知らずに見る夢、泡沫（うたかた）かな……

――字余り、って感じだな。

亜依を見ると、目を閉じて寝息を立ててる。また眠ったかな。

そう思って亜依の寝顔を眺めてたら、彼女はまた薄く目を開いた。

「……耕ちゃん……」

「ん？　なに？」

「べたべたして……気持ち悪い……」

そう言えば、亜依の顔は粒のような汗だらけだ。
ふと枕元に目をやると、タオルが置いてある。
「わかった。拭いてあげるよ」
「うん……」
立ち上がってタオルを手にする。そして亜依の方を向いたら――
――うわぉっ!!
こ、こ、こ、これはっ!?
な、な、な、なんとっ!!
寝転んだまま、掛け布団を腰の辺りまでめくった亜依が、なんとパジャマの前のボタンを、上から一つずつ外してる。
おいおいおい！
僕が言ったのは、顔の汗のことだ！
なんでパジャマのボタンを外すっ？

なんてハジュームの反応を外す！

固まってる僕をよそに、ボタンを全部外し終えた亜依は、両手でパジャマの前を開いた。

亜依の目は閉じたままだ。

「……拭いて……」

ゴクっ……と唾を飲み込む音が、自分でも聞こえるくらい、喉が鳴る。

はだけた亜依の胸元は、赤みが差した白い肌に、玉のような汗がたくさん浮かんでる。

苦しんでる亜依には悪いけど――あごから胸元にかけての赤くて白い肌が、艶々としていてとても綺麗だ。

そして――白いブラジャー。

小高い丘が、二つ。

見ちゃいけない、見ちゃいけないと思うほど、視線が釘づけになる。

――いつの間にか、こんなに大きくなってたんだな……

いやいやいや、僕は何を考えてるんだ？

相手は病人だぞっ！

それをいいことに、バストを凝視するなんて、僕は悪いヤツだ……

――慌てて手にしたタオルで、亜依の胸元の汗を拭う。

ブラジャーには、できるだけ手が触れないように……

ブ、ブラジャーなんかに手が触れてしまった日にゃ、興奮しすぎて気が触れてしまう。

亜依の意識の中では、まだ自分は小学生なんだろう。何も言わずに、僕が

汗を拭くに任せてる。
「もういいよ、亜依」
肌の汗をひと通り拭き終わって僕が声をかけたら、亜依は目を閉じたまま「ん……」と鼻を鳴らして、パジャマの前ボタンをかけ始めた。
亜依の肌が、また白いパジャマに隠れていく。
残念だ。もっと見ていたかった――
そんな不埒な考えが頭をよぎった刹那、ドアをノックする音が響いた。
「耕ちゃん、いいかな？」
うわっ、亜依のお母さんの声だ。
ハッとして亜依の方を見ると、パジャマのボタンをすべてかけ終わって、また布団をあごのところまでかぶってる。
目を閉じて、また眠ってしまったようだ。
「〜〜〜

「あ、はい、どうぞ……」

ドアが開いて、お母さんがお盆にお茶を乗せて、持ってきてくれた。

いやいや、めっちゃ危なかった！

あと一分、早くお母さんがドアを開けてたら……

病気の娘の素肌とブラジャーを見つめる、極悪非道な男の一丁上がり――だった。

ああ、助かった……

やっぱり邪（よこしま）な考えを我慢して、健全な行動をするのが大事だってことだな、うん。

「亜依は……寝てるのね」

「はい。さっきは目を覚まして、ちょっとだけ話をしたけど、亜依はちょっと朦朧としてるみたいだったし……また寝ちゃいました」

「……」

「そう……」

お母さんは亜依を見て、ニコッと笑ってる。どうしたんだろうか。

「あら？　亜依ったら、なんだか満足そうな顔をして……」

お母さんの言葉に、僕も亜依の顔を見た。

確かにさっきまで無表情に見えたのに、なんか微笑んでるような穏やかな寝顔だ。

「やっぱり耕ちゃんが側（そば）にいてくれるからかな？」

「えっ？　……いや、そんな……そんなことはないと思います」

「そんなこと、あると思うよ」

「そ……そうですか？」

「うん」

目を細めるお母さんの視線がむず痒くて、下を向いてコクンと会釈するしかことできない。

「よかったら、しばらく亜依の側にいてあげてね」
亜依のお母さんは僕に微笑みを投げて、部屋から出て行った。

また、亜依の部屋で――亜依と二人きり。
すやすやと眠る亜依の顔を見てるのが、至福の時間のように思える。
――コイツ。いつもこんな素直で穏やかな顔をしてたら、ホント可愛いのにな。
いつもの僕なら、そんな考えが頭に浮かんだ途端に、自分で自分の考えを打ち消すのだけれど……
今日だけは、なぜか……まぁ、いつか、と思えた。

第21話：離れないで……〈4〉

＊＊＊

僕は自分の部屋に帰って、ボーッと考えている。

あれからしばらく亜依（あい）の顔を眺めてたけど、起きる気配がなかったから、亜依のお母さんに声をかけて帰宅した。

亜依の部屋にいた時も、帰ってからも、僕の頭を支配してること。

それは――亜依が口にした『亜依も耕ちゃんのこと、大好き』と言った、あの言葉。

あれは、小学生の亜依の言葉だろうか……

それとも――もしかして、今の亜依も、そう思ってるのか……

はたまた朦朧とする意識が亜依に言わせた、まぼろしの言葉か。

それが気になって気になって、仕方がない。

だけれども、いくら考えてもどれが正解なのかはわからない。

そりゃそうだ。

真実は――亜依のみぞ知る、だ。

ホントのことを知りたけりゃ、亜依本人に訊くしかないのだ。

あ、いや。

僕にとっては、亜依が僕をどう思ってるかなんて、どうでもいい話だ。

きっと嫌ってるんだから。

でも――やっぱり気になる。

亜依に訊いてみる？

いや……そんなことを訊いたら、頭がおかしいのかと言われかねない。

僕はスマホを握りしめて、亜依のＬＩＮＥを開いた。

そして画面を見つめる――

訊くべきか、訊かざるべきか、それが問題だ。

『大丈夫か？』

とりあえず当たり障りのない言葉だけ書いて、送信ボタンを押した。

そしてしばらく待ったけど、既読はつかない。亜依はまだ眠ってるのかもしれない。

『耕ちゃんが好き』と言ってくれてた小学生の頃の亜依は、ホントに可愛かっ

たなぁ……

人の心は変わる。『ただ春の夜の夢のごととし』……か。

亜依の、あの言葉の意味を、やっぱり訊くべきか、訊かざるべきか。

――いや、やっぱり疑問は解消すべきだ。

わからないことをそのままにしておいてはいけない。

小学校の先生も、そう言ってたではないか。

亜依の心がどれくらい変わってるのか、やはりちょっと確かめたい。

そんな悪魔の囁きのような欲望に僕は打ち勝つことができずに、僕はもう一通、メッセージを送ってしまった。

『亜依は僕のこと、どう思ってるのかなぁ？（絵文字）』

――できるだけ冗談ぽく。

[illegible]

歯を出してニヤリと笑う顔の絵文字を最後に付けて、

はぁーっ……

大きなため息が出た。

こんなメッセージ、送らなきゃよかったかなぁ。

亜依に気持ち悪がられるかもしれない……

送ってしまった後で、ちょっぴり後悔。

しばらくスマホ画面を眺めてたけど、亜依の既読は付かなかった。

＊＊＊

夕飯を終えて部屋に戻ったら、『ピコン』という着信音が鳴った。慌ててスマホ画面を開く。

て、左画面を開く
『熱は下がった』
――それだけかよ？
もう一つの答えは？
そう思った瞬間、また『ピコン』とスマホが鳴る。
『耕ちゃんをどう思ってる？　そんなの、キライに決まってる。何言ってんの？　熱にでもうなされてるのかなぁ～？』
ああ、ああ、やっぱりなぁ……
常々そう思ってたし覚悟もしてたから、少しはショックがマシだけど……
それでもここまではっきりと文字にされたら、ちょっとへこむ。
熱にうなされてるのはお前だ。
あんなことを言いやがって……
だからちょっと、確かめたくなっちまったじゃないか。

――なんか身体がダルくなってきた。

僕はベッドの枕元にスマホを放り投げて、そのままうつ伏せに、ベッドに倒れ込んだ。

◇◆◇◆◇

私が目を覚ましたら、自分の部屋のベッドで寝てた。

熱っぽくて帰宅して、パジャマに着替えてそのままベッドに潜り込んだことまでは覚えてる。

枕元を見たら、タオルやスポーツドリンクが置いてある。

多分お母さんが置いてくれたんだな。

そう言えば――

なんだか懐かしい夢を見た。

犬に追いかけられて怖い思いをした日の夜。確か小学二年だった。

耕ちゃんにその話をして、私がちゃんと逃げたことを伝えたら、耕ちゃんは『偉かったなぁ亜依』って言って、頭を撫でてくれたっけ。

それを今でも、はっきり覚えてる。

あ、さっき夢の中で……私、耕ちゃんに『大好き』とか『離れないで』とか言ってたな。

そしたらやっぱり、耕ちゃんは頭を撫でてくれた。

――へへへ、思い出したら恥ずい。

でも子供の頃は、平気で耕ちゃんに『好き』って言ってた。私だけじゃなくて舞衣も。

舞衣と二人で、耕ちゃんのお嫁さんになるとか言ってたなぁ……バカだ、、。

な。

――そんなの無理なのに……

子供って、ホントにバカだ。

何も考えずに素直に男の子に『好き』って言えたり……

子供って、ホントにバカだ。

でも子供って、ホントに……羨ましい。

あれ？

そう言えば、夢の中の耕ちゃんは小学生じゃなくて、今の耕ちゃんだったような気がする。

まあ夢の中が、事実と整合性がないなんてことは、よくある話だ。

見てる夢は今のことなのに、とっくに死んだお爺ちゃんが出てきたりとか。

た

そんなことをボーッと考えながら、何気なくスマホをチェックしたら、耕ちゃんからメッセージが入ってる。

――ん？　なになに？

ベッドに座ったままで、スマホを覗き込む。

『大丈夫か？』

――うん、まあ……もう大丈夫そうかな。

『熱は下がった』

まずは質問に返信した。

それが人としての常識よね。

私は常識人だから、ちゃんと返事してあげるのだ。

――で、もう一個の質問。なにこれ？

『亜依は僕のこと、どう思ってるのかなぁ？（絵文字）』

歯を出してニヤっと笑ってる絵文字はついてるけど……
耕ちゃんは、いったいどういうつもりなのか？
私が風邪ひいてボーッとしてるからって、からかってんだ。
なんてヤツだ。病人に対して、デリカシーの欠片もないヤツだ。
あんなヤツ、会ったらまた罵倒してやるっ！

第22話：離れないで……〈5〉

耕ちゃんは私に『亜依は僕のこと、どう思ってるのかなぁ？（絵文字）』なんてメッセージを寄こしてきた。

私が耕ちゃんをどう思ってるって？

あれ？　私は、耕ちゃんのことを、どう思ってるんだろう？

――そんなの決まってる。

キ、ラ、イ、だ。

子供の頃は確かに耕ちゃんを好きだった。

でもあれは、単なる子供の好き嫌いだ。

それに耕ちゃんも、私と舞衣の両方ともを、好きだと言ってくれてた。

だけど今は違う。

耕ちゃんが好きなのは、きっと舞衣だ。

高校生にもなったら、二人同時に好きとか結婚なんて、成り立たないことは知ってる。いや、中学の時もわかってた。

重婚は法律で認められてない。

いやいや、その前に、二股なんて自分の――いや、舞衣だってそうだろう――気持ちが許さない。

だから、私は身を引いた。

そう。私はあえて、身を引いたんだ。

決して舞衣に負けたんじゃない。

まあ耕ちゃんが好きなのは、きっと舞衣なんだけど……

あ、こういうのを、負けたって言うの？

いやいやいや、決してそうじゃない。

耕ちゃんが葛藤しなくていいように、私が身を引いてあげたんだ。

私って、なんて偉い子なんだろう。

なのに――

なんで耕ちゃんは『僕のこと、どう思ってるのか？』なんてメッセージを送ってくるのか？

やっぱりアイツはバカ以外の何者でもない。呆れて物も言えない。

風邪ひいてうなされてたのは私の方なのに、アイツの方が熱にうなされてたの？

私がどう思ってるかなんて、決まってるんだから、それを返信するのみ。

『耕ちゃんをどう思ってる？　そんなの、キライに決まってる。何言ってんの？　熱にでもうなされてるのかなぁ～？』

送信ボタンを押すと同時に、なぜか、はぁーっという大きなため息が出た。

――バカ耕平。私にこんなことを言わせるな。

その時突然ガチャっと音がして、部屋のドアが開いた。

「あれ？　亜依、起きてたの？」

「ああ、お母さん」

「どう？」

「うん、もう大丈夫。熱も下がったみたい」

「よかった。ゆっくり休んでね」

「そう、良かった、耕ちゃんのおかげかもね」
「耕ちゃんのおかげ？　なんで？」
お母さんが怪訝な顔をしてる。どうしたんだろ？
耕ちゃんのおかげなんて、変なこと言うし。
「耕ちゃん、ずっとそこに座って、亜依の看病をしてくれてたでしょ？」
「耕ちゃんが？　嘘……」
「あれっ？　亜依は知らないの？」
知らないのと言われても……知らないとしか言えない。
だから私は無言で、お母さんの顔をじっと見つめてしまってた。
「だって耕ちゃん、亜依とちょっと喋ったって言ってたよ」
「喋った？　私と？」
「うん。そう言ってた。……あ、そう言えば、亜依はちょっと朦朧としてたとか言ってたっけ」

言ってたっけ」

朦朧としてる私と喋った……

えっと……もしかして……

私が夢だと思ってた、耕ちゃんに『大好き』って言ったこととか、身体の汗を拭いてもらったこととか……

も……もしかして、現実だったのー？

うわ、まさか……やだ、ホント？

嘘でしょ？　嘘でしょ、嘘でしょ、嘘でしょー!?

やばいよ、やばいよ、ヤバいよ！

いや……よく考えたら、確かにあり得る。

話してる相手の耕ちゃんは今の姿だったし、汗を拭いたタオルが枕元に置いてあるし。

あっ！　もしかして……

だから耕ちゃんは、ＬＩＮＥで『僕のことをどう思ってるのか』って訊いてきたのかも？

私が朦朧として言った言葉を、本当かどうか確かめたかったのかも？

さっきは耕ちゃんに『大好き』って口で言ったくせに、ＬＩＮＥでは『キライ』って送った。

耕ちゃんからしたら、情緒不安定きわまりない女になってる⁉

いや、これは、まずくないですかー？

どうしよ、どうしよ、どうしよ？

えっと、ところで……耕ちゃんは、私になんて言ったんだっけ……？

私が耕ちゃんに『大好き』って言った後……確か……

そうだ！　思い出した。

耕ちゃんは私に……『僕も好きだよ』って言った。

うそっ!?

どういうこと？

どういう意味？

ああっ、もうっ!!

ワケがわかんないっ！

どうしたらいいのかも、わかんないっ！

と、とりあえず、さっきの『キライ』だけは、取り消しておいた方がいいような気がする……

慌ててスマホを握って、『さっきのメッセージは忘れて』とだけ書いて、送信ボタンを押した。

ふうっ……

とりあえずはこれでよしと。

ふふふ……私の緊急事態対応能力は完璧だ。

「ねえ、亜依。ニヤニヤして、いったいどうしたの？」

「へっ？」

うわぁ、お母さんがまだいたの、すっかり忘れてた！

挙動不審なところを山ほど見せてしまった。

「あ、いや……なんでもない。気にしないで、お母さん」

「そ、そう……？　まだ熱があるんじゃないの？」

「あ、あ、あ、そう。そうだよ。熱があるから、ついつい変な動きをしちゃったなぁ～」

「ホントに大丈夫なの？　心配だわ」

「だ、大丈夫だって！　私、もう一度寝るわ。寝たら大丈夫！」

私はベッドに寝転んで、がばっと布団を頭までかぶった。

私はベッドに寝転んでたばこと携帯電話を弄ってた。

視界が真っ暗だ。

「じゃあ、ゆっくり寝てるのよ」

そう言うお母さんの声の後に、ドアが開け閉めする音が聞こえて……静かになった。

じっとしてると、また耕ちゃんとのことが頭をよぎる。

私は耕ちゃんに、『大好き』と言った。

耕ちゃんも私に『好きだよ』と言った。

そして私は胸をはだけたところを、耕ちゃんに見られてしまった。

あ、あれは、熱でうなされたから言ったことであって……

そ……そう。子供の頃の気持ちだ。

私も、きっと耕ちゃんも。

い、い、今も好きだなんてことは……たぶんない。

――特に耕ちゃんは、そのはずだ。

きっとそう。そうに決まってる。

私は熱で朦朧として、小学生の頃と混乱してたんだ。

そうじゃなきゃ、耕ちゃんに胸を見せるなんて、絶対にしないもん。

耕ちゃんだって、そんな私に合わせて言っただけに決まってる。

ああっ、でも……いくら熱のせいだと言っても、何度考えても恥ずすぎる!!

これから先、耕ちゃんにどんな顔で接したらいいんだろう?

神様、教えてよ~!

第23話：離れないで……〈6〉

◇◆◇◆◇

翌朝、教室に入ったら、耕ちゃんはもう登校してた。仲のいい勇介君と話をしてる。

自分の席に座る時にチラッと耕ちゃんを見たら――

――ぎっくぅ！

目が合った。

耕ちゃんと目が合ってしまった。

なぜか耕ちゃんもこっちをチラッと見てた。
胸がドキドキする。
ヤバい。慌てて目をそらしたけど、耕ちゃんは、絶対に不審に感じてるはずだ。

耕ちゃんは、昨日のことをどう思ってるんだろう？
私が耕ちゃんに、『大好き』と言ったこと。
耕ちゃんも私に『好きだよ』と言ったこと。
私が胸をはだけて、耕ちゃんに汗を拭いてもらったこと。
そしてＬＩＮＥでキライって言ったこと。

そのすべてが、あまりにも恥ずすぎる。
あとでちゃんと言い訳をしなきゃいけない。

昼休みに声をかけて、耕ちゃんと話をしよう。

＊＊＊

そして昼休みになった。

私は一人でお弁当を食べ終わり、耕ちゃんをチラッと見た。

何人かの男子と一緒にお弁当を食べてる。

相変わらず男子達には人気者のようだ。

――男子達には。

耕ちゃんが一人になる機会を窺ってたけど、まわりには私の作戦行動を邪魔するウザいアホ男子達……もとい、愛すべきクラスメイト達がいつもいるせいで、声をかけるチャンスは生まれなかった。

――危ない危ない。

例え心の中と言えども、耕ちゃん以外の人に、毒舌なんか吐いてはいけない。

そんなことをしたら、私は本物の根暗な陰キャになってしまう。

私のコミュ障は、あくまで世を忍ぶ仮の姿であって……　だから二度と悪口は言わないでおく。

しかしまあ、つまりは――私は放課後まで、耕ちゃんに声をかける機会に恵まれなかったのである。

しかしここで、同じ部活になったメリットが活きてくる。部室に移動するまでの道中、耕ちゃんと話す機会がある。

――と思ったらあのバカ男。スタスタと教室を出て行きやがった。

[illegible]

私を待って、一緒に部活に行こうという発想がないのか？

なんて冷たいヤツだ。

見損なった。

――いや、耕ちゃんがそんなヤツだなんて、前からわかってたことだ。

特に彼は、私には冷たく当たる。

とにかく耕ちゃんを追いかけないと、せっかく同じ部活になって、部室までの移動でお喋りをするという楽しい時間が――いや、もとい……

部活までの移動で耕ちゃんに言い訳するっていう、私のミッションがインポッシブル――つまり不可能になる。

だから焦って教室を飛び出した。駆け足で耕ちゃんを追って、廊下の突き当たりの角から階段の踊り場へと曲がる。

「うぅっ、亜衣。なにを急いでんだ？」

「おおっ、亜依、なに急いでんだ？」

――うわわっ？

私は急ブレーキをかけた。

すぐ目の前に、男子制服ブレザーの胸がある。

うわっ、近っ……

めちゃくちゃニアミスだ。

危うくぶつかるところだった。

目の前に迫ってる男子の胸から視線を上げると、そこにはきょとんとした耕ちゃんの顔がある。

私は思わずピョンと後ろに飛んで、距離を取った。

――こ、こんなに近くで、耕ちゃんの顔を見てしまった。

あわわ、どうしよう……

なぜだかわからないけど、胸がドキドキする。

私って、不整脈かも？

今度お医者さんで、検査してもらわないといけない。

それにしても……耕ちゃんの顔は、思ってたよりも、アゴのラインがゴツゴツしてるし、喉仏が尖ってる。そしてアゴからはちょっと無精ヒゲが伸びてた。

――知らない間に、なんか男らしくなってる？

廊下の角を曲がったところに耕ちゃんが立ってて、危うく耕ちゃんの胸に飛び込むところだった。

――大事故だ。

そんなことになってたら、一生再起不能になる大事故だ。

耕ちゃんの胸に飛び込むところを想像すると……いや違う。衝突事故で大怪我をしてたかと思うと、ドキドキがさらに大きくなる……

――って、なんで耕ちゃんは、こんな所に立ってるの!?

くそ腹立つから、耕ちゃんを睨みつけてやった。

「な、なんでこんなとこにいるの？　邪魔だし……」

「いや、ごめん。亜依と一緒に部室まで行こうと思って、待ってたんだ」

「ふぇっ？」

思わず変な声が出た。

わ、私を待ってた？

もしかして、『キライ』の後に送った『さっきのは忘れて』のメッセージ効果？

「なんで？　なんでこんなとこで？」

「い、いや、[illegible]

「いや……教室内で声がけるとか、亜依は嫌がりそうだったから……ここで待ってた」

「ふ……ふーん……耕ちゃんは、私と一緒に部室まで行きたかったんだぁ……」

耕ちゃんはなぜか、じっと私を見つめてる。

あ……アゴの無精ヒゲ……

うっわ。なんでかわかんないけど、無性にドキドキする。

やっぱり不整脈？

「な、なんで黙ってるの……？」

ちょ、ちょっとぉー

何とか言ってよ。

黙ってられると、不安になるでしょ……

「いや　　ごめん」

「じゃ……ごめん」

ごめん？

ごめんって何？

ここ、謝るとこ？

「やっぱり亜依が嫌ならいいよ。先に行くよ」

えっ？

ちょっ、ちょっ、ちょっと待ってぇー

嫌だなんて、私、ひと言も言ってませんけどぉー!?

「ま、待って、耕ちゃん」

「ん？　なに？」

「ちょっと耕ちゃんに話があった。たまたまね」

「たまたま？」

「うん、たまたま」

「ごめん、なさい」

耕ちゃんはまた私の顔をじっと見てる。

なに？

なんか文句ある？

ホントにたまたま話があったんだから、仕方ないじゃん。

そんな疑わしい目で見るのはやめてよ。

ああっ、もういい！

やっぱりこんなバカ男に、昨日の言い訳なんてしようとした私がバカだった。

もう絶対に、耕ちゃんと一緒になんか、部活に行ってやんない！

頼まれても、土下座されても、絶対に一緒に部活に行ってやんないんだからねーっ!!

「わかった。じゃあ一緒に行こうか、亜依」

「う……うん」

なんでー!?

なんで私は、素直に『うん』なんて言ってるのー？

また私は、イタコみたいに自分の意思とは無関係に言葉が出てる……

わかった!!　これは……きっと悪霊に取り憑かれてるんだ……

「行くぞ」

耕ちゃんが踵を返して、タンタンタンッと足音を立てて、階段を降り始めた。

「ちょっ、ちょっと待ってよー」

「早く来ないなら置いてく」

「なにー!?　このバカ男！　ちょっとは気遣いってもんが、できないのかー!?」

耕ちゃんはチラッと振り返って、ニヤッと笑った。

「ああ、僕は、亜依に気遣いなんて……できない」

それだけ言うと、耕ちゃんはまた前を向いて、早足で階段を降りて行く。

早く追いかけないと……

「なにー!?　こらー!!　バカ男、待てー!!」

「嫌だ」

気遣いができないなんて言いながら、しっかりと看病にはやって来るバカ男め――

耕ちゃんの背中を追っかけて階段を降りながら、私は確信した。

やっぱり私は――悪霊に取り憑かれてる。

だって無意識に自分の頬が緩んで、ニヤニヤしてるのがわかる。

私の意識とは無関係にニヤニヤ笑いが出るなんて、悪霊に取り憑かれてる以外り可能でこない。

そして夕の作者でもない

そして――

昨日のことを言い訳するなんてことを私はすっかり忘れて、耕ちゃんと罵り合いながら、部室まで二人で移動した。

――ああ、やれやれ。

同じ部活になったせいで、毎日こんな日々が続くのか……

あ～あ。やってらんないよ。

私はこれからもこんな日が続くと想像したら、あまりにも憂鬱で憂鬱で……なぜか思わず『ムフフ』と変な笑みがこぼれるのであった。

＝第五エピソード　完＝

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第6エピソード『舞衣とデート？』

第24話：舞衣とデート？〈1〉

◇◆◇◆◇

僕は舞衣と亜依の誕生日が、四月一二日――つまり明後日の日曜日だってことを知っている。

子供の頃はお誕生日会とかして、誕生プレゼントを渡したことはある。あの頃は女の子に誕生日プレゼントを渡すなんてことを、臆面もなくやれた。

だけど中学以降は、女子にプレゼントを渡すなんてことは、小っ恥ずかしいってことだと知った。

だからそれからは、亜依にも舞衣にも、もちろんその他の女子にも渡したことはない。

ところがなぜか、今年は急に、ふと誕生プレゼントを渡そうという気になった。

きっと悪魔が僕に囁いたんだろう。

いや――それは多分、亜依と同じ部活になって、今までと比べて圧倒的に同じ時間を過ごすことになるからだと思う。

要は、少しくらい亜依を懐柔しといた方がいい――そんな浅ましい考えからに違いない。

そしてもちろん、亜依にだけってわけにはいかないから、舞衣と二人にプレゼントを渡すつもりだ。

だけど――何を買えばいいのか？

年頃の女の子が……亜依が喜びそうなモノなんて、全然わからん。

――わからないものはわからない。

しかし無知なことが恥ずかしいのではない。自分が無知なことを知らないことの方が恥ずかしいのだ。

でも僕は、自分が無知であることを知ってる。つまり『無知の知』なのだ。知らないことは訊けばいい。

――って、ソクラテスばりにカッコよく言ってはいるが、要はそれだけ僕は、突き詰めて考えれば、亜依のことをよくは知らないってことだ。

うーむ。もしかしたら僕は、亜依の好みや気持ちを、ホントの意味ではわかってないのかもしれない……

まあとにかく、何をプレゼントしたらいいか訊こう。

――もちろん本人に……ではなくて舞衣に。

本人に訊こうもんなら、『お前はそんなこともわからないのか！』って罵倒されるに決まってる。

ここは優しい舞衣に頼るのが賢明だ。

そう考えて、昼休みを待って、舞衣のクラスに行った。舞衣は二組で僕は一組だから、廊下に出て隣の教室に行くだけだけど。

二組の出入り口で教室内を覗き込んでたら、知らない女子生徒に声をかけられた。

「あれっ？　多岐川君？　もしかして、舞衣？」

ニコニコして明るくて、なかなか可愛らしい子だ。ちょっと雰囲気が舞衣に似てるかも。

「う[illegible]

「えっ……？　ああ、そう……なんでわかったの？」

「だって入学式の日に、舞衣が『耕ちゃん、一緒に帰ろ』とか言ったから……ウチのクラスで話題になってたよ」

「そうなの？　でも僕の名前まで知られてるなんて……」

「ああそれは……後で舞衣に教えてもらった。舞衣の話に、よく多岐川君が出てくるもん」

「えっ……？」

この子は、もしかしたら舞衣と仲がいいのかな。

それにしても、舞衣の口から僕の名前がよく出てくるって……なんで？

「舞衣を呼ぼうか？」

「あ……うん。お願い」

舞衣より背丈の小さな女の子は、ニコッと笑顔を見せて、教室内に向かって大

舞衣の友達らしき女の子には、ニヤニヤと笑顔を見せて、教室内に向かって大きな声を出した。

「舞(ま)～衣(い)～！　彼氏が会いに来てるよ～！」

その瞬間、二組の教室内の空気がガラッと変わって、ざわついた。

間違いなく――ざわついた。

――おいおいおい、なんてことを言うんだよ、この子は……？

二組の教室内にいる生徒たちの多くの視線が、僕の顔に突き刺さる。突き刺さる視線があまりに鋭くて、きっと僕の顔は今、血だらけだ。

あの美少女で評判の、貴理山(きりやま)舞衣の彼氏ってどんなヤツだ？

――憧憬、嫉妬、興味。

色んな眼差しが、入り混じって僕に突き刺さる。

それらは、みんなの視線が痛かった。

ユカ、ゆいこ、みんなの神経を疑うわ
――あ、いや……もちろん僕は、舞衣の彼氏でもなんでもないんだけど。
だから二組のみんな。
そんな目で見ないでほしい。
でもこれはえらいことだ。変な噂になったら、舞衣も困るだろ。

「はーい！」
何人かの女子と一緒に机を囲んでた舞衣が、明るく答えて立ち上がり、僕の方に歩いて来る。
「どうしたの耕ちゃん。何か用？」
「あ、いや……ちょっと相談ごとがあって……」
「わかった。じゃあ少し出ましょうか」
二組の教室内は、まだざわついてる。僕が舞衣と親しげに喋ってるもんだ

から、完全に誤解してる者もいる雰囲気だ。
僕はそそくさと教室の前を離れて、舞衣と一緒に廊下を歩く。
「おい、舞衣。否定しろよ」
「何を？」
「何をって……僕は舞衣の彼氏じゃないってことだよ」
「あ、ごめん。迷惑だった？」
いや、僕が迷惑というか……
「舞衣に変な噂が立ったら困るだろ」
「別にぃ～　私はそんなの気にしないよ」
「そうなのか？」
「うん。でもまぁ……耕ちゃんが彼女にしたいのは、私じゃないからなぁ……」
[illegible]

舞衣は意味ありげに呟いた。

どういう意味だ？

「誰のことを言ってるんだよ？」

「さぁねぇ……自分の胸に手を当てて考えたら、わかるんじゃない？」

「はぁっ？」

素直に自分の胸に右手を当ててみた。

僕はなぜか、舞衣の言うことには素直に従ってしまう。

舞衣は言い方も優しいし、話す内容にも説得力がある。そこが亜依とは違うところだ。

でも……胸に手を当てて考えてみてもわからん。

僕が彼女にしたい人？

そんな人は、思い当たらない。

「つかうないなぁ　－

「それならいいな……」

僕の呟きに、舞衣はプッと吹き出した。

なんだよ。からかわれたのか？

舞衣の顔を、ジトっと睨んでやった。

「まあ、そういうことにしとこうか」

舞衣は笑ってる。

そういうことにしとこうかって……そういうことなんだから、仕方がないじゃないか。

第25話：舞衣とデート？〈2〉

舞衣と二人で廊下の突き当たりを曲がって、階段の踊り場まで来た。周りに誰もいないのを確認してから、舞衣が僕の方を向いた。

「――で、相談ごとって何？」

「あのさ……明後日、舞衣と亜依の誕生日だろ。だから何か二人にプレゼントを買いたいなって思って……」

「そうなの？　へぇ～耕ちゃんにしては、珍しいこともあるものねぇ。明日は大雨かな？」

「あはは、茶化すな。――で、何をプレゼントしたら喜ぶかなぁって、悩んでさ」
「……なるほどね。わかった。じゃあさ……」
舞衣は左手で右手の肘を抱え、右手の指をあごに当てて、考え込んでる。
「明日一緒に買い物に行かない？」

「あ、いいの？」
「うん、いいよ。亜依はどうする？　誘う？」
「できれば……亜依には内緒にしときたいな」
「ふーん……亜依には、サプライズプレゼントで驚かすつもりなんだぁ」
舞衣は僕の顔を覗き込むようにして、意地悪な表情を見せる。
舞衣は何か勘違いしてる。別に亜依を特に喜ばそうとか、そんなんじゃないし。
「いや、そんなんじゃなくて……亜依を連れてったら、ダメ出しばっかされ

て、プレゼント選びができないだろ？」
「ふふっ……そうかもね」
「だろ？　舞衣もそう思うだろ？」
「まあ、そういうことにしとこうか」
　また舞衣は笑ってる。
　そういうことにしとくって――そういうことなんだから、仕方がないじゃないか。
「じゃあ明日、駅前のショッピングモールに行こうよ。あそこなら色んな店があるし」
　僕たちの家の最寄り駅には――それはつまり僕たちが通う高校の最寄り駅でもあるんだけれど――学校とは反対側に二階建てのショッピングモールがある。

そこは一階は食品スーパーやファーストフードがあって、二階には服屋さんや雑貨屋さんが何店舗も入ってる。

確かにそこなら、亜依や舞衣が喜ぶようなものを買える気がする。

舞衣の提案に、それがいいと思った。

「うん、オーケー。何時に出かける？」

「そうね……朝から行って、買い物してから、お昼を食べて帰るってのは？」

「ああ、そうしよう。じゃあ、待ち合わせは……」

「朝一〇時に現地でいい？」

「えっ？　現地待ち合わせ？　隣に住んでるのに？　……なんで？」

「だって家の前で待ち合わせて、万が一亜依に見つかったらどうするの？二人で買い物に行くの、バレちゃうよ」

なるほど。それもそうだ。

[illegible]

さすが舞衣は頭が切れる。

「わかった。じゃあ明日午前一〇時に、駅前のショッピングモールのメインエントランスで」

「うん。楽しみにしてる」

舞衣はニコリと笑顔で、ウインクした。

うん、さすがに舞衣は可愛い。

やっぱり表情が豊かで明るいのは、可愛さが何倍増しにもなるよな。

――亜依もそうすればいいのに。

◇◆◇◆◇

こまこまな私がインから出ようと、毛布になって見えないナビ、部下の身を

たまたま私たちレッスン室だから、角になって見えないけど、廊下の角を曲がった向こうの方から耕ちゃんと舞衣の声が聞こえた。

タタタと小走りで廊下の角まで行って、身体は隠したままでそぉーっと階段の踊り場を覗き込む。

うん、間違いなく耕ちゃんと舞衣だ。

こんなところで何を話してるんだろ？

「じゃあ明日、駅前のショッピングモールに行こうか。あそこなら色んな店があるし」

「うん、オーケー。何時に出かける？」

「そうね……朝から行って、買い物してから、お昼を食べて帰るってのは？」

脳天を大きなハンマーでドカンと殴られたように感じた。

いや……大きなハンマーでドカンって――アメリカン・アニメかっての。

殴られた後に、キャラが紙みたいにペタンコになるヤツ。

いや、そんなことはどうでもいい。

それよりも……耕ちゃんと舞衣がデート!?

「ああ、そうしよう。じゃあ、待ち合わせは……」

「朝一〇時に現地でいい？」

「えっ？　現地待ち合わせ？　隣に住んでるのに？　……なんで？」

「だって家の前で待ち合わせて、万が一亜依に見つかったらどうするの？二人で買い物行くの、バレちゃうよ」

え……？

私に知られたら困る？

私って……二人にとって、そんなに邪魔者？

……そりゃ、そうか。

やっぱりそうよね……

――耕ちゃんは舞衣が好き。舞衣も耕ちゃんが好き。

やっぱり私が思ってたとおりだ。

私なんか……お邪魔虫……なんだよね。

「わかった。じゃあ明日午前一〇時に、駅前のショッピングモールのメインエントランスで」

「うん。楽しみにしてる」

ふーん……朝一〇時に駅前のショッピングモールね……

――いや別にそんなこと、覚える必要もないか。

どうせ私が行くわけじゃないんだし……

第26話：舞衣とデート？〈3〉

◇◆◇◆◇

――翌朝の一〇時。

なぜか私は駅前のショッピングモールの前にいる。

ショッピングモールの建物から車道を挟んだ向かい側の歩道で、街路樹の陰に隠れてショッピングモールのメインエントランスを覗き見てる。

――なんで？

なんで私が、耕ちゃんと舞衣が待ち合わせる時間に、待ち合わせる場所

にいるの？

しかもキャップを深く被って、サングラスをかけて、マスクをして。

そして目立たないありふれたグレーのトレーナーに、目立たないジーンズ姿。

これじゃ、まるで変装して尾行してるみたいじゃない。

いや……明らかに変装して尾行してるな、私。

それ以外に説明のしようがないスタイルだ。

私は――こんなことを、したくてしてるわけじゃない。

だけどなぜか居ても立ってもいられなかった。

エントランスのガラスドアの前には、可愛い柄のワンピースに身を包んだ

舞衣が一人で立ってる。
風になびくロングヘアが美しくて、静かに佇む美少女って風情だ。やっぱり男子はあんな感じの女の子を好きになるんだろうな。
そう思うと、知らず知らずのうちに、はぁっ……と口からため息が出てた。
もうすぐ舞衣と耕ちゃんの待ち合わせ時間の一〇時になる。舞衣は手にしたスマホの画面をチラッと覗き込んで、ちょっと不安げな顔をしてる。
そしてスマホから視線を上げた舞衣の顔が、急に光り輝くような笑顔になった。片手を上げて振ってる。
舞衣の視線の先を追うと、小走りで舞衣に駆け寄る耕ちゃんの姿があった。
耕ちゃんはああ見えて案外律儀なところがあるから、時間どおりに来る

と思ってた。

そう――舞衣は知らないのかもしれないけれど、私にはわかってた。

――わかってたんだよ、へへへ。

舞衣と耕ちゃんは二人でショッピングモールの中に入って行った。私も道路を渡ってモールの入り口をくぐる。

――よし、ターゲット捕捉。

中に入って建物内を見回すと、エスカレーターに二人並んで、上のフロアに上がっていく二人の姿が見えた。

私も距離を置いてエスカレーターに乗り、二階へ向かう。まるで悪者を追いかける、スパイになった気分だ。

――あ、いや、耕ちゃんと舞衣は、別に悪者じゃないけどね。

ファッション関係や雑貨屋が軒を連ねる二階のフロアで、私は少し距離を置いて、二人の姿を捕捉し続ける。

舞衣と耕ちゃんはいくつかの雑貨店を選んで、店内に入っては出てきた。なかなか、これという商品が見つからないみたい。

私は店内に入ったら見つかるリスクが高くなるから、通路から店内をさりげなく覗き込むようにして、観察を続けた。

そう。遠くからさりげなく眺めるだけなら、きっと大丈夫だ。

そしてさっき入った雑貨屋さんで、ようやく気に入った商品を見つけたようだ。

私は相変わらず、通路から店内を覗きんでいる。
大きなぬいぐるみと小さな置き物を抱えた耕ちゃんが、レジに向かってるのが見えた。

それにしても――

二人でホント楽しそうにお喋りをしながら、仲良く商品選びをしてる。

特に舞衣は普段から明るいけど、やっぱり耕ちゃんと二人きりで出かけるのがよっぽど嬉しいのか、いつもよりも楽しげな笑顔。

耕ちゃん――いや、耕平のヤツも、いつもよりも楽しそうな笑顔だ。

私といる時は、こんなに嬉しそうな顔はほとんどしないよね……多分。

これって……どこからどう見ても、デート……だよね？

――アホらし。

いくら双子の姉妹と幼馴染の男の子とは言え、他人のデートを覗き見するなんて。

幸せそうな姿を見せつけられるなんて――

なんだか急に虚しくなってきた。

――あ～あ。こんな所に来なけりゃよかった。

「あ……」

今なんか、お店の中の舞衣が、チラッとこっちを見た気がする。

いや、きっと大丈夫だ。

こっちはバッチリ変装してるし。

まあ怪しげなヤツには見えるだろうけど、私だってわかるはずはない。

だけど――このままじゃ、ちょっとヤバいかも。

舞衣が、『怪しげなヤツ』――まぁ私のことだけど――の存在に気づいた。

このまま尾行……いやいや、たまたまあの二人と同じ場所をウロウロしてたら、私だってことがバレるかもしれない。

――そろそろ帰ろうかな……

うん、そうしよう。

バレるのも嫌だし、何よりこの虚しさに、もう耐えられない。

私はとっとと家に帰ることにした。

＊＊＊

――夕食時。

今日は土曜日だから、お父さんもいる。

舞衣も夕方には帰って来たから、お母さんと私と、家族四人でテーブルを囲む団らんだ。

舞衣はさっき帰宅してからずっと、食事中の今もにっこにこしてる。

「おっ、どうした舞衣？　今日は何かいいことでもあったんか？」

お茶碗を片手に持ったお父さんの突然の質問に、不意打ちをくらった舞衣があたふたとしてる。

「いや、別にぃ……」

苦笑いでごまかす舞衣。

ホントはいいことがあったくせに……

「舞衣はデートでもしてたんじゃない？」

あっ……思わずいらないことを、口に出してしまった。

もしもそれを私が知ってるとしたら、様子を覗きに行ったのがバレてしまうから、それはない。

ったもしれないのは

――なんてバカなことを口走ってしまったんだろ……

「そっ……そうなのか、舞衣っ!?　お前、彼氏ができたのか？」

ああ……かわいそうにお父さん。真っ青になって焦ってる。

でも別に私のせいじゃないよね？

デートをしたのは舞衣なんだから。

「別に彼氏でもないし、デートでもないよ。隣の耕ちゃんと買い物に行っただけ」

舞衣は冷静に答えた。それがどうしたの？　――と言わんばかりの冷静さだ。

「ああ、耕ちゃんか。だったらいいか……」

耕ちゃんだったらいいかって――お父さん、どういう意味？

耕ちゃんだったら、舞衣の彼氏であってもいいってこと？　それとも耕ちゃんだったら人畜無害そうだから、彼氏とかそんなのはあり得ないと思ってるのか……

……。

……。

まあ、どっちでもいいか。私のことを言われてるわけじゃなし。私には……関係ない。

もしも舞衣が耕ちゃんと付き合うとなったら――他の男子よりも耕ちゃんが、お父さんの信頼が厚いってことはわかった。

――ただそれだけ。

「まあまあ、お父さん。早くご飯を食べないと、冷めちゃいますよ」

「あ……ああ、そうだな」

お母さんの声で我に返ったお父さんが、またご飯を食べ始めた。

舞衣は知らん顔して、ご飯を口に運んでる。

――良かったね、舞衣。

舞衣が耕ちゃんと付き合うのは、問題なさそうだよ。

第27話：舞衣とデート？〈4〉

夕飯を食べ終えて、私はすぐに自分の部屋に戻った。

うつ伏せにベッドに倒れ込んで、枕に顔を埋める。

「はぁ～っ……」

大きなため息を吐いた。

私の枕さん。

いつもいつもため息ばっか吐いてごめんね。

――口臭くない？

えっ？　なんだって？

亜依の吐く息はミントの香りだから、いい香りだって？

うわぁ、ありがとう！

やっぱ私の口は、いい香りがするんだねっ！

――って私……何をバカな一人芝居をしてるんだろ？

痛い子だねー

「あはは……」

乾いた笑い声を出してたら、部屋のドアをコンコンと叩く音がした。

「誰？」

「私……ちょっといい？」

舞衣の声だ。

「何？」

ベッドから起き上がって、ドアを開ける。

舞衣が部屋に入ってきて、後ろ手にドアを閉めた。
舞衣は私のベッドに、バフンと音を立てて腰を下ろした。そして腰のすぐ横の布団を、手のひらでパンパンと叩く。
「まあ、座りなさいよ」
――いや、ここ。私の部屋ですけど？
そう思ったけど、私は何も言わずに舞衣の横に、並んで腰を下ろした。
「あのさ……亜依」
「ん？」
「何か勘違いしてない？」
「何を？」
舞衣が上目遣いで、言いにくそうに訊いてくる。
「私……耕ちゃんとデートなんかしてないから」

「な……なんの話かなぁ……？」

もちろん何の話かわかってるけど、なんで舞衣がわざわざそんなことを言いに来たのかがわからない。

「亜依……あなた、ショッピングモールに来てたでしょ」

「ふぇっ……？」

うわっ！

ば……バレてた……

「な……んの話……かなぁ？」

「とぼけてもムダ。帽子かぶってサングラスして、私達の後をつけてた」

か……完全にバレてる！

これはさすがに、ごまかしようがないわ。

「あ……ああ、そうよ。あまりに舞衣が心配だから、つけて行った」

「な、なぜ

「私が心配……？　なんで？」

「なんでって……舞衣が耕ちゃんとのデートで失敗をやらかさないか、心配だったのだーあはは」

舞衣は呆れた苦笑いを浮かべてる。

「ちょっと待って亜依。私は二つ言いたい」

「何よ？」

「まず一つ目。私は失敗をやらかしたりしない。あなたじゃないんだから」

はっ？

舞衣がドヤ顔を向けてきた。

もしかして舞衣は、私に喧嘩を売ってる!?

そんなに耕ちゃんとデートしたことを、偉そうに誇りたいワケ？

私ごとき失敗なんて　いう、ようこうゆう　ってるな。舞衣り言うこうり

私だって今頃なんて……しゃ　しゃなくて　多分の言うとおり
だ。

「そして二つ目。あれはデートじゃない！」

さらに舞衣がドヤ顔になった。

さらには片手を腰に当てて、もう片手を私に向けて、人差し指を私の顔の前に突き出してる。

――それって、ドヤ顔で言うセリフ？

「へ～っ……あれがデートじゃなきゃ、なんなんだろねぇ……二人とも、あんなに楽しそうな顔をしちゃってさ……」

「こら、亜依。妬くな妬くな」

「妬いてなんかないし……」

「あれは亜依のためのお買い物なんだから」

「わ……私のための買い物？　なにそれ？」

舞衣が言ってる意味がわからない。

「あれはね、耕ちゃんが私達の誕生プレゼントを買ってくれるからって、ついて行ったのよ」

「私達って……？」

「耕ちゃんは、亜依と私と、二人にそれぞれプレゼントをくれるつもりなんですって」

二人にプレゼント？

でも舞衣と一緒に買い物に行ってるんだから、あくまでメインは舞衣だよね？

――私はおまけ。

「でもね亜依。メインは亜依だよ」

「なんで？　舞衣が買い物について行ってるんだし、舞衣がメインでしょ」
「それがねー……違うのよねぇ……」
舞衣は苦笑いを浮かべて、頭をポリポリ掻いてる。
いったいどういうこと？
理解不能だ。
「耕ちゃんはきっと、亜依にだけ誕生プレゼントを買いたかったんだと思う。だけど私達おんなじ誕生日だから、仕方なく私の分も……って感じかな？」
「でもそれなら、なんで舞衣と一緒に？」
「それはね……」
舞衣はにやりと笑って、ウインクした。

第28話：舞衣とデート？〈5〉

舞衣は、耕ちゃんが私達の誕生プレゼントを買ったのは、私がメインだと言った。

じゃあなんで舞衣と一緒に買い物に行ったのか？

「それはね……亜依をサプライズで、喜ばせたかったんじゃない？」

いや、そんなの信じられない。

舞衣はなんで、そんなふうに思うの？

誰がどう考えても、耕ちゃんは舞衣のプレゼントをメインに考えてるはずだ。

「そんなこと、あり得ないでしょ？　あくまでも耕ちゃんにとってのメインは舞衣でしょ？」

「それがさぁ……誕生日プレゼントのことで、昨日耕ちゃんが私に声をかけてきたんだけど……耕ちゃんは最初になんて言ったと思う？」

「そんなのわかんないよ」

わかったら私はエスパーだ。

「耕ちゃんはさ。私と亜依に誕生プレゼントを買いたいんだけど、って声をかけてきて……『何をプレゼントしたら喜ぶか、悩んでる』って言ったんだよ」

――ん？

それがどうかした？

舞衣が喜ぶプレゼントは何か、訊いてるだけじゃないの？

「酷いよね、耕ちゃんー

「なにが？　舞衣は何が言いたいの？」
「だってさぁ。私が喜ぶモノを訊くなら『何をプレゼントされたら嬉しい？』って訊かない？　耕ちゃんの言う『喜ぶ？』って言葉は、誰か他の人のことを言ってるよね」
　ん～……確かに、舞衣が言うとおりかもしれない。だけど考え過ぎのような気もする。
　舞衣が何を喜ぶか、訊いただけにも聞こえるし。
「そうかな？　舞衣の考え過ぎじゃない？」
「そうじゃないって。それにさ、私へのプレゼントは、私が自分で選んだ置き物を買ってくれたんだけど、亜依のは……」
　――私のは？

「亜依はきっとぬいぐるみを買ったら喜ぶからって、耕ちゃんはちゃんと知ってた」

「えっ？　なんで？　今まで耕ちゃんに、そんなこと、言ったことないのに……」

「そうなんだ。私はてっきり、亜依がおねだりしたのかと思ってた」

「そんなこと、しないって！」

「ふーん、違うんだ。まあ耕ちゃんは、ぬいぐるみを買うのは決めてたみたいだけど、どんなぬいぐるみがいいのかは、私がアドバイスしといたからねー」

　それにしてもなんで耕ちゃんは、私がぬいぐるみマニアだって知ってるんだろ？

「ああ、そっか。きっと亜依の部屋で、このぬいぐるみの山を見たからだ」

「えっ？」

[illegible]

確かに部屋の中には、棚に山ほどぬいぐるみを置いてある。

私が風邪をひいた時にお見舞いに来てくれたから、それを見て気づいたのかもしれない……

「まあ、とにかくさ。明日、耕ちゃんがプレゼントをくれたら、私から聞いたことは絶対に内緒だよ。あくまでもサプライズなんだから、亜依は驚いたフリをするように！」

それはわかったけど……

なんで耕ちゃんは、舞衣のプレゼントをメインにしないの？

耕ちゃんは舞衣のことが好きなくせに……

どうせプレゼントで私を懐柔して、口撃を少しでも緩めてもらおうって魂胆に違いない。

「あいにはアソかうりプ ンゼノ ト、足つ区 ンてうる！

「あんなヤツからのプレゼント、突っ返してやる」

耕ちゃんからのプレゼントなんて、受け取ってやるもんか。

「えっ!?　亜依……それ、真剣に言ってんの？」

「う……うん。ま……マジだ」

「ふぅーん……」

舞衣が私の顔を、覗き込むように見てる。

「そっか。わかった。じゃあ代わりに私が、あのおっきなぬいぐるみを貰うよ」

「えっ？」

「やったぁー！　ぬいぐるみ。嬉しいなったら嬉しいなぁー」

舞衣が万歳しながら喜んでる……

舞衣って、そんなにぬいぐるみが好きだったっけ？

「あ、ちょっと待って舞衣……」

「ん？　どぉしたのかなぁ～」

「そ……そんなにぬいぐるみが好きだったっけ？」
「いいえ、別に。タダで貰えるものは、なんでも嬉しいなぁって思っただけ」
舞衣がニヤニヤ笑ってる。
なに？
喜んでるのは、そんな理由なの？
「ねぇ舞衣。ちょっとそれじゃあ、ぬいぐるみがかわいそうじゃない？」
「ん？　そうかなぁ……？」
「そ、そうだよ。ちゃんとそのぬいぐるみを好きになってあげなきゃ」
「そっかぁ。そうだよね」
「そうでしょ？」
舞衣はなぜか、アゴに手を当てて、何か真剣に考え込んでる。
「じゃあやっぱり、ぬいぐるみは亜依が貰うのが一番だね」

「あ、いや……私は別に、自分が欲しいからそう言ってるんじゃなくて……」

「ブツブツ……（ほんっと素直じゃないんだから）」

「えっ？　何か言った？」

「いいえ、なんにも。亜依があのぬいぐるみを欲しがってはいない……ってことはわかった。だけど、私からのお願い！」

「なに？」

「私はやっぱり、あのぬいぐるみを好きになることはできない」

「ええっ？　そんなぁ……」

「それに耕ちゃんにプレゼントを突っ返しても、耕ちゃんがぬいぐるみを好きだなんて思えない」

「そ、それはそうかもね。あのバカ男が、ぬいぐるみを可愛がるなんて……しないよね」

「だ、だから、あのぬいぐるみは、耕ちゃんに渡すべきだと思う」

「だから、やっぱりあのぬいぐるみは、亜依が受け取って、大事にしてあげてよ！　それが私からのお願い」

うーん……

舞衣の言うことは、一理ある。

そっか――

仕方ない。

仕方ないよね。

めちゃくちゃ、仕方ないよね。

うん、仕方ない。

「わかった。舞衣のお願いだから、断れないな」

「そっか。亜依、ありがとう！」

「う……うん」

「ブソブソ　（ほんとに最高じゃないこいつ）

「ニヤッニヤッ……（ほんっと妄想しやすいんだから）」

「えっ？　何か言った？」

「いいえ、何にも」

また舞衣がニヤッと笑ってる。

まあ、いっか。

舞衣は喜んでるみたいだし。

仕方なく、耕ちゃんのプレゼントを受け取ることにする。

「そう言えば亜依。明日は何か予定ある？」

「特にないけど……どうしたの？」

「せっかくの誕生日だから、二人でどこか遊びに行こうよ」

「あ、いいね！　そうしよう」

双子でおんなじ誕生日だから便利だ。

あ……だけど……

「亜依。そんな不安な顔しなくても大丈夫だよ。耕ちゃんは夜にプレゼントを待ってくるって言ってた。だから昼間は出かけてても大丈夫」

「いや別に、そんなことを心配してるわけじゃないからね。舞衣はなに言ってんの？」

「そうよね。そうだよね。ごめんごめん」

舞衣はまたまたニヤニヤしながら、じゃあまた明日ねと言い残して、私の部屋を出て行った。

第29話：舞衣とデート？〈6〉

＊＊＊

翌日、日曜日。

そう。私と舞衣の誕生日。

朝から舞衣と二人で遊びに出かけて、夕方には帰宅した。

夕飯が始まるまで、舞衣とともにリビングのソファに座ってテレビを見てる。

時計を見ると五時だ。

耕ちゃんは、夜にプレゼントを持ってくる――
舞衣はそう言ってた。
夜と言っても、何時頃に来るんだろうか。
「ねぇ舞衣」
「なに？」
「耕ちゃんは何時頃来るの？」
「知らない。時間までは聞いてない」
「そっか……」
耕ちゃんが急に来ても大丈夫なように、トイレに行っとこう。
トイレから戻って、またテレビを見る。
しばらくテレビを見てたけど、またふと気になって時計を見る。
もう六時だ。

「ねぇ舞衣」
「なに？」
「耕ちゃんは何時頃来るの？」
「それさっき聞かれた。時間までは聞いてない」
「あ、ああ……。そっか……」
夕飯を食べ始めて――食べ終わってもアイツは来ない。
時計を見たら、もう七時だ。
「ねぇ舞衣」
「なに？」
「耕ちゃんは何時頃来るの？」
「それ三回目。よっぽど待ち遠しいんだねぇ？」
「あ、いや……そういうわけじゃないけどー！」

舞衣がニヤニヤしてる。

別にプレゼントが待ち遠しいわけじゃない。

――そう。

あんまり遅くに来客があると、お父さんとお母さんに迷惑がかかるから、私は時間を気にしてるんだ。

「あんまり遅くに女子の家を訪ねてくるなんて、アイツは非常識だな――……って思っただけ」

「ふぅーん。まぁ、そういうことにしとこうか」

また舞衣は笑ってる。

そういうことにしとこうかって――そういうことなんだから、仕方がないじゃない。

その時――ピンポンと玄関チャイムが鳴った。

「ハーイ」

「あ、耕ちゃんかな」

舞衣がそう言って立ち上がろうとした。

私は特にプレゼントなんてほしくないから、玄関に行くのは舞衣に任せよう。

舞衣が玄関から私を呼んだら、それからゆるゆると玄関まで歩いていけばいい。

――頭ではそう考えてた。

いや、間違いなくそう考えてたのに。

あれっ？

気がついたら、なぜか私は舞衣を押しのけて、廊下から小走りで玄関ドアの前に立ってる。

なんで？

――なんて？

また考えてることと違う動きを身体がしてる。

これは――

やっぱり悪霊が憑いてるんだ。

――とかなんとか思いながらドアを開けた。

大きな袋を抱えた耕ちゃんが立ってる。

「あれ？　こんな夜遅くにどうしたの？」

「ああ、亜依。誕生日おめでとう」

耕ちゃんがいきなり大きな袋を差し出したもんだから、思わず受け取った。

受け取ってしまった。

「な……なにこれ？」

「誕生日プレゼント。開けてよー

「あ……うん」

袋を開けて中身を取り出すと、大きな熊のぬいぐるみだった。

私が一番好きな、熊のぬいぐるみ。

「あら、耕ちゃん。いらっしゃい」

背中の方から舞衣の声がする。

「あ、舞衣も。誕生日おめでとう！　これ、プレゼント」

「わぁ、ホント？　ありがとう！　何かなぁ～」

舞衣がわざとらしく言って、袋を開けてる。

「へぇ～！　可愛い置き物！　嬉しいなぁ！」

舞衣の顔を見ると、満面の笑みだ。

とても自然な笑顔だ。

元々プレゼントの中身を知ってたなんて、誰も気づかないくらい自然だ。

舞衣め。

――役者だ。

プレゼントを渡した女の子から、こんな可愛い笑顔を返されたら――きっとどんな男もイチコロだ。

さすが舞衣。

「なんで耕ちゃん。突然、誕生日プレゼントなんかくれるの？」

それに引き換え、私の口からは『ありがとう』のひと言が出てこない。

満面の笑みも出てこない。

自分の顔が引きつってるのが、自分でわかる。

「なんでって……急に渡したくなったんだよ。迷惑だったか？」

耕ちゃんが困った顔をしてる。

「め……め……めいわく……」

ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ

――ありがとう、ありがとう、ありがとう

――嬉しい、嬉しい、嬉しい

心の底からは、素直な気持ちがあふれてる。

もちろん迷惑だなんて思わない。

でも、『めいわく』の先が、言葉が詰まって出ない。

「そっか……やっぱ迷惑だったか……」

「ちがっ……ちがっ……」

目にどんどん涙がたまってくるのが自分でわかる。

なんだかわからないけど、嬉しくて言葉にならない。

きっと前から欲しかった熊の大きなぬいぐるみが手に入ったから、私は嬉しいんだ。

別に耕ちゃんが私のために、わざわざ誕生プレゼントを買ってくれたから、なんて理由じゃなくても。

ら、なんて理由しかなくても
きっとそうに違いない。
「ん？　どうしたんだ亜依？　おまえ……もしかして泣いてる？」
びっくりした耕ちゃんの顔が霞んでる。
もうだめだ。
こんな顔を耕ちゃんに見せられない。
「ご……ごめん。あ……あ、ありがとう」
なんとかそこまで言えた。
でもこれ以上は無理。
私はくるっと振り向いて、どたばとした足取りで階段を昇る。
後ろで「大丈夫か、亜依？」という耕ちゃんの声が聞こえたけど、私にはもうそれに答える余裕はない。
「ごめんね耕ちゃん。また後で亜依から連絡させるから」

舞衣がフォローしてくれてる声が聞こえた。
うん、そうだ。
あとで耕ちゃんには、お詫びをしなきゃな。
そう思いながら、自分の部屋のドアを開けて室内に飛び込んだ。

第30話：舞衣とデート？〈7〉

私は耕ちゃんからもらった大きな熊のぬいぐるみを胸に抱えたまま、ベッドに飛び込んだ。

ぬいぐるみの顔を見つめる。

大好きな熊。

しかもこんなに大っきい。

なかなかこんな大きなものは、買えなかった。

嬉しい。

ずっとこんなのが欲しかったんだぁ。

じっと熊の顔を見る。

可愛い。

熊の顔に、自分の頬を当ててみる。

柔らかな毛の感触が、とっても気持ちいい。

頬をすりすりしてみた。

――あ、気持ちいい

思わずぬいぐるみの胴体を、ギュッと抱きしめた。

とても心地よくて、なんだか安心する。

もう一度熊の顔を見る。

黒くてつぶらな瞳。

私を見つめてる。
可愛い。
――耕ちゃんがくれたぬいぐるみ。
そう思うと、なんだか、ドキドキしてきた。
もう一度、熊の顔に頬をすりすりした。
「耕ちゃん……」
思わず、無意識に囁いた。
囁いてから、ドキっとした。
思わずぬいぐるみから顔を離して、熊の顔を見つめる。
ヤバい。
顔をすりすりしながら、アイツの名前を呼ぶなんて。
なんてヤバいことをしてしまったのだ。

でも……

今耕ちゃんの名前を呟いた時に、何か背中がぞくぞくっとした。

不快な感じではない。

むしろ気持ち良かった。

――あれっ？

熊の顔をもう一度よく見ると、なんだか笑ってる耕ちゃんに見えてきた。

――あ、今……すっごく危険なことが頭をよぎった。

ダメだ。危険すぎる。

いや……でも、やってみたい。

――あ、いや、やっぱりダメだ、そんなこと。

もう一度、ぬいぐるみの顔を見つめる。

いや、待てよ……

やっぱり耕ちゃんの顔に見える。

もしもこのぬいぐるみに顔を押しつけて、胴体を抱きしめて、もっとはっきり耕ちゃんの名前を呼んだら……

どうなってしまうんだろう？

――ああっ、どうしよう!?

危険思考が私を捉えて離さない。

ダメだダメだダメだ。

そんなことをしたら……絶対にダメだよね？

もしもそんな姿を誰かに見られたら……

恥ずかしすぎる。

私はもう、立ち直れない。

私はもう、立ち直れない
――でも。
ここは、私の部屋。
誰に見られるというんだろう？
誰にも見られることは、ないではないか。

――よしっ！

もう一度、熊の顔を見る。
――可愛い。可愛すぎる。
私は――
熊のぬいぐるみの胸に――
顔を――
埋(うず)めた。

毛の感触が……

――ああーん、気持ちいい！

ぬいぐるみの身体を、ぎゅうーっと抱きしめる。

「耕……ちゃん」

禁断の行為――のような気がする。

「耕ちゃん……」

名前を囁くと同時に、ぬいぐるみの顔に、頬をすりすりした。

「耕ちゃん、耕ちゃん、耕ちゃん」

すりすり、すりすり、すりすり。

――もう止まらない。

「耕ちゃん、耕ちゃん、耕ちゃん」

すりすり、すりすり、すりすり。

――その時。突然ガチャっとドアが開いた。

「亜依……？」

恐る恐るドアの方を見ると、舞衣が呆然とした顔で立ちすくんでる。

え……えらいところを見られてしまった。

顔が、かぁーっと熱くなる。

どうしよう？

不覚だ。

この貴理山（きりやま）亜依。

一生の不覚だ。

穴があったら入って、死んでしまいたい。

あ……普通は穴に入るか死ぬか、どちらか一つだよね？

それほど恥ずかしいってことだ。

「や……やあ、舞衣じゃないか。そんな顔をして、どうしたのかね？　あはは……」

私はベッドの上で座り込んだまま、舞衣を見上げる。

「いや……別に……」

明らかに舞衣は動揺してる。

笑顔が引きつってるもん。

そして、なんと言えばいいのか、表現のしようがないくらい複雑な表情をしてる。

「よ……よかったねぇ、熊のぬいぐるみ。あとでちゃんと、耕ちゃんにお礼を言うんだよー」

「う……うん。わかった」

「ぐやるるー　ぐるすみー

「しょ　あれ　　おやすみ」

舞衣はそれだけ言って、バタンと扉を閉めた。

まだ寝るには早い時間なのに、おやすみって……

舞衣が去って、部屋の中はしーんとしてる。

急に後悔がこみ上げてくる。

うっわ。

凄いところを舞衣に見られた。

舞衣に私は変態だと思われた？

だ……大丈夫だよね？

でも、まあ。

見られてしまったことは、もう取り返しようがない。

──で、あるならば……

もう一度。

あの気持ち良さを味わっても……いいよね？

私はごくりと唾を飲み込み、熊の顔を見つめた。

――よしっ！

またぬいぐるみをギュッと抱きしめて、熊の顔に頬をすりすり。

すりすり、すりすり。

すりすり、すりすり。

ええいっ！

もう、どうとでもなれっ！

そう思えるくらい気持ち良くて、そして――

自分の頬が緩んで、にやにやが止まらない。

ああ、幸せだ。

でもこんなことをしたのは、絶対に耕ちゃんには言えない。

一生言わない。そう心に誓った。

だけど――

私にとって、今までで一番幸せな気分の誕生日になった。

「まあ今日だけは、あのバカ男に感謝してやるか」

あくまでも私は、耕ちゃんに対してそんな上から目線な言葉を呟いて。

その夜は、ぬいぐるみを抱きしめたまま、これ以上ない幸せな気分で――

眠りに落ちた。

――耕ちゃん。素敵な誕生プレゼントを、ありがとう。

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第7エピソード『亜依を可愛くしてやる！』

第31話：亜依を可愛くしてやる！〈1〉

◇◆◇◆◇

ある日――

その日金曜日の、午後の最初の授業は体育のはずだった。

だけど男子体育の担当教諭で、僕たちの担任、田中太郎先生が昼休み終了直前に教室に来て、こんなことを言った。

「悪い！　急きょ、急ぎで行かなきゃならんことができた。今日の男子体育は自習だ。教室で好きな科目の自習をしといてくれ」

「先生～女子は？」
「女子は担当の横山先生がいるから、普通に体育の授業だ。着替えてグランドに行け」

女子の一部から「え～っ!?　不公平～！」という声が上がるとともに、男子からは「やった～！」という歓声があがったのは言うまでもない。
教室の中は、男子だけの自習。
ある意味天国だ。
騒いでないで真面目に自習しようよ、なんて言う女子はいない。
スケベな話をしても、顔をしかめたりバカにする女子はいない。
そう、男子天国。

そして予想どおり、授業開始のチャイムが鳴ったあとも、ほんの一部を除いて、誰も自習なんかしちゃいない。

僕の席には例によって例のごとく、ミスター・フレンドリー勇介とモブくん一号から三号が集まってきて、勝手に近くの椅子を使って座ってる。

「なぁなぁ、耕平」

「なに、勇介？」

「いつになったら、舞衣様を俺に紹介してくれるんだ？」

まだ言うか？

またその話題か？

もしかして勇介にとっては、『舞衣をいつ紹介してくれるのか？」』ってセリフは『こんにちは』と同義なのか？

そうとしか思えないくらい、勇介は毎日のように、そのセリフを吐く。

「おいおい、勇介。隣の組の女子ばっか狙ってないで、このクラスにも可愛い女子はいるだろ？」

「このクラス？　でも舞衣様に比べると、月がスッポリだ」

「はっ？　なんだって？」

「いや、月とスッポンだ」

なんだ。単なる小ネタかよ。

無視（スルー）しとこ。

それにしても今の発言は、今は誰もいないとは言え、このクラスの女子に失礼だぞ。

ちょっと勇介に言ってやらなきゃ。

「でも、そこそこ可愛い子はいるだろ？」

「あ……まぁ、そうだな。えっと……誰だろ？」

勇介は視線を斜めに上げて考えてる。
しめしめ。これで舞衣から、話題をそらすことができる。
――と思ってたら、横からモブ君一号が口を挟んだ。
「ウチのクラスは、大した女子がいないよなぁ」
こら、モブ君一号。
せっかく勇介が考えてるんだから、要らぬことを言うな。
「そうだよなぁ。なんかパッとしない女子が多いよな、ウチは」
「そうそう。特に貴理山（きりやま）なんて、地味だし根暗だよな」
「ああ、貴理山（きりやま）か。あれはないな」
はぁっ!?
亜依は確かに地味でダサダサな見た目だけど、そこまで言わなくてもいいだろ？

モブ君一から三号め、なんて酷い言いようだ。

「いや、貴理山さんって、そんなに酷くはないだろ……」

別に僕には亜依を庇い立てる義理なんてないんだけど……あまりに酷い言われように、ついつい口を挟んでしまった。

「はっ？　なに言ってんだ多岐川。お前、目がおかしいのか？」

モブ君二号が、呆れたような視線を僕に突き刺してくる。

他の三人も、そうだそうだと言わんばかりにうなずいてる。

いやいや。目がおかしいのは、お前らだ。

亜依は、お前らが超絶美少女だって絶賛してる舞衣と、顔はほとんど同じなんだぞ。

「おいおい、目がおかしいって、失礼だな。僕は物事を、なんでもポジティブに捉える性格なんだよー

「それ、ポジティブに捉えすぎー！」

モブ君二号が、僕を指差しながら笑った。

あ、いや。ホントに亜依がどう言われようと、僕には関係ないんだけど……

「そ、そうかな？」

「そうだよ多岐川（たきがわ）ー」

まぁだけど、亜依はボサボサの髪型や服装、それに特に分厚いメガネがダサすぎて、そう見られても仕方ないか……

そう自分に言い聞かせるものの、なぜかムカつく気持ちを僕は抑えることができない。

それからみんなは、ウチのクラスなら誰々がちょっとはマシとか、誰々はそ

こそこそ見れるとか……

正直自分も含めてこのグループの男子は、全然イケメンでもなんでもないのに、女子が聞いたら激怒りするような、上から目線の品定めトークに花が咲いた。

その中でも亜依が一番みんなの評価が低いことに、僕はなんだかモヤモヤしたものがずっと心の中に引っかかっていた。

＊＊＊

その夜。

晩飯を食べ終わって、自分の部屋でうだうだしてる間も、あのことがずっともやもやしたままだった。

～～……。

あのこと、

――そう。クラスの連中の亜依への評価が、めっちゃ低いこと。

なんでかわからないけど、それが凄くムカつく。

あれからずっと、その気持ちが消え去ることはなかった。

うーん……

色々と考えた結果、僕はひとつの結論に達した。

――よし。亜依を可愛くしてやる！

あいつはそんなこと、全然望まないだろう。

だからこれは、単なる僕の独り善がりだ。

だけどこの心の中のもやもやを晴らすには、それしかない。

そして僕は、そのための方法を考えた。

明日は土曜日で学校が休み。

亜依をうまく誘い出せるだろうか

亜依をうまく誤魔化せるだろうか……

うまくいくかどうかは、わからんけど。

まあ、とにかくやってみるか。

そう考えて、スマホを手にした――

『ちょっと亜依にお願いがある。明日、買い物に付き合って欲しい』

ちょっと素っ気ない文面だけど、そう書いて亜依にＬＩＮＥを送る。

変にだらだらと理由を書いたり、おべんちゃらみたいな媚びた文章を送ると、いつもと違いすぎて怪しまれる。

亜依にはこれくらい素っ気ない方が、自然に思われるはず。

――しばらく待つと、返事がきた。

『なんで？』

あはは、僕以上に素っ気ない返事。

『親戚の女の子にプレゼントを送る必要ができて、亜依にアドバイスを貰い

たい』

さあ、この嘘に、亜依は引っかかってくれるだろうか？

『なんで私？』

おいおい、もう少しくらい丁寧なメッセージをくれよ。

まあ、いいけど……

『亜依の意見を聞きたいんだ。ダメか？』

くどくどと理由は書かない。

理由を書くと、亜依に断る理由を考えさせることになる。

こんな感じだったら、逆に亜依はなんだかんだと聞いてこないはずだ。

普段の会話でも、それがメッセージのやり取りであっても。

踏み込んだことを聞くのが、亜依は苦手だから。

そう考えて、しばらく返事を待つ。

今度はなかなか返信が来なかったけど、僕も追加のメッセージを送ることは我慢して待った。

『わかった。その代わり、何かお礼はしてもらうから』

よしっ！

魚は釣れた！

あとは釣れた魚を、どう料理するかだ。

料理人、耕平の腕が問われるな。

明日次第だ。

第32話：亜依を可愛くしてやる！〈2〉

＊＊＊

土曜日の午前一一時。

家の前で亜依と待ち合わせて、歩いて駅前のショッピングモールに行く。

俺が先に待ってたら、亜依が玄関扉を開けて出てきた。

「おはよう」

俺が笑顔で声をかけたのに、亜依は相変わらずの無表情で「おはよ」とぶっきら棒な返事。

ホントは行きたくもない買い物に付き合わされて、不機嫌マックスなんだろう。

くそっ。もう高校生なんだから、ちょっとは愛想というものを学べよ。

――とは思うものの、作戦遂行のために今は我慢だ。

亜依の服装はグレーのパーカーに、何の特徴もないデニムのジーンズ。

これも相変わらずの、地味な格好。

ショッピングモールに行くぞと言ったら、亜依はちょっと焦った表情を浮かべた。

たぶんこの前、舞衣と誕生プレゼントを買いに行ったのを、亜依が尾行してたから、なんとなく気まずいのかもな。

まあ僕は、そのことについては気づいてないことにしてるけど。

だから僕は知らんぷりして、なに食わぬ顔で亜依と一緒にモールに行った。一応亜依も素知らぬ顔をして、ついてきた。

――よしよし。素直でよろしい。

「何を買うの？」

「うーん……なにを買おうかなぁ……」

心の中では、亜依が少しは可愛く見えるような服を買うんだよ、とつぶやいたけれども。

もちろん口には出さずに、曖昧な返事をして、ショッピングモールまで歩いた。

モールに着くと、可愛い服がたくさんディスプレイされてる、ガールズ

ファッションの店を探して入店した。
　この前舞衣と来たときに見かけて、なかなか可愛い服を売ってると気になってた店だ。
「耕ちゃん。こんな店で、何を買うつもり？　アクセサリーとかいいんじゃない？」
　親戚の女の子へのプレゼントを買うとか言ってこんな店に入ったら、アクセサリーなんかを思い浮かべるのは妥当なところだ。
　だけど今日の僕のターゲットは、そんな小物ではないのだよ、亜依よ。なんと言っても君をイメチェンさせるのが、本日の僕の作戦なんだから。
「あっ……」
「ん？　どした？」
　店内に入ると、亜依が突然小さく声を出した。視線の先を追うと、棚の

上に大きなぬいぐるみ。

大きく垂れた耳がウサギっぽいけど、体が青い。なんの生物なのか、よくわからんぬいぐるみ。

顔も歯を二ッと出して、全然可愛くない。

「めっちゃ可愛い……」

えっ？　亜依は、あんなのがお好みか？

でも今日は、亜依のぬいぐるみを買いに来たわけじゃない。

僕は亜依の言葉を無視して、店内をぐるっと見回した。

――おっ！

マネキンにディスプレイされた服のコーディネートが可愛くて、ついつい目を奪われた。

「うぅっ、これ服いいなぁ」

「ああ、この服いいな」

白っぽい襟付きのノースリーブシャツに、赤いフレアのミニスカート。それにボーダーのハイソックス。

亜依のイメージと真逆の、可愛くて明るいファッションだ。こんなのを亜依が着たら、だいぶんイメージが変わるだろう。

そう思いながらディスプレイを眺めてたら、ニコニコした女の店員さんが声をかけてきた。

「いらっしゃいませー　このコーデ、めちゃくちゃ可愛いでしょー」

あふれんばかりに愛想が良くて、明るい人だ。この愛想の良さのほんの一部でも、亜依に分けてやってほしい。

「あ、はい。そうですね」

「でしょー！　きっと彼女さんに似合いますよぉー！」

店員さんは、満面の笑みを亜依に向ける。完全に亜依を彼女と勘違いし

てる。まあ、好都合か。僕の意見も聞いてもらいやすい。

「えっ？　あっ？　いやっ……」

亜依は彼女と間違われて、否定するように両手を振ってる。だけど僕は亜依を無視して、あえてチラッと店員さんを見て、呟いてみる。

「着てみたら、どんな感じなのなかぁ……」

店員さんは、待ってましたとばかりにさらに満面の笑み。

僕に向かってうなずいた後、一オクターブ高い声を亜依に向けて発した。

「ご試着できますよぉー　どうぞこちらへー！」

店員さんはディスプレイマネキンの下の棚から、同じ商品をテキパキと取り出した。そして亜依の背中を押して、試着室の方へと押して行く。

「あ、いや、あの……私は……」

亜依はこの服を買うのは私じゃないと、店員さんに言いたいのだろう

が……

コミュ障で初対面の人と喋るのが極端に苦手な亜依は、うまく言葉にならない。

だから店員さんに背中を押されながら、振り返って僕に助けを求める視線を送ってきた。

だけど僕は、他の商品を見るふりをして、亜依とは目を合わせない。

亜依は泣きそうな顔で、あわわ、あわわと言いながら、店員さんに押されて試着室へと消えて行った。

店員さんがシャッとカーテンを閉める。

――悪いな亜依。でもこれはお前のためだ。

僕だって服を買うなんて、お小遣いに痛手だけど、今回は亜依のために身

銭を切る覚悟をしたんだ。だから許せ。

試着室の前まで行くと、着替えをする亜依を、店員さんが待っている。

試着室の中ではがさごそと動いてる気配がするし、亜依は観念して着替えてるようだ。

――作戦どおりだ。

亜依は、僕には罵詈雑言を浴びせたり、いくらでも否定的なことを言うくせに……

他人に否定的なことを言ったりするのが超苦手だ。

僕が近寄って来たのを見て、店員さんはニコッと笑いかけてきた。

僕も笑い返す。

「この服って、凄く可愛くていいですね」

「でしょー！　超オススメでーす！」

試着室の中の亜依の動きが止まった。着替え終わったみたいだけど、可

試着室の中の亜依の重さが上乗った。着替え終わったみたいだけど、何も言ってこない。

やっぱり恥ずかしいんだろう。それに自分が服を買うわけじゃないって思ってるから、出てくるのに躊躇してるのかも。

「いかがですかー？　お着替えはお済みですかー？」

「あ……は、はい」

「じゃあ、開けますねー！」

さすがだ、店員さん。グイグイ押し進める。いいぞ。

普段自分が服を買う時は、グイグイ押してくる店員がウザいと思ってたけど、今日はそのグイグイっぷりが頼もしい。

いやもう、気持ちいいくらいだ。

店員さんが試着室のカーテンを、サッと引いた。

そこに立ってたのは……

「あ、まだメガネをかけてないから、ちょっと待って」

外したままのメガネを、体の前で持ったままの亜依。

慌ててメガネをかけようとしてる。

「あっ、ちょっと待って、亜依。そのままで！」

「えっ？」

亜依はかけようとしてたメガネを手に持ったまま、動きを止めた。

――いやいやこれは……ホントに、亜依……なのか？

……想像以上だ。

僕は自分の目を疑った。

第33話：亜依を可愛くしてやる！〈3〉

マネキンが着てたのと同じ、白っぽい襟付きのノースリーブシャツに、赤いフレアのミニスカート。そしてボーダーのハイソックス。

とても恥ずかしそうに真っ赤な顔をした亜依が、その可愛い服装でもじもじとしてる。

メガネを外せば、超絶美少女の舞衣とよく似た、可愛い顔。

もちろん可愛いだろうとは思ってたけど……

それはもう、想像以上の可愛さだった。

綺麗な二重のパッチリとした目。こじんまりとして可愛い鼻。

しゅっとしたあごの小顔。

そしてそれら顔のパーツが、これ以上ないバランスの良さで整っていて……綺麗だ。

亜依の姿を見て、思わずドックンと鼓動が跳ね上がった。

ただひとつ残念なのは、ボサボサの髪型。それが亜依の可愛さを半減させている。

「あ……あのぅお客様っ！」

さっきまでキャピキャピした話し方だった店員さんが、亜依を見て、少し興奮気味の上ずった声を出した。

「ちょっとお願いです！　ちょっと写真撮っていいですか？」

「写真？　な……なぜ？」

亜依は驚いて、おどおどしてる。

着慣れない服を着せられて、すごく恥ずかしい上に、写真を撮らせろなんて、そりゃそうだろう。

「当店の服の、お客様モデルを募集してるんですよ！　ほら、あれ！」

店員さんが指差す方を見たら、レジカウンター台に『お客様モデル募集中！』と書かれたポスターが貼られてる。

――んーと、なになに？

応募者の中から二名様に、当店の服のモデルになっていただきます。

特典として……モデルをしていただいた服を、全て無料提供だって!?

「ホントは応募者の中から二名様を選ぶんですけど、お客様なら今即決で、モデルになって欲しいです！」

「はえっ？　えむっ？　ほえっ？」

亜依はあまりに驚いたのか、訳のわからない言葉を発してる。

いや、僕だってめっちゃ驚いてる！

モデルをしたら、服が全部タダだなんて書いてあるし！

「お客様のように可愛い方に、ウチの商品のモデルになってもらえるなら、こんなにありがたいことはありません！」

「亜依。ぜひ、モデルをやりなさい！」

僕は思わず、即答した。しかも命令口調で。亜依は僕の顔を見て、「はあっ？」って顔を歪めた。

ヤバい。ついつい『服がタダ』に釣られて、偉そうに言ってしまった。

亜依の毒舌が炸裂しそうだ……

「あ……ごめん。モデルをやってみようよ」

「そ、そんなの、やだよ！　絶対にやだ！」

亜依は顔を真っ赤にして、両手を激しく振って拒否してる。

僕は店員さんにアイコンタクトを送る。

（さあ、もっとグイグイ行ってください！）

店員さんはコクンとうなずいた。

顔がきゅっと引き締まって、表情で『ラジャー』と言ってる。

「あっ、そうだ、お客様。今オーケーをいただけるなら、さらに何かプレゼントいたしますがっ！」

「プレゼント……？」

亜依は、店に入る時に見てたぬいぐるみをチラッと見た。

耳が長くて青い体の、いったい何の生物だかわからない、僕からすれば気色悪い、あのぬいぐるみだ。

「あっ、そうだ店員さん。あのぬいぐるみを貰うことはできますか？」

僕が指差すと同じ、店員さんが耳を可愛く動かす。

僕が指差す方向に、店員さんが目を向ける。
「あっ、あのぬいぐるみですか？　いいですよー」
その言葉を聞いた瞬間、亜依の口元がふっと緩んだのを僕は見逃さない。
「良かったな、亜依！」
「えっ……？」
戸惑う亜依に、店員さんは間髪入れずに畳みかける。
「あのぬいぐるみ、めっちゃ可愛いですよねー　実はあれ、ウチの会社がメーカーとタイアップして製作した、限定の非売品なんですよ！」
「そ……そうなの？」
亜依は、きらきらと目を輝かせてる。
よし、いいぞ。グッジョブだ、店員さん。
「でもお客様みたいな可愛い人がモデルになってくださるなら……うーん、

もう、思い切って差し上げちゃいますっ！」

「は、はいっ！」

「うわぁー！　ありがとうございまーす！」

「わ……わかりました……」

亜依の「はい」は、承諾の意味じゃなかったような気がする。けれども店員さんがニコニコ顔で、亜依の手を握ってお礼を言うもんだから、亜依はもう否定できなくなったようだ。

さすがだ店員さん。

スペシャル・グッジョブだ。

「じゃあ、早速写真を撮りますねー　ここに立ってください」

店員さんに誘導されて、亜依は大人しく、ちょっと広いスペースに移動す

る。

「あっ、ちょっと待って。髪型を整えましょう」

店員さんは奥からブラシと、スプレーとかワックスとか、ヘアセット用具を持ってきた。そして亜依を椅子に座らせる。

「ちょっといじらせてもらいますよー」

亜依の返事を待たずして、店員さんは手際良く亜依の髪をセットしだした。

ボサボサの髪をブラシで綺麗に整える。さらさら、艶々した髪になった。

そしてワックスを使って髪に流れを作り、指を髪に入れて、最後にふわっとした感じに仕上げる。

店員さんは、かなり手慣れた感じ。

あっという間に亜依のボサボサ頭は、モデルさんのような洒落たヘアスタ

イルに変身した。

――いや……ホントに……なんて言ったらいいのか……めっちゃくちゃ可愛い。

この服装と髪型のせいか、舞衣よりも可愛く見える。

みんなから超絶美少女と絶賛されてる、あの舞衣よりも、だ。

――凄いぞ、亜依。

第34話：亜依を可愛くしてやる！〈4〉

髪型を整えた後の亜依の顔を眺めた店員さんが、感嘆の声を上げた。

「おおーっ！　やっぱり思ったとおり！　お客様、すっごーく可愛いです！」

店員さんは、両手をぶんぶん振って、嬉しそうだ。

「はい、こちらに立って！　早く早く！」

興奮気味の店員さんに急かされて、亜依はあたふたと立ち上がった。そして気をつけの姿勢で棒立ち。顔はカチコチにこわばってる。

「ほら、お客様！　笑顔、笑顔！　そしてポーズを取って！」

「そ……そんなこと、言われても……」

「ほら、彼氏さんも！　ボーッとしてないで、彼女さんに声かけてあげてくださいよぉ～」

いや、彼氏さんでも彼女さんでもないんだけど……

それに声をかけるって言ったって、どんな声をかければいいんだ？

「ほら、彼氏さん！　彼女さんがこんなに可愛くなったんだから、『可愛い～』とか『愛してる～』とか、あるでしょ！」

いや、さすがに『愛してる』は無理だ。だけど『可愛い』くらいなら、なんとか。

――実際に凄く可愛いし。

「亜依……めっちゃくちゃ……か、か、可愛いぞ」

「ふぇっ？」

あまりにも言い慣れない言葉だから、かなり噛んでしまった。亜依は僕の

そんな言葉に顔を赤らめて、益々固い表情になってしまった。大失敗だ。
「ああん、もう！　彼氏さんがそんなに緊張したら、彼女さんはもっと緊張しちゃうじゃないですかぁー　ほら、落ち着いて！」
「あっ、ああ……そうですね」
ホントだ。なんで僕がこんなに緊張してるんだ？　落ち着け、落ち着け。
「亜依……ほんっとに可愛い……と思う。マジで」
亜依は伏せた顔をゆっくり上げて、上目遣いに僕を見た。
そして「えへっ」っとはにかんだ。
――うわっ、マジ可愛い！
店員さんが大きな声を上げた。
「おおーっ、その表情いただきっ！　かーわいいっ！」
店員さんがパシャパシャと、デジカメのシャッターを切る。

「いいねぇーいいねぇー！　もうちょい笑ってみようかー」

店員さんの言葉につられて、亜依は少し笑顔を浮かべる。

「おおーっ、可愛いよー　ほら、もうちょっと笑顔でー！　おっ、いいよ、いいよー！」

この店員さん……プロのグラビアカメラマンかよっ!?

モデルをノセるのが、めちゃくちゃ上手い。亜依が普段見せないような笑顔を引き出してる。

亜依も段々と慣れてきたのか、自然な笑顔が出せるようになってきてる。

可愛い髪型。

可愛い服装。

そして可愛い笑顔。

目の前でポーズを取ってるのが亜依だとは信じられない。ホント、まさに

トップアイドルの撮影会を見てる気分。

――それくらい亜依は可愛いくて、キラキラと輝いて見える。

店員さんは調子に乗って百枚くらい写真を撮って、ようやく満足したみたいだ。

「これくらいにしときましょうー」

と言って、撮影会は終了した。

「いやぁ、素晴らしいモデルさんに出会えて良かったぁ！　これならウチの商品も、すごーく映えますよー　ほら！」

店員さんは亜依に、デジカメのモニタを見せた。亜依は目を丸くして、モニタを見つめてる。

「こ……これ、ホントに私……？」

「はい、そーですよー　ウチの服、可愛いでしょー？　これからもよろしくお

「はい、そうです。　Ｔシャの服、可愛くてしっくりくるし、これならもっと楽しくお願いしまーす」

「は……はぁ……」

なかなか商売上手な店員さんだ。

ちゃっかり亜依に、お店をアピってる。

今日撮った写真は、一、二ヶ月したら、ポスターにして店内に貼り出すらしい。それと写真データは後で亜依にメールしてくれると言う。

「じゃあそろそろ行こうか、亜依」

「えっ？　親戚の女の子へのプレゼントは？」

「えっ？　あ、ああ……そうだったな」

ヤバいヤバい。亜依を可愛くするミッションをコンプリートしたもんだから、ホッとしてしまった。口実に使ったプレゼントのことをすっかり忘れてた。

適当に2,000円くらいのアクセサリーを見繕って、買うことにした。

そして店員さんから商品の袋を受け取って、店を出ようとすると――

「あの……耕ちゃん、待って」

「ん？　なんだ亜依。まだなんか買うのか？」

「いや、そうじゃなくって……着替えなきゃ」

亜依は恥ずかしそうな顔で、自分が着てる服を指差してる。

このままの格好で表に出るのは、相当恥ずかしいんだろう。

でも――

せっかく亜依がこんなに可愛くなってるんだ。もう元の服装に着替えてしまうのはあまりにもったいない。

この可愛い格好のまま、ちょっと外を連れ歩きたい気がする。

「いや……亜依。そのまま、着て行こうよ」

「えっ？　……ええっ!?　こんな服で表を歩いたら、恥ずかしくて死ぬっ！」

「なにを言ってるんだ亜依。可愛い服を着たことが原因で死んだやつは、この世にいない！」

「いや、死ぬって！」

「いえいえ、お客様！　凄く素敵ですよー　……はいっ！」

店員さんはお店の手提げ紙袋を二つ、両手を掲げて僕たちに見せた。

「これはプレゼントのぬいぐるみ。どうぞ」

そう言って、亜依に渡す。急に渡されて、亜依は咄嗟に素直に受け取った。

「そしてこれは、彼女さんが着てた服」

そう言って、店員さんは僕に渡した。僕も素直に受け取った。

うーん、さすがだ店員さん。手際がいい。

「ほら、亜依。行くぞっ」

「ええーっ？」

まだ亜依は躊躇してる。
顔を左右にプルプル振って、ちょっと可愛い。
――うーん、仕方ない。
僕は亜依の耳元に口を近づけて、囁いた。
「亜依。すっごく可愛いぞ」
その途端、亜依の動きがパタっと止まった。
――まるで電池が切れたみたいに。
口を結んで、緊張したような、ちょっと赤らめた顔で、僕をじっと見てる。
「さあ、行こうか」
僕の言葉に、亜依は固い動きでコクンとうなずいた。
――よしっ、作戦成功だ！
そして店外に歩き出した僕の後ろを、ギクシャクした口ボットみたいな歩き方でついてくる。

ございました。

「あーりがとーございましたー！」

後ろから店員さんの明るい声が聞こえる。

――いや、こちらこそありがとう。

それから僕らは、昼ご飯を食べることにした。着慣れない可愛い服装でギクシャク歩く亜依を連れて、ショッピングモール内のフードコートに向かった。

第35話：亜依を可愛くしてやる！〈5〉

可愛い服を着て、お洒落な髪型になった亜依と一緒に、ショッピングモールのフードコートに行った。

フードコートに向かって歩いてる時も、ハンバーガーショップで並んで商品を注文する時も、テーブルに座ってハンバーガーをパクついてる時も。

近くをすれ違う男子が、常に亜依をまじまじと見つめることに気づいた。

「おい、あの子見ろよ。すっげぇ可愛い！」

「ホントだ。モデルかなぁ？　それとも芸能人？」

そんな声まで聞こえてくる。

すごいぞ亜依。

根暗で地味で、あれだけはないな、と言ったクラスの男子達に、今の亜依を見せてやりたい。

でもまあ僕も、これで満足だ。

だいたい亜依が腐(くさ)されるのを、なんで僕がムカついて仕方がなかったのかも、自分でもよくわからない。

幼なじみの女の子が、みんなにバカにされてるから、腹が立った。

まあそれだけだ。

別に亜依は僕の彼女でも何でもないんだから、ホントはどうでもよかったはずだけど。

「亜依。評判いいな」

「なにが？」

「お前の容姿だよ」
「ふーん……別に」
亜依は素っ気ない表情で、ハンバーガーをぱくつくばかり。
そんなことには興味がないって態度だ。
周りから亜依を絶賛する声が、本人に聞こえていないはずがない。
コイツはホントに、どうでもいいと思ってるのか？
「嬉しくないのか？」
「うん、別に」
「なんで？」
「なんでって言っても……別に、としか言えない」
マジかよ？
コイツは本気で、自分の容姿が気にならないのか？

そんな女の子が、ホントにいるのかよ？

「耕ちゃんは、どう思うの？」

亜依がドリンクのストローを口にしたまま、ちょっと上目遣いで僕を見た。

「なにが？」

「何がって……私の服装とか髪型」

ズズズとドリンクを吸いながら、目は僕をじっと見ている。

なんだよ。他人が自分をどう思ってるか、やっぱり少しは気になるんじゃないのか？

でも僕に感想を求められても、恥ずかしくて言いにくいぞ。

でも僕が無理を言って、このファッションのまま外に連れ出したんだ。

正直に感想を言うのが礼儀ってもんだな。

「[illegible]

「うん、すごく可愛いと思う、ひっくりするくらいに」

僕にしては、最大限の褒め言葉のつもりだった。

「うぶっ……」

亜依は吸ってるドリンクを吐き出した。

そしてげほげほしてる。

「おい、大丈夫か、亜依？　どうした？」

「いや、耕ちゃんがあまりに気持ち悪いことを言うから、吐きそうになった」

はあっ!?

せっかく褒めてやったのに。

気持ち悪いですと？

「気持ち悪いってどういうことだよ？」

「耕ちゃんが私を褒めるなんて、なにか下心があるに違いない」

「はっ？　そんなわけねえよ。ごくごく下心なんてないことよ？　業が亜依の身体を

「ほっ？　そんなのオッケーしたし！　心ってなんだ？　僕な亜依の身体を狙ってるとかか？」

「ぶほっ!!」

亜依は、今度はさっきよりも盛大にドリンクを吐き出した。

噴水ショー開催中、かよ!?

おかげで顔がドリンクでべたべただ。

紙ナプキンで顔を拭きながら、亜依を睨みつけてやった。

「なにすんだよ!?　嫌がらせか？」

「違うけど。耕ちゃんって、私の身体を狙ってるの？」

「狙ってないって!!　言葉のあやだよ！」

「ふーん……ヤらしい……」

亜依は半目になって、僕をジトッと見てる。

「だから違うって！　僕が亜依の身体なんか狙うわけが……」

「だよね。耕ちゃんは私なんかじゃなくて、ま……」

亜依は突然言葉を切った。

何かまずいことを言いかけたような、焦った顔をしてる。

「ま……が、どうした？」

「マヨネーズっ!!」

「はっ？」

「マヨネーズが美味しい！」

「なんの話だ？」

「このハンバーガー、マヨネーズが入ってて、美味しいなぁーって！」

いやいや。今口にしてるのは、ハンバーガーじゃなくてドリンクだろ。

さっきまで食べてたハンバーガーの味を、なんで今急に言い出すんだ？

「ところで耕ちゃん。私の服装とか髪型の感想は？」

「さっき言っただろ？」

「聞いてない」

なに言ってるんだ亜依は？

健忘症か？

「聞いてない」

恥ずかしくて、あんな感想もう一度言いたくないよ。

だから何も答えないで、無言で亜依の顔を見る。

「聞いてない」

まだ言うか？

今度は僕が半目で、ジトッと亜依を見つめてやった。

だけど――ホントに可愛い。

二重の綺麗な目。

[illegible]

鼻筋も通っていて、こじんまりとした鼻。
唇は……ぷるんとしてて、美味しそう……いや、綺麗だ。
髪型もふわっとゆるく流れたショートヘア。
髪型って、ホントにイメージが変わる。

何度見ても……可愛い。

ヤバい。亜依の顔を見つめてたら、どきどきしてきた。

「すっごく可愛い。びっくりするくらいに」

心からの言葉だから、すっと口から出た。

ああ、またこんな恥ずかしい言葉を口にしちゃったよ。

「ふーん……」

なんだ？

亜依は素っ気なく答えて、横を向いちゃったじゃないか。

人こと言っといて、その態度はないだろ？

人は言われもないその態度はなんだ？

僕は身を乗り出して、横を向いてる亜依の顔を覗き込んだ。

睨みつけてやる！

「ちょっ、なにするのよ、耕ちゃん！」

覗き込む僕に気づいて、亜依は突然立ち上がった。

チラッと見えた亜依の顔は……にへらと笑ってたように見えた。

見間違い……だよな。

あんな素っ気ない態度の亜依が、笑ってるはずはない。

「じゃあ、行くよっ！」

亜依は顔を背けたまま急に立ち上がって、フードコートから出て行こうと歩きだした。

「おい、待てよ亜依！」

亜依は僕の言葉に耳を貸さずに、どんどん歩いて行く。

テーブルの上には、食べ終わりのゴミが載ったトレーが置かれたままだ。

仕方なくそれを持って、ゴミ箱を探す。

「はぁ……」

思わずため息が出た。

亜依よ。こういうがさつなところを直せ。

舞衣ならきっと、自分がごみを片づけようとするだろう。舞衣の優しさや細やかさを学んでほしい。

ゴミ箱を見つけて、トレイからごみを捨てる。そしてトレイを返却して、亜依を追いかけた。

――ん？

フードコートから出たところに、亜依はいた。だけど誰か知らない男性二人と、何か話してる。

誰だ？

知り合いか？

いや、それにしてはテカテカ光る派手なジャンバーを着た、ちょっとガラの悪いヤツらだ。

「おお、めっちゃ可愛いな！」

「なあなあ、彼女ぉ、いいじゃん。俺達と遊ぼうぜ！」

亜依は顔をしかめて、離れようとしてる。だけど男の一人が亜依の手首を捕まえて、亜依は逃げられない。

こりゃヤバい。

亜依がナンパされてる!?

第36話：亜依を可愛くしてやる！〈6〉

フードコートを出た所で、亜依が二人組の男にナンパされてる。ちょっとガラの悪い感じの男だ。

「あの……僕の連れに何かご用ですか？」

僕が声をかけたら、二人の男に睨まれた。

「ああん？　お前、誰だよ？」

「だから、この子の連れで……」

剃り込んだ眉毛のいかついその男は、つかんでた亜依の手を離して僕に近寄ってきた。そして怪訝な顔で僕と亜依を交互に見比べる。

「連れ？　この美少女とお前が？　嘘だろ？　まさか彼氏とか言いだすんじゃないだろな？」

亜依のあまりの美少女っぷりに、まさか平凡な僕が連れだなんて、疑ってかかってるようだ。

まあ、彼氏じゃないことは確かだけど。

「いや、彼氏じゃ……」

「いいえ、彼氏です！」

亜依が僕の言葉にかぶせて、いきなりそう言った。

そして僕の腕にぶら下がるように、抱きついてきた。

はっ？

彼氏っ!?

「マジかっ……!?」

一人の男が口をあんぐり開けて絶句した。よっぽど信じがたいことらしい。

しつこいようだけど、僕は亜依の彼氏じゃないことは確かだけどな。

もう一人の男なんて、びっくり目（まなこ）になって、ぷるぷる震える人差し指で僕の顔を指した。

「コイツが……」

そしてその指をすいーっと横にずらして、今度は亜依の顔を指差す。

「君の……彼氏？」

亜依はコクっとうなずいた。

「ありえねぇ～！」

男は両手で頭を抱えて天を仰ぐ。

今にも『オーマイガッ』とか言いそうな身振りだ。

「なぁ、兄ちゃん！」
「はいっー!?」
「いったいどうやったら、その平凡なビジュアルでこんな美少女をゲットできるんだ？　教えてくれー！」
　平凡なビジュアルで悪かったな。
　男は俺の両肩を握って、前後に激しく揺さぶってくる。
「あ、あ、あ、あの……ぼ、ぼ、ぼ、僕は……」
　彼氏じゃないって否定しようとするのに、激しく揺さぶられて言葉にならない。
「ごめんなさいっ！」
　突然亜依がそう言って、男達にピョコンと頭を下げた。そして僕の腕をグイッと引っ張る。

「じゃあ、さよなら」

きょとんする男二人を置いて、亜依が走りだす。僕は亜依に引っ張られて、その場を去った。

そのまま二人で、モールのエントランスまで走って、建物の外に出た。

モール内でうろうろしてたら、またあの二人組と顔を合わせるかもしれない。

残念だけど、このまま歩いて家に帰ることにした。

「亜依！」

「なに？」

「なに、じゃねぇ。なんで彼氏だなんて、嘘をつくんだよ」

「ごめんなさい、あれが一番手っ取り早いと思って」

「なってああいう場面なら、あれたクールな戦術でしょ？」
「まあ、そうだけど……」
戦術って大げさな……
「私は戦術家なの」
「はぁ、そうですかっ」
「なに？　耕ちゃんは、彼氏だなんて迷惑だった？」
亜依は俺を見上げて、急に眉を寄せて悲しげな表情を浮かべた。今にも泣き出しそうだ。
「あっ、いやっ、そうじゃないけど……」
くそっ、コイツ。僕に文句を言われたくない時は、すぐにこんな顔をする。
ずるいぞ亜依。
「くっくっくっ……」

「……」

「ん？　なに笑ってんだ？」

「困った顔してるよ、このバカ男～」

「はっ？」

「亜依ちゃんは戦術家なのだ」

亜依はぺろっと舌を出した。

「なーにーっ!?」

あの悲しげな表情は演技か？

普段、他の人の前ではいつも無表情で、表情を作ったりできないくせに。

――でも……

いつもの亜依じゃなくて、この超絶美少女バージョンのこの亜依にそんな仕草をされたら……

悔しいけど、きゅんとして、何も言えなくなる。

「でもさぁ、バカ男」
「なんだバカ女」
「こんなカッコで表を歩くの、もう嫌だ」
「なんで？」
　なんてもったいないことを言うんだコイツは。
「だって色んな人からジロジロ見られるし、あんな変なヤツから声をかけられるし」
「それはだって……あの……亜依がめちゃくちゃ可愛いからだろ」
「えっ……？」
　並んで歩く亜依が、きょとんとして僕の顔を見上げた。
　そして亜依の顔がみるみる赤くなっていく。
「あ、あの……耕ちゃん。そういうお世辞はもういいからっ。ほらさっき、無理

矢理言わせたから、また言わなきゃって思ったんでしょ？」

コイツ。さっきの聞いてないフリは、やっぱりわざとか！

でもさっきのも今のも、お世辞なんかじゃないし。

思わず亜依の頭から顔から、そして足元まで、改めてまさにジロジロ見てしまった。

「いや、お世辞なんかじゃない。ホントに可愛いと……思ったんだ」

「あっそ……」

亜依は真っ赤な顔のまま、下を向いてしまった。

「あ、ごめんな。ついジロジロ見ちゃって。こういう目で見られるのが嫌だって、亜依はさっき言ってたのにな」

「バカ……耕ちゃんなら……」

亜依はそれだけ言って、急に足元になった。

亜依はそれだけ言って、急に早足になった
「えっ？　なんだって？」
「なんにも言ってないよ！」
「何か言ったじゃん！」
「言ってない！　言ってないったら言ってない！」
亜依は僕の前をスタスタ早足で歩く。
「ちょっと待ってくれよ、亜依！」
「やだ。待たねぇよー」
「なんでだよ!?」
「私をジロジロ見て、可愛いなんて言うバカ男は……」
「だから謝ってるじゃないかー」
「ウフフ……」
「えっ？　なに？」

「えへへ……」
「なに笑ってんだよ？」
「バカ男には内緒だ！」
「はぁっ？　なんのことか、全然わかんねぇよ」
「わからなくて、いいよ！　このバカ男！」
「バカバカ言うな、このバカ女！」
僕たちは家に着くまで、お互いにバカ男、バカ女を繰り返した。
だけど……なんだか亜依がすごくご機嫌のように見えたのは……僕の気のせいなのだろうか？

第37話：亜依を可愛くしてやる！〈7〉

その日の夜。

ベッドに寝転んでると、亜依からメッセージが届いた。

『今日のお店の人から写真が届いた。一枚だけあげる』

お店の人が撮影してくれた、亜依がモデルになった写真が添付されてる。

思わず僕は身体を起こして、ベッドの上に正座した。

いや、別に正座して見るものではないけれど、ついつい正座してしまったのだ。

改めて亜依の写真を見た。

――可愛い。

それはもう、神々しいくらいに。

あ、いやいや。普段の亜依を思い出せ。

あんなに無表情で、僕に毒舌を吐いてくるヤツだぞ。

この写真の可愛らしさに、騙されてはいけない。

そう思おうとするんだけど、写真を見れば見るほど可愛くて、ついつい見入ってしまった。そして大事に、写真をアルバムに保存した。

「僕のスマホには――天使が住んでいる……」

あ、いかん！

なんてことを考えるんだ、僕は。

ホントに僕は、頭がおかしくなってしまったかもしれない。

こんな風に思ってしまったことは、絶対に、何があっても、徹頭徹尾、亜依

には内緒だ。絶対に悟られてはならない。

明後日の月曜日。

亜依がメガネを外して、あんな綺麗な髪型で登校したら、クラスのみんなはめちゃくちゃ驚くだろうな。

思い切りバカにしてたモブ君たちは、なんて言うだろうか。

彼らが驚く顔が思い浮かぶ。

それはそれでちょっと楽しみだ。

◆◇◆◇◆

月曜日の朝。

登校して教室に入ったら、すぐに亜依の姿を探した。

いつものとおり、亜依は自分の席に一人で座ってる。

そう、いつものとおり……

――いつものとおり!?

亜依の姿はいつものとおり、分厚いビン底メガネにぼさぼさ頭だった。

なんでだ？

私服は別としても、メガネを取って髪形を変えるだけでも、めちゃくちゃ可愛くなれることがわかってるのに。

僕は亜依の席の横を通るときに、亜依の顔をチラッと見た。

亜依もチラッと視線を寄こす。

僕が首を少し傾けて『なんで?』って仕草をすると、亜依は小さく顔を左右に振った。

『だって嫌なんだもん』

そう言ってるように見えた。

「おいタッキー！」

僕が席に着くと、モブ君二号が近づいてきて、アイドルみたいな呼び方で僕に声をかけてきた。彼はなぜか、ちょっと興奮気味だ。

「ん？　なに？」

「土曜日さ、お前すっげぇ可愛い子とデートしてただろ!?　あれ誰？」

えっ？

亜依と一緒にいたことを言ってるのか？

なんで？

「なにそれ？　知らないなぁ」

「おーい、タッキー！　しらばっくれるな。駅前のショッピングモールの近くで、お前がめちゃくちゃ可愛い子と歩いてるのを見かけたんだよ！」

「うい、皆が大きいってー！」

「おい、声かけてって」

モブ君二号の声を聞いて、一号と三号が集まってきたじゃないか。

ちょうどミスター・フレンドリー勇介も登校してきて、なんだなんだと聞いてくる。

「ホントか多岐川。おまえ、彼女がいたのか？」

モブ君一号の言葉に、勇介が驚いた。

「マジか、耕平!?　なんで今まで黙ってたんだ？　どんなブサイクな子なんだよ？」

おい、勇介。なんでブサイクが前提なんだ？

もしも一緒に歩いてたのが本物の彼女だったら、お前その子に刺し殺されるぞ。

こんな時は勇介のフレンドリー過ぎる態度がウザい。

「おいおい高木！　俺が見かけたんだけど、それがさ！　すっげぇ可愛い子だったわけさ！　まさに超絶美少女!!」
「は？　マジか！　耕平の彼女って、そんなに可愛いのか？　まさか……舞衣ちゃんじゃないよなっ!?」
「いや、違うぞ。髪型がショートカットだったし」
「なーにー!?　耕平、お前！　舞衣ちゃんっていう、あんなに可愛い子と知り合いのくせに、彼女まで超絶美少女だなんて！　なんて羨ましいヤツなんだよーっ!!!」
　なんで勝手にモブ君と勇介で、話が盛り上がってるんだよ？
「いや、待てよ勇介。あれは彼女なんかじゃないって」
「じゃあ、誰なんだよ、耕平？」
　あれは……お前らが地味で根暗でこのクラスで最低の女子だと評した

――貴理山 亜依だ。

そう思いながら、亜依をチラッと見た。

亜依もこちらを見てて、顔を左右に小さく振ってる。

絶対に自分だってことを言うな、ってジェスチャーだ。

「あれは、大阪に住んでる従姉妹（いとこ）の女の子だ。たまたまこっちに遊びに来たから、買い物行くのに付き合ってやれと……親に言われたんだよ」

「従姉妹？　そっか……そうだよなぁ」

勇介は安堵の息を吐いて笑ってる。

「こら勇介。なんでお前がホッとした顔をしてんだ？」

「いや、だって耕平。お前にそんな超絶美少女の彼女がいるとしたら、俺は置いてけぼりを食うじゃないか。俺に彼女ができるまで、お前も彼女は作るな！」

「はぁ？」

なんという暴論！

なんという理不尽！

なんという我がまま！

「まあ、そんなに可愛い子じゃないなら、彼女を作っても認めてやるよ耕平」

「なに言ってんだよ、お前」

呆れて物も言えない。

勇介はニヤッと笑って、僕の耳元に口を近づけてくる。

そして周りに聞こえない声で囁いた。

「例えば地味で根暗の貴理山とかさ。あれなら許す」

僕はどっきーーーんと、鼓動が跳ね上がった。

心臓が爆裂して、死ぬかと思うほどに。

いや、その貴理山が　　貴理山　五衣が、まさこう向うが言ってる、召色

いや、その貴理Lた……貴理L亜依た、さっきは前らた言ってる、超絶美少女なんだよ！

喉まで出かかったその言葉を飲み込むのに苦労した。

だけどなんとか、ぐっとその言葉を飲み込んだ。

「そ……そうか、わかった」

何がわかったのか、自分でもよくわからないけど、とりあえずそう返事しておく。

だけど……こいつらがバカにした亜依が。

こいつらは無意識のうちにだけど。

亜依が超絶美少女と絶賛されるのを聞いて、少しはこの前のムカつきが晴れた。

勇介やモブ君は、あれが遠方の親戚だと信じて興味をなくしたようで、自分の席に戻っていった。

また亜依をチラッと見たら、亜依はまだ心配そうな顔でこっちを見てる。

――どうだ、亜依。

あの美少女がお前だっていうことは、ちゃんと隠し通したぞ。

僕がさり気なく亜依にウインクを送ったら、亜依はホッとした表情になった。

でもまあ。

いつかは亜依の本当の姿を、クラスのみんなに見せたいなぁ。

いったいいつになるか、わからないけれども。

僕はそう思いながら、亜依や勇介たちの姿をぼんやりと眺めていた。

＝第七エピソード　完＝

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第8エピソード『偽のデートは甘酸っぱい』

第38話：偽のデートは甘酸っぱい〈1〉

月曜日の始業前の教室。

私は耕ちゃんが男の子達と話すのを、ハラハラしながら見てた。

誰かが、この前のショッピングモールからの帰りの私と耕ちゃんを見かけたなんて話してるから。

だけど耕ちゃんが、あれは大阪の従姉妹（いとこ）だってごまかして、みんなはそれを信じたみたい。

あれが私だってバレなくてホッとした。

もしもバレたら、恥ずかしく明日から学校に来たくない。永久に逃亡だ。

授業が始まってからも、私は取り留めもなく、その時のことを思い返していた。

この前の土曜日に耕ちゃんとショッピングモールに買い物に行って、着せられたファッション。あれは本当に恥ずかしかった。

私が私じゃないみたいで、ずっと居心地が悪い思いをしていた。

あのままの格好でずっといたら、恥ずかしさで確実に死ぬ。いや、マジで。

だけど――

すれ違う人たちから『可愛い』と言われたのは……ホントはちょっと嬉しい。

耕ちゃんだって……

まあ、あれは、多分にお世辞も入ってるのだろうけれど、めちゃくちゃ可愛いと言ってくれたし。

――あ、いや。あれは違う。

耕ちゃんはあのお店に入ってすぐに、あのコーディネートを『可愛い』と言った。

だからあの服装が可愛いんであって、私自身を可愛いというわけじゃない。

それに……

百歩譲って――いや、千歩でも一万歩でも譲ってやろうじゃないか。

――うーん、私って、なんて太っ腹な女なのだ。

たとえそれだけ譲って、耕ちゃんがホントに私を可愛いと思ったとしても、だ。

そんなことを気軽に口にするバカ男なんて信用が置けない。

耕ちゃんは舞衣が好きなくせに。

好きな女の子がいるのに、他の子に可愛いなんて言うのは、これはもう浮気以外の何者でもない。

いや、誰がなんと言おうとも、私はそれは浮気だと思う。それが例え舞衣と双子姉妹の私相手であってもだ。

だって私と舞衣は、別人格なんだから。

ヤツを浮気男と認定する。

浮気男認定、決定!!

だからそんな浮気性の男の言うことを、真に受けてはいけない。

[illegible]

真に受けて悲しい想いをするのは、いつだって女なのだよ、わかるかね、耕平君よ。

私はそんなことは決して真に受けない、賢い女なのであーる。

――なんて、うだうだ考えてるけど……

よく考えたら、あんなバカ男がどう言おうと私には関係ないか。

耕ちゃんなんかに、可愛いと言われても……ウフフ……めちゃくちゃ可愛いと言われても……ムフフ……まったくもって全然……フフフ……これっぽっちも嬉しくなんかない……エヘヘ。

あれ？　なんか変な笑いが漏れてるのはなぜ？

――あっ、そっか。

水道に水漏れの故障があるように、私は『笑い漏れ』の故障をしてるのかも。

も

きっとそうだ。

そうでなけりゃ、耕ちゃんの『可愛い』って言葉を思い出すだけで、笑いが漏れるなんてあり得ない。

――そう結論づけた。

そんなことばかり考えてたら、ほとんど授業内容は頭に入らずに、あっという間にお昼になってしまった。

ヤバいな。もっと勉強に身を入れないと。

そう。私はちゃんと反省する女だ。

私は賢い女の子なのだ。

だけど――今はお腹が空いた。

だから勉強のことはとりあえず置いといて、お弁当を食べよう。美味しい卵焼きが私に食べられるのを待ちわびてるのだから。

――ごちそうさま。

一人でお弁当を食べ終わって、礼儀正しく手を合わせている時だった。

「貴理山さん。ちょっといいかな？」

顔を上げたら、クラスメイトの男子が満面の笑みで、私の席の横に立ってた。

彼は……入学二日目の昼休みに、突然一緒にお弁当を食べようと言ってきた男子だ。

それで、実際に一緒に、二人でお弁当を食べたんだけど。

一緒に昼食を摂ったのは、それっきりだ。

――その彼の名は、今泉（いまいずみ） 秀太郎（しゅうたろう）。

まだほとんど初対面のその時に、いきなり『彼氏はいるの？』とか聞いてきた、厚顔無恥な男だ。

しかもその後も、時々話しかけてくる。話の内容は取り留めのない、どうでもいいような話ばっかりだけど。

確かに高身長の爽やかな感じのイケメンで、ちょっとカッコいい。

だけどそんなにカッコいい人が、なぜ私なんかに興味を持つのか全然わからない。

「なに？」

「ちょっと外で話したいんだけど」

ぶっきら棒に返事したのに、今泉君は笑顔を崩さない。仕方なく彼について教室の外に出た。

どこまで連れて行かれるのかと思ったら、校舎裏の人が少ない所まで来て、今泉君は立ち止まり、振り返った。

「なんの用？」

「ごめんね急に、貴理山さん」

私が相変わらずぶっきら棒に言っても、彼は相変わらず笑顔。いったいなんなの？

「あのさ。ＬＩＮＥの交換、してくれない？」

「はっ？」

いきなりなに？

前の時も、入学して二日目に『彼氏はいるの？』なんて、ずけずけ聞いてきたし。

「なんで？」

「あっ、いや　貴理山さんと仲良くなりたいから」

「あっ、いや……貴理山さんと仲良くなりたいなら」
「なんで？」
「なんでって言われても……仲良くなりたいからとしか言えない」
「私と仲良くなってもなんのメリットない」
宗教の勧誘？
それとも何かを売りつけようって魂胆？
「メリットって言うか……貴理山さんってどんな人なのか、興味があるんだ。ダメかな？」
私に興味？
やっぱり宗教か商品の売り込み？
私が無言でいたら、今泉君は急に真剣な眼差しになった。
「貴理山さんって、彼氏がいるんだよね」
「えっ？　彼氏なんて……」

あ、ヤバい。そう言えば、前に今泉君を拒否するために、そう言ってたんだった。

「……彼氏なんて、いるよ」

「嘘でしょ？」

「嘘じゃない」

「じゃあ彼氏がどんな人か、教えて」

「なんであなたにそんなことを……」

「ホントに彼氏がいるんだって納得できたら、諦めがつくから」

――諦め？

なんの諦め？

もしかして、自意識過剰なんかじゃなくて、今泉君は本当に私に気があるのかもしれない。

第39話：偽のデートは甘酸っぱい〈2〉

私が今泉君を拒否するために、彼氏がいると言ったら、彼は私の彼氏がどんな人か、教えてほしいと言い返してきた。

今泉君は真剣な表情だ。

興味本位で聞いてるわけじゃないことはわかる。

軽い感じだと思ってたけど、案外真剣なのかもしれない……

いやいや。簡単に信用しちゃいけない。

「どんな人か、なんて言いたくない」

だってホントは彼氏なんていないから、変に作り話をしたら墓穴を掘りそ

うだし。

「同じ高校の人？」

今泉君の言葉に、なぜか耕ちゃんの顔が思い浮かんで、ぎっくぅーとした。

「あ、いやっ、あのっ、そのっ……」

キョドる私を見て、今泉君は間違いないと確信したようにうなずいてる。

「ふーん、そうなんだ。……誰？」

「い……言いたくない」

「でも言ってくれなきゃ、僕は諦めないよ」

そんなことを言われても……

今泉君って爽やかな笑顔だけど、ウザい……

「まぁでも、まだ入学したばっかの同じ高校の人ってことは……中学から一緒の人だもんねー

――ぎっくぅーー！！

再びキョドってしまった。私って、なんてウブなんだろう。

いや別に耕ちゃんが彼氏って訳でもないのに、なんで私はキョドってるのか？

「そ……そっかなぁ……ち、違うけどなぁ……えへへ」

思わず変な笑い声が出てしまう。かえって怪しいよね、どう見ても。

「なるほど。やっぱり同じ中学の人なんだね」

この言葉に、なぜかまた耕ちゃんの顔が思い浮かんでしまった。

なんで？

耕ちゃんは彼氏なんかじゃないのに。

あのバカ男は、なんで勝手に私の頭の中に出てくるの？

――あのバカ。

いや、そうだ……

今泉君には、耕ちゃんが彼氏だってことにしとけばいいんだ。

彼氏がいるなんて嘘をつくなら、その方がリアリティがある。でもそう簡単には、名前を出すわけにはいかない。

「そ……そうだよ」

「やっぱり！　……で、誰なの？」

「そこまでは……言えない」

「なんで？」

「だって私たち、こっそりと付き合ってるから。他の人に二人の間をかき乱されたくない」

「でも誰なのか言ってくれないと、貴理山さんの言うことがホントだって確信できないから……諦められないよ」

今泉君は、そこでまた爽やかにニコッと笑った。
なんてしつこい人なの？
「貴理山さんと同じ中学って言ったら、ウチのクラスなら多岐川だな」
――ぎっくぅー！！
「あっ、図星かっ！」
やられた……
カマをかけられた。
私って……なんてチョロいのか？
でもまあ、仕方ない。
そういうことにしておこう。
「そ……そうだよ」
「じゃあ多岐川を僕に紹介してよ。『彼氏です』って」
「ハっ？　なんでそういうことに、ハナシがとぶの？！

「だって貴理山さんが勝手に言ってるだけかもしれないでしょ？　目の前でそう言って彼を紹介してくれたら、間違いないってわかるし。まあ僕から直接多岐川に聞いてもいいけど」

「いや、それはダメ……私たち、付き合ってるのを内緒にしてるから。なんで今泉君に教えたんだって、彼に怒られる……」

彼……

耕ちゃんのことを、彼なんて言ってしまった。

なんか背筋がぞくぞくっとした。

これは何？

私、恐怖に怯えてるの？

それとも風邪の熱による悪寒？

あ、風邪なんか引いてないけど。

「そっかぁ……じゃあやっぱり、貴理山さんのことを諦められないな」

今泉君はニヤッと笑ってる。

いやいやいや、いい加減諦めてよ。

私に彼氏がいるとかいないとか言う以前に、こんなにしつこい男を好きになるわけがないじゃない。

そうだ。誰が彼氏なのかなんて言わなくても、あんたなんか嫌いってひと言言えばいいんだ。

「あ……あ……」

そう。ひと言、あんたなんか嫌いって言うだけ。

「あのぅ、じゃあどうしたらいいの？」

うわっ、私なにを言ってるの!?

なんであんまり知らない人には、言いたいことがちゃんと言えないの？

「そうだなぁ。紹介してもらうのが無理なら、貴理山さんと彼氏がデートしてるのを、こっそり覗かせてもらうってのはどう？　絶対に声はかけないからさ」

「でっ、デートっ!?」

ななな、何ということを言うのか、この男は!?　他人のデートを覗こうだなんて。

――でも、それなら……

この前耕ちゃんの従妹（いとこ）へのプレゼントを買いに付き合ってあげた。

だから今度は何か私の買い物に付き合ってくれと言ったら、自然な感じで一緒に出かけることは可能だ。

「わ……わかった。そうする」

私の言葉に今泉君は、ちょっと驚いた顔をした。私に彼氏がいるって話を、

完全に疑ってかかっていたようだ。
「じゃあ今度いつデートするか決まったら、こっそり教えてよ」
「ぜ……絶対に、デートの最中に声はかけてこないって約束してくれる？」
「ああ、約束する。約束を破って貴理山さんに嫌われたくないからね」
彼は爽やかに笑ってるけど……
もう既に、あんたのことなんか嫌ってるから！
心の中でそう叫ぶけど、もちろん本人には言えない。
耕ちゃんには申し訳ないけど、擬似彼氏になってもらうしかない。
「じゃあ、そういうことで」
彼はそう言って立ち去りかけたけど、ふと立ち止まって振り返った。
「あ、そうそう。知り合いとか友達に頼んでデートのふりをしても、二人の距離感を見たら、ホントの彼氏かどうかわかるからね」
ぎっくぅーー！

――言っておくが、
この男、まだ信じてない……
でもきっと大丈夫だ。
私にとって。
この世に存在するおよそすべての男と呼ばれる生物の中で、父以外で最も口数多く話せる相手。
――それは耕ちゃんだ。
だから、まあ、なんとかなるだろう。
私はそう考えて、耕ちゃんを誘い出す口実を考えることにした。

それにしても、ひょんなことから耕ちゃんとデートを……むふふ……あ、いや、デートのふりをすることになった。
例えフリだとは言っても、あのバカ男とデートをするだなんて考えるだけ

で楽しみ……否、憂鬱だ。

だけどこれは今泉君からのウザいアプローチをブロックするために、致し方のないことなんだ。

私は自分に、そう言い聞かせた。

私はその日のうちに、耕ちゃんに声をかけた。

従兄弟（いとこ）の男の子にプレゼントを買いたいから、買い物に付き合って欲しい。

そんな、どこかで聞いたことのある、まったく二番煎じの理由を耕ちゃんに言ったら、アイツは「いいよ」と即答した。

――バカだ。

あの男は、まったくもってバカだ。

少しは疑えよ。

そうじゃなきゃ、今後社会に出て、いとも簡単に悪徳商法にやられるよ。

私のように賢くならなきゃダメなのに。

でもまあそんなことは、今はどうでもいいか。おかげで私の、この戦術家の私の『偽デート作戦』はうまくいきそうだ。

ただし当日は、本当に付き合ってるように見せないといけない。いつもみたいに罵倒しあったりしないように、気をつけないとだめだ。

いや、それどころか、少しは仲がいいところを見せる必要もあるかもしれない。

――仲がいいところを見せる？

耕ちゃんと!?

第40話：偽のデートは甘酸っぱい〈3〉

◆◇◆◇◆

ある日突然、亜依が『今度の日曜日に、買い物に付き合って欲しい』と頼んできた。

いつも僕を目の敵にしてる亜依が、なぜ僕を買い物に誘うのかがわからない。もしかしたら荷物持ちの役割を僕にさせて楽をしたうえに、こき使ってやったと快哉を叫びたいのかもしれない。

でもまあこの前は、僕の従兄弟（いとこ）の買い物って口実で騙くらかして、アイツ

に可愛い服を買わせるために引っ張り出したもんだから、断るわけにもいかない。

僕は、いいよと即答した。

小学生の頃までは、学校以外で亜依ともよく一緒に遊んでた。まあその時は、ほぼ舞衣も一緒だったけど。

中学の時は学校以外で、一緒に出かけるなんて、一度もなかった。

同級生の男女が一緒に出かけるなんてことをしたら、すぐに付き合ってるとか意識する年頃になったってことだ。

例え家が隣で幼なじみであっても、恥ずかしくてそんなことはできない……って、中学の頃は思ってた。

高一になった今も恥ずかしいってことは変わらないけど、用事があれば致

し方なく出かけることくらいはできる。
それくらいは、亜依も僕も大人になったってことかな。
――なんとなく、そんな気がする。

そして約束の日、午前一一時。
我が家を出て、隣の貴理山（きりやま）家の前を見たけど、まだ亜依はいなかった。
今日は亜依は、どんな服装なんだろ。この前に買った、あの可愛い服装だろうか。
――だったらいいな。
あ、いや、別にどうでもいいんだけど。
ガチャっと玄関ドアが開いて出てきた亜依は――

いつものダサダサな格好だった。

ボサボサ頭に分厚いビン底メガネ。グレーのパーカーに、色が褪せたよれよれのジーンズ。

おーい、やっぱりそれかよっ！

……だけど仕方ないな。

亜依はあの可愛いファッションを、心から恥かしがってたし。

「どこに行く気だ？」

「あ、うん……」

電車に乗って二駅行くと、市内最大の繁華街がある。亜依はそこで、雑貨屋さんなどでプレゼントを探したいと言った。

電車に乗り込むと、日曜日なのに思いのほか混んでる。

ドアを背にして亜依が立ち、そのすぐ前に僕は立った。

向かい合って立ってるけど、大きく電車が揺れると身体が触れ合うくらいの距離感だ。亜依は小柄なので、頭の上が見えてる。

突然亜依が顔を上げた。眉を寄せて不満げな、だけどなぜか真っ赤な顔をしてる。

「ちょっと耕ちゃん。あんまり近づかないでよ」

「無茶言うな。混んでるから仕方ないだろ」

「そんなに私に近づきたいの？」

「お前、僕の話を聞いてるか？　混んでるから、仕方なく、だよ。嫌ならそっちから離れろよ」

「無理」

「なんでだ？」

「なんて？」

「背中がドアにくっついてるんだよ？　見ればわかるでしょ？」

もちろんそれはわかってる。亜依が無茶を言うから、無茶を言い返しただけだ。

亜依が買い物に付き合ってくれって言うからついて来てやってるのに、なんでこんなに邪険にされなきゃいけないんだよ。

「耕ちゃんは私に、背中でドアを押し破って車外に転がり落ちろって言ってるんだね？　私を殺した殺人罪で訴えてやる」

「そんなことは言ってない。濡れ衣だ。冤罪だ。それに殺された本人が犯人を訴えるなんて聞いたことがない。お前はバカか？」

――はぁ、まったくアホらしい。

この前の亜依は、可愛い服装が恥ずかしかったからか、言動までまあまあ

可愛いと思ったのに。

そんなことを思ってしまった自分を呪ってやりたいほど、今日の亜依は普段どおりだ。

服装も髪型もビン底メガネも――そして攻撃的な表情と言動も。

今日は一日、こんな感じかと思うと憂鬱だ。

――前の時みたいに可愛い態度の亜依だったら、ちょっとは楽しいかも。

そんなふうに気楽に考えていた昨日までの僕を、お前はなんて浅はかなやつなんだと罵ってやりたい気分だ。

僕らは市内最大の繁華街がある駅に降り立ち、駅前に出た。

そこは広場になっていて、大勢の人が待ち合わせをしたり、行き交ってる。

さすが日曜日。
「で、どこに行く？」
ふと亜依を見ると、周りをキョロキョロと見回してる。そして何かを見つけたのか、「あっ……」っと小さな声を出した。
「どうした？　行きたいお店を見つけたか？」
亜依の視線の先を追ったけど、人の波とその向こうに色んなビルが見えるだけで、亜依の目指す所がどこかわからない。
「あ、いや……うん。きっとこっち」
なんだか亜依はあたふたしてる。挙動不審なやつめ。行き先がわからないんじゃないのか？
「ホントに大丈夫か？　おまえ、方向音痴だからなぁ」
「はぁっ？　私がいつ、方向音痴なとこを見せた？」

亜依は口を歪めて、眉間にシワを寄せて、僕を睨みつけた……かと思うと、急に笑顔になった。

「まぁそんなことより、耕ちゃん。とにかく行ってみよう」

――なんだ？

なんで急に笑顔になる？

普段から無表情な亜依のことだから、満面の笑みってわけじゃない。だけどこの柔らかな笑顔は、いつも喧嘩腰の亜依からしたら、かなり機嫌がいい時の表情だ。

「なにしてんの？　早く行こうよ！」

――えっ？

ボーッと考えごとをしてたら、急に手首を亜依につかまれて、引っ張られた。

痛いほどに強引な感じで、手を繋いでくるなんて、普段の亜依からは

話しブもご機嫌な感じだし、言を裏してくるなんて、普段の亜依だったら考えられない。ホントに亜依は、いったいどうしちゃったんだ？　熱でもあるのか？　大丈夫か？

そんな僕の心配をよそに、亜依はスタスタと歩き出す。

「あっ！」

亜依は急に僕の手を離して立ち止まり、振り返った。

今度はなんだ？

コイツは気まぐれちゃんかよ？

「そうだ、耕ちゃん。このすぐ近くに、新しいジェラートのお店ができたんだって。知ってる？」

「知らない」

「凄く美味しいらしいよ。行ってみよ？」

「え～っ？　ジェラート？　要らないよ」

僕はあんまり甘ったるいものは得意じゃない。だから反射的にそう答えた。

そしたら亜依の片眉がピクっと上がって、目つきが鋭くなった。

マズい。機嫌を損ねてしまったか。

罵詈雑言が飛んでくるっ！

――と身構えたら。

「耕ちゃ～ん。行こうよ、お願いっ！」

はぁっ!?

亜依はメガネの奥でウィンクしながら、両手を合わせてお願いポーズ。

――なんだ、この可愛い態度は？

普段の亜依からは、本当に考えられない態度だ。

「おい、亜依。どうした？　体調が悪いのか？」

「えっ……？　なんで？」

「お前がそんな、素直で可愛い態度を取るなんて、なんかおかしい」

「あっ……なんでもない。体調なんか悪くない」

亜依はあたふたして、首を横に振る。

体調が悪いんじゃないとすれば、じゃあいったいなんなのか？

「きょ、今日は無理を言って、耕ちゃんに買い物に付き合ってもらうから。ちゃんとした態度を取らなきゃなぁ……なんて思ってるんだ」

亜依は「おほほ」と笑ってる。

そっか。そういうことか。

亜依にもそういう常識というか、殊勝なところもあったんだな。

「なるほど、そういうことならわかった。亜依も普段から、それくらい謙虚に

いた方がいいぞ」

「くっ！」

あ、しまった。ついつい調子に乗って、偉そうに言ってしまった。亜依に悔しそうな顔で、ギロっと睨まれてしまった。

ヤバい。気をつけよう。

また明日からの罵詈雑言が増量されても困るからな。

「あ、亜依。そのジェラート屋さん、行ってみようか」

「う、うん、そうだね。行こう行こう」

亜依もすぐに笑顔に戻って、事なきを得た。そして亜依に導かれて、話題のジェラート屋さんとやらに行った。

第41話：偽のデートは甘酸っぱい〈4〉

噂のジェラート屋さんは、大通りから一本入った裏通り沿いにあった。

ピンクの看板が派手な店で、道路沿いにあるカウンターで、テイクアウト販売をしている。

だけど店内にも小ぢんまりとしたイートインスペースがあって、数人なら中のテーブルで食べることもできるようになってる。

あんまり甘すぎるのは苦手な僕は、さっぱりミント味を注文した。亜依は和梨（わなし）味。ちょっと珍しいフレーバーだ。

店員さんから二人分のジェラートを受け取り、一つを亜依に手渡す。

「ほれ、亜依の分」
「ありがと」
店内を覗くと、タイミングよく空席がある。
「ここで食べて行こうぜ」

「うん、そうだね」
亜依もそう言って、店内に入ろうと振り向いたら、後ろの列に並んでいる男性に肩がこつんと当たった。
「あ、すみません」
「いえ、大丈夫です」
僕らの後ろに並んでいた男性は、キャップを目深に被って、サングラスとマスクをした怪しい男だった。黒いシャツに黒いズボンと言う服装も異様だ。
なんだこいつ？

殺し屋か？

――って、そんなわけないな、あはは。

「あ、耕ちゃん……やっぱり歩きながら食べない？」

「なんで？」

「いや、特に理由はないけど……歩き食べも楽しいかなぁ……って」

なぜか亜依が急にそんなことを言い出した。

「ダメだ。ジェラートなんか歩き食べしたら、他の人に当たって迷惑をかける」

「だ……大丈夫でしょ？」

「いや、ダメだ。今、鎌倉とか観光地で、歩き食べの危険が問題になってるのを亜依は知らないのか？　せっかくイートインスペースがあるのに、人様に迷惑をかける行為なんかしちゃダメだ」

「アンタは真面目かっ!?」
「ああ、僕は真面目なんだよっ!」
理由はわからないけど、急に歩き食べをしたがる亜依の背中を押して、無理やり店内に入る。そして小さなテーブルに向かい合って座った。
「ほら、こうやって座ったほうが、落ち着いて食べられるだろ?」
「ま、まぁ……そうだけど」
亜依は名残惜しそうに答えたけど、歩き食べは諦めたのか、ジェラートを嬉しそうに眺めてる。
「亜依のそのジェラート、和梨味だって?」
「そうだよ」
亜依は小さな舌をペロッと出して、ジェラートを舐めた。
「へぇ珍しいな。美味いか?」
「[illegible]

「うん、爽やかな甘み。おいしい!!」

普段あんまり感情を出さない亜依が、驚いた顔で絶賛してる。

こりゃ、よっぽど美味しいに違いない。

爽やかな甘みなら、僕も好きだ。

「へぇ、よかったな」

「その目はなに？　まさか耕ちゃん、ひと口くれって思ってるんでしょ？」

「そうだとしたら、どうする？」

「はぁっ？　ぜーったいにあげるわけないでしょ！　このバカ男がっ！」

「うるせぇ、このバカ女！　アイスを舐め合いっこなんて、まるで恋人同士みたいなことを……」

「あっ！」

いきなり亜依が、横をチラッと見て小さく声を上げた。

「なんだ？　どうした？」

―なんだ？　どうした？

亜依の視線の先を見ると、さっきの怪しい男がジェラートを手に持って、店内に入ってきていた。そして僕達の隣の席に座る。

亜依は表情が強張ってる。

そうか。さっき亜依が店内に入るのを嫌がったのは、もしかしたらこの怪しい男を気持ち悪く思って、早く離れたかったのかもしれない。

だけど昼間っから一人でジェラート屋に来てる男だ。

別に闇の世界の男ってわけじゃなさそうだし、大丈夫だろ。

亜依は心配しすぎだ。

僕は向かいに座る亜依に、『安心しろ』と優しい笑顔を送った。

「ねぇ耕ちゃん。この和梨のアイス、爽やかな甘みで美味しいよ」

「それは、さっき聞いた」

「えっ？　そうだっけ？　耕ちゃん、ひと口食べてみる？」

はぁっ!?

さっき、絶対にあげないって言ってたのは、どの口だ？

なんで急に態度が変わるんだ？

やっぱり亜依は、体調が悪いんでは……？

あ、いや、もしかして。

今僕が優しい笑顔を亜依に送ったのを、コイツはきっと『アイスをひと口くれ』という意味に取り違えたんだな。

違うぞ、亜依。

あれは、隣に座る怪しい男を、心配しなくていいぞという僕のメッセージだ。

「いや、いいよ。そんなまるで恋人同士がするみたいな……」

「あ、あ、あ……」

亜依が突然大きな口を開けて、僕の言葉を遮った。

あ、あ、あ、ってなんだよ？

……と思ってたら、いきなり亜依が、信じられない名前を呼んだ。

「亜依ちゃん！」

「はっ？　なんでお前、自分の名前を呼んでんだ？」

「あ、間違えた！　耕ちゃん！」

「チョイ待て、亜依。相手の名前を間違えて、自分の名を呼んじゃうヤツがいるか？」

「い……いるよ、いるよ。たまーに見かける！」

「見かけるもんか!?　そんなヤツいねぇーよ！　亜依、大丈夫か？　ホントに体調悪くないのか？」

「う、うん、大丈夫。それより耕ちゃん！」

「な、なんだ？」

「なんだよ？」

「アイスを舐めあいっこって、よく恋人同士がするでしょ。だから私達もしてみる？」

「はぁっ……!?」

――僕は頭の中が真っ白になった。

亜依が……

言ってることの……

意味が……

わからん。

なんで恋人同士がする行為を、僕と亜依がするんだ？

まさか亜依は、僕とそんな行為をするのを望んでるのか？

――なんで？

亜依は、もしかして……

もしかして、もしかして。

実は僕に好意を持ってるとか？

好意を持ってるから、そんな行為を望んでるとか？

いやー、あり得んでしょ！

それだけは、絶対にあり得ない！

やっぱり亜依は、かなり体調が悪いんだ。
それしか考えられない……

「おーい、耕ちゃん……」
遠くで誰かが僕を呼ぶ声がした。
あ、亜依だ。
目の前の亜依だ。

「耕ちゃん、大丈夫？」
「あ、ああ。大丈夫だ……」

ヤバいヤバい。

あまりに信じられない亜依のセリフのせいで、意識がぶっ飛んでしまってた。

「やっぱりまだ、私達には早かったかなぁ……てへへ、ごめんね、耕ちゃん」

早い？

なにが？

早いとか遅いの問題じゃないよな？

そんな疑問よりも――亜依はペロッと舌を出して、僕に謝ってる。

いわゆるてへぺろってヤツだ。

亜依が。

あの無愛想で無表情な亜依が。

……てへぺろ!?

ぇぇぇぇぇ。

第42話：偽のデートは甘酸っぱい〈5〉

僕らはジェラートを食べた後、駅前の繁華街をぶらぶら歩きながら、亜依の従兄弟（いとこ）へのプレゼントを買うのに良さそうな雑貨屋を探した。

大通りから一本入った道沿いに、色んな店が並んだ商店街がある。たくさんの看板を見ながら歩いて、適当なお店を物色する。

この通りも大勢の人が歩いてて、なかなかの賑わいだ。対向して歩く人も多く、避けながらだからまっすぐ歩けない。

ジグザグ蛇行しながら歩いてると、その度に亜依が横にくっついてくる。

いや、別にそれが嫌という訳じゃないし、二人で歩いてたら普通のことで

はあるんだけど……

その相手が亜依なもんだから違和感がある。

普段ならもっと僕と距離を取ってる。こんなにべたべたとくっついてくることなんて考えられない。

「なあ、亜依」

「なに？」

「なんで僕にくっついて来るんだ？」

「えっ？　別にくっついてなんかないけど」

「くっついてるじゃん」

「人を避けて歩いてたら、たまたま耕ちゃんと同じ方向になってるだけ」

「ふーん……」

なんかいつもの亜依と違う……ってのは、僕の思い違いだろうか。

あ、もしかして――

人嫌いで引きこもりの気がある亜依は、普段は繁華街なんかをぶらつくことはほとんどないはずだ。

だから大勢の人の波を縫うように歩くのは、苦手なのかも。危うくぶつかりそうになったら、相手から睨まれるかもしれないし。

亜依は不安なことがあったり、自分ひとりで対処できなさそうなことがあった時は、割と僕を頼ってくる。

高校入学したての時も、教室内で度々僕に助けを求めるような視線を投げかけてきていたし。

小学生の頃なんて、怖いことがあるといつも僕に泣きついてきてたっけ。

――そう、虫を見ただけでも。

普段は僕に毒舌を投げたり、一緒にいるのを拒否るような態度をするく

せに、自分が困ったときだけ頼ってくるなんて。
なんとも自分勝手なヤツだとは思うけど……
コミュニケーション弱者で、他に頼る人がいない亜依を見捨てるほど僕も人でなしではない。
「なあ亜依」
「なに？」
「くっついて来るなっていう意味じゃないからな」
「えっ？」
「不安があるなら、僕の側にくっついとけ」
「あっ……うっ……」
なんかわからないけど、亜依はうめき声みたいなものを発した。
どうしたんだと顔を見たら、真っ赤になってうつむいてる。
「く、く、く、くっついとけって……」

「うん、ありがとう」

亜依は、『不安なんかない』って虚勢を張るかと思ったら、案外素直に礼を言った。

そこまで素直に頼られたら、男子たるもの女子を守ってやらなきゃいけない――

なんて気になるもんだから不思議だ。

――って言うか、男子なんてそんなものかもしれない。チョロくて悔しいけど。

「あっ、ここ。入ってみたい」

亜依が急に立ち止まって、一軒の雑貨屋を指さした。ピンク周りはパステル

亜依は急に立ち止まって、一軒の雑貨屋を指さした。店内はノンキノ調の商品が多くて、女の子向けのお店に見えるけど……

「いいけど……こんな店に男子向けのモノなんかあるかなぁ……」

「あるある。大丈夫」

なんとも軽く答えて、亜依はその店に入って行った。僕も後を追って店内に足を踏み入れる。

店内は色んな種類のぬいぐるみが山ほど陳列されてる。

「ほぇー　うわぁ……」

亜依は店内を見回して、目を爛々と輝かせてる。単に自分が興味あるだけじゃないのか？

「あっ、これ！」

亜依は大きな熊のぬいぐるみを見つけて、両手で持ち上げた。

これは……僕が亜依に誕生プレゼントしたのと同じヤツだ。

亜依は値札を覗き込んで確かめてる。

なんだよ。

プレゼントの価値を値段で判断するつもりか？

失礼なヤツだな。

「ぎょっ！　ご、五千円!?」

「ああ、そうだよ。結構がんばったろ？」

「う……うん」

亜依は無言で僕を見つめてる。

何かご不満でも？

「ありがとう、耕ちゃん」

あれ？　大したことない、とか言われるのかと思ったけど。

亜依の目は、ちょっと潤んだように見える。一応は感謝してくれたのかな。

「ああ、いいよ。それより亜依。プレゼントした人の前で値段を確かめるのは失礼だぞ。プレゼントなんてもんは、値段じゃなくて気持ちだ」

「あっ、ごめんっ！　つい……」

亜依は肩をすぼめて、申し訳無さそうにうつむいた。

まあ僕だって、値段と気持ちがある程度は比例してることなんてわかってる。

だからこそ五千円なんて、高校生にしては超高価なものを奮発したんだから。

「まあ、僕と亜依の仲だから、いいけどさ」

「耕ちゃんと私の仲……？」

[illegible]

亜依はきょとんとしてつぶやいた。
「あ、いや。ほら、腐れ縁ってやつか？」
「くっ……腐れ縁で悪かったね！」

亜依はムッと口を尖らせて、ぷいと横を向く。だけどすぐに思い直したように正面を向いた。
「あ、でも耕ちゃん。ホントにありがとう」
「いや……どういたしまして」
いつもこんなに素直な態度なら、コイツも可愛いのにな。
照れてはにかむ亜依の姿に、ついついそう思ってしまった。

それから亜依はその店で、従兄弟へのプレゼントとしてキーホルダーを購入した。

ナーシャ
　なんと五百円のものだ。
「そんなのでいいのか？」
「そんなのって？」
「いや、五百円なんて安すぎないか？」
「プレゼントは値段じゃなくて気持ちだ！　……って、ついさっきカッコいいことを言ったのはどこの誰かな？」
「あ、いや、確かにそうなんだけどさ。わざわざ電車に乗って買い物に来て、五百円のモノなんて……コストパフォーマンスが悪すぎだろ？」
「わざわざ買い物に出るってのが、気持ちがこもってるんだってことがわからないのかね、耕ちゃん君（くん）は？」
　くそっ。偉そうに言いやがって。
　ちゃん、こ君（くん）を寸ナるな。

でもまぁそういうふうに言われたら、もう論破できる自信はない。

悔しいから顔を歪めて亜依を睨みつけたら、亜依は申し訳無さそうな顔をして、上目遣いに「偉そうに言ってごめんね」と謝った。

まただ。なぜか今日の亜依は、いつもよりも素直な態度を取ることが多い。

買い物に付き合ってもらってるからとは言ってたけど、それにしても態度が素直すぎる。気持ち悪いくらいに。

いったいなんでだ？

まあ素直な態度でいてくれた方が、僕としては助かるからいいんだけど。

買い物を済ませて店から出たら、ちょうどお昼過ぎなので、昼飯を食べて帰ろうという話になった。

商店街を駅に向かって歩いてると、讃岐うどんのチェーン店があったから、手軽に済ませようとそこに入ることにした。

向いに座る亜依は、唇を尖らせて、ちゅるちゅると麺を一本ずつすすってる。

なんだかとても不器用な食べ方。もうちょっと豪快に食べられないものか。だけど今日の亜依が、ちょっと素直な態度を所々で見せてるせいもあってか、それがなんとなく可愛く見える。

ついつい微笑ましくて、亜依が食べる間中、コイツの姿を眺めてた。

そして食べ終わって店の外に出たら、亜依が聞いてきた。

「ねぇ耕ちゃん。これからどうする？」

[illegible]

「どうするって……用事は終わったんだから、帰るんだろ？」

「えっ？　あ、ああ……そうだね」

ん？

なんだ、今の間は？

亜依はうつむいて、ちょっと寂しそうな感じに見えたけど……気のせいか？

あっ、そうか。せっかく繁華街まで来たんだから、なにか他にしたいことがあるのか。

「なんだったら、もうちょっとどこかに行くか？」

「えっ？」

亜依が顔を上げると、嬉しそうな表情になってた。だけど次の瞬間、引きつったような顔になって、

「あ、うっかりしてた。帰ろう」

「あ、やっぱいい、帰ろ」

と言った。

「え、なんで？　亜依はどこかに行きたいんじゃないのか？」

うーん、よくわからないヤツだ。

亜依は視線を泳がせて、僕の後ろの方をチラチラ見てる。どうしたんだろう？

そう思って振り返ると――

さっきのヤツがいた。

第43話：偽のデートは甘酸っぱい〈6〉

僕が振り返ると、さっきのヤツがいた。

帽子を目深に被ってマスクをした、黒づくめの怪しい男。

もしかして、僕らを尾行してるのか？

亜依はコイツが気持ち悪くて、帰ろうと言ったのかもしれない。

「あ、だって耕ちゃん。今日は早めに帰って、用事をしなきゃって言ってたよね……」

「えっ？」

いや別に、そんなことは言ってないけど。

……もしかして怪しい男を気にして、言い繕ってるのかもしれない。

「あ、ああ……そうだな。帰ろうか」

「うん」

僕は亜依と並んで、駅に向かって歩き出した。

あの怪しいヤツのことを、こっそり亜依に確かめよう。

僕は歩きながら、亜依の肩が僕の二の腕に当たるくらいまで近づく。

「こ、耕ちゃん。なんでそんなに近寄るの？　私にくっつきたいのかなぁ？　あはは」

なに言ってんだコイツは。

僕は顔は前に向けたまま、声をひそめて亜依に言った。

「違うよ。亜依は、あの怪しい黒づくめの男を気にしてるのか？」

亜依も小声で答える。

「ふぇっ？　な……なに、怪しい男って？」
「えっ？　亜依はあの怪しいヤツにびびって、帰ろうって言い出したんじゃないのか？」
「ううん。あ、怪しい男なんて、知らないなぁー……」
「マジか？　あんなに近くで何度も見かけたのに」
「知らなーい」
「あっそ」
なんだ、違うのか。
でも亜依が帰るって言ってんだから、まあいいか。
そう思って、また亜依と並ぶ間を少し開けたら、なぜか亜依はピトっとくっついてくる。
「どうした？」

「なにが？」
「なにがって……なんでくっつく？」
「くっついてなんかないし」
「くっついてるだろう」
「あ、いや……」
「どうした？」
「くっ、くっ、くっ……」
「なに笑ってんだ？」
「笑ってない」
「笑ってるだろ」
「くっ、くっ、くっつきたい気分かなぁ……なんちゃって。えへへ」
はぁっ？
、、、

なに？

亜依が……そんなことを言うなんて。

ホントに今日のコイツは、だいぶ変だ。

それにチラチラと後ろを気にしてる様子だ。やっぱりあの怪しい男を気にかけてるんじゃないのか？

「まあ、くっついてもいいけど。……って言うか、僕にくっついとけ」

「えっ？」

「いや、亜依は気づいてないかもしれないけど、なんか変な男がいるんだ。まあ大丈夫かとは思うけど、亜依に万が一のことがあったら大変だ。だから僕から離れるな」

「あっ……うん。ありがとう」

横を歩きながら照れ臭そうに僕を見上げる亜依の顔は、真っ赤だ。

もしかして亜依は……

ホントに僕に……

こ……好意を持ってる……とか？

いやいやいや。

それだけはないでしょ。

亜依は僕を嫌ってるはずだ。

だけど今日の、この亜依の態度。

まるで本物の恋人同士のデートみたいじゃないか。

駅に着くまでも、駅に着いて電車に乗ってからも、ずっとそんなことが頭

から離れない。

だって亜依は、ずっと僕にピトっとくっついて、距離が近いままなんだから。

電車に乗ってる最中も、亜依はすぐ目の前にいる。

今はそんなに車内が混んでないにも関わらず、ちょっと揺れたら触れ合うような距離感だし。

でも――

こうやってくっついてくる亜依は、ちょっと可愛い。

態度もずっと照れたような、甘えるような感じだし。この前の凄く可愛い亜依の姿が、チラチラと頭に浮かぶのもあって……

そんな亜依を見てると、鼓動が高まって胸が苦しくなった。

亜依――

ホントは僕のことを、どう思ってるんだ？

その言葉がずっと喉まで出かかってるけど、どうしても口にすることができない。

それを口にすると、亜依がするっと僕から離れていきそうな気がする。

そんなジリジリした気持ちをずっと胸に抱えながら、最寄り駅で電車を降りた。

――珍しいこんな距離感で、家まで帰るのもたまにはいいか。

だから亜依が僕をどう思ってるかなんて、聞かずにおこう。

ようやく心にそう決めたのに――

最寄り駅を降りて自宅へ歩き出すと、亜依は僕と距離を開けて、スタスタと先を行く。

[illegible]

「おい、亜依、待ってくれよ」
「耕ちゃんが遅いんだよ」
「はぁっ？」
なんだ、この急な変わりようは？
「さっきまでとえらい違いだな。なんでだ？」
「だって電車の中までは、見られてるかもしれないから……」
「はっ？　普通は逆だろ。他人の目を気にするなら、あんまりくっつかない。人目のない所なら、遠慮することなくくっつく。これが普通じゃないのか？」
「えっ？　あ、ああ。ええっと……な、なにを言ってるの、耕ちゃん？　若い男女が離れてたら、世のおじさんおばさんは心配して、日本の将来を憂うものなんだよ？　だからあえてくっついた」
はっ？
そういうことだったのか？　日本の将来を憂う？

そんなことでおしまいなんて日本の将来を憂うな
――んなバカな。
「そんな話は聞いたことがない。それはいったい何情報なんだ？」
「何情報って……あっ、そうそう。どこかの研究機関が世論調査をした結果だって、ネットに載ってた」
「そんな調査結果は見たことないぞ」
「ああ、これだから……耕ちゃんの情報リテラシーの低さには呆れるわ」
「はぁ？　待てよ。そんな信憑性の低い情報を信じ込んでる亜依こそ、情報リテラシーの低さに呆れるぞ」
「私は賢い女だから大丈夫。騙されたりしないもん」
「お前が賢い女？　なに言ってるんだ、このバカ女」
「バカバカ言うな、このバカ男！」
気がついたら、いつものこんな感じになってた。これは距離感が近いのか遠

いのか。
　――僕にもよくわからない。
だけどこんな感じでずっとお互い罵声を飛ばしながら、自宅まで歩いた。

家に着くと、貴理山邸の前に舞衣がいた。ちょうど家から出てきたところらしい。
「あ、二人ともお帰りー」
舞衣はいつもの優しい笑顔で迎えてくれた。亜依とは大違いだ。だから僕も優しい口調で答える。
「ああ、ただいま。舞衣はどこか行くのか？」
「あ、うん。コンビニでお菓子買ってこようかと」

「そっか、気をつけて」

「ところでデートはどうだった？　楽しかった？」

いや待て。今日はデートなんかじゃ……

僕が口を開こうとしたら、横から亜依が焦った口調で割り込んでくる。

「いやいやいや、何を言ってるの舞衣？　デートなんかじゃないし。そんなこと、私ひと言も言ってないよね？　誤解を招くようなことを言わないでくれる？」

「確かに亜依は、デートなんて言ってなかったけど……でも昨日の夜も今朝も、嬉しそうにニヤニヤしてたじゃない」

――えっ？　そうなのか？

「あーっ、あーっ、あーっ！　こら舞衣。あることないこと……って言うか、ないことをあるかのように言うのはやめて！」

亜依は両手も顔も、横にぶんぶん振ってる。

ああ、やっぱり舞衣の作り話なのか。

「なに言ってるのかなぁ亜依は。嬉しそうにニヤニヤしてたのはホントでしょ？」

「いや、あれは……私の好きな芸人のギャグを思い出し笑いしてただけであって……」

「ふーん。亜依……素直になったら？」

「わ、私はいつだって素直なんだからっ！　もうそんな話はいいから！」

亜依は真っ赤な顔をして、急にせわしなく家のドアに向かって行った。

「じゃあね、耕ちゃん。バイバイ！」

そう言い残して、亜依はドアを荒々しく開いて、家の中に入っていった。

「はあーっ……ごめんね耕ちゃん。亜依はいつもあんなで」

「いやいや、つかってる。亜依はいつもあんなこと

「いやいや、それってさ、亜依にいっもあんな」

僕がニヤリと笑うと、舞衣はやれやれといった呆れた表情を見せた。

「せっかく亜依のために言ってあげてるのに……亜依がずっとあんな態度なら、私だっていつまでも我慢していられないんだからね」

珍しく舞衣が頬を膨らませて、ちょっと不満げな態度を見せた。

――とは言っても、亜依に比べたら可愛いもんだ。

擬音で表現したら、『ぷんすか』って怒る感じ。あはは、可愛い。

「まあまあ、舞衣。亜依はいつもああだろ。そう言わずに、怒るのを我慢してやれよ」

「いや、私が言ってるのはそうじゃなくて、耕ちゃんのことを……」

「えっ？　僕のこと？」

「あっ、いやいや。なんでもない」

舞衣は急に焦って、両手のひらを激しく振ってる。なぜか頬が、耳まで真っ

赤だ。

「じゃあ、コンビニ行ってくるねー！」

舞衣は手を振って、駆け出してしまった。

うーん、よくわからん。

いや、それ以上にわからないのは亜依の態度だ。

今日はずっと素直で、しかもくっついてきたりしたもんだから、ついつい勘違いしかけたじゃないか。

そう。

もしかしたら、亜依はホントは僕に気があるのかも……なんて勘違いを。

いやあ、危ない危ない。危うく勘違い男になるところだった。

最寄り駅に戻ってきてからの亜依の態度で、それは大いなる勘違いだって、気づいて良かった。

まあそれにしても――

いつもああいう素直な態度なら、亜依もまあまあ可愛いんだけどな。

……あ、いかん。

それはとんでもない考えだ。

僕は、亜依が可愛いなんてとんでもない考えを、慌てて打ち消した。

だけど自分でも頬が緩んで、ニヤついてるのがわかる。

「んーっ、まぁいっか！」

これが僕たちの、今までの、そしてこれからの関係性なのかもな。ずっとこんな感じで、いつもいがみ合う。

――仲良くケンカしな、って感じ。

いつもの日常。

真逆の美少女姉妹～なぜか妹の方が僕に冷たく当たるんだけど、もちろん僕も負けずにやり返す！

◆第9エピソード『亜依と舞衣』

第44話：亜依と舞衣〈1〉

◆◇◆◇◆

私は自分の部屋に入って、ベッドの端に腰かけた。
今日の耕ちゃんとの擬似デートを思い返してみる。
それにしても今泉君。あの変装はないでしょ。
あまりに怪しすぎて、かえって目立ってたし。
堂々と私たちのすぐ近くに来るもんだから、耕ちゃんにも尾行を感づかれてた。

まあでもこれで、今泉君に耕ちゃんが私の恋人だと思わせるミッションは、完璧に遂行できた。さすが私。一流の戦術家だ。

時々耕ちゃんが「まるで恋人同士みたいに……」なんて、私たちが恋人同士ではないような発言をするからちょっと焦ったけど。まああれも誤魔化せたに違いない。

今日の出来ならば、今泉君は完全に私の彼氏は耕ちゃんだと、認めざるを得ないだろう。

かなりぎくしゃくしてたし、腕や肩を組むなんてことはしなかったけど。

だけど根っからのコミュ障の自分のことだから、例え本当の彼氏と出かけ

てもあんなものだと思う。

まだ私たちは高一なんだし、あれでも充分本物の恋人同士だと言い張っても、なんら不自然ではないレベルのはずだ。

――本物の恋人同士……か。

今日の私の態度を、耕ちゃんはどう思ってるのだろう。

何度も不審がられはした。

だけど耕ちゃんは、私が我がままを言ったり、くっつこうとすることを、そう嫌がりはしなかった。

そして今泉君のことを怪しいヤツと勘違いして、私を守るようなことまで

言ってきた。

あのバカ男。

そういう所は優しいんだから。

そう言えば……

小学生の頃から小心者の私は、虫とか些細なことでも怖がって、すぐに耕ちゃんに助けを求めていた。

その度に耕ちゃんは、私を守ろうとしてくれた。

それは、今でも変わってない……ということか。

変わったことと言えば、思春期になって、男女間の好きという感情が存在することを知ったこと。

もしもそれがなければ、今でも耕ちゃんが、舞衣も私も両方ともが好きだと言ってもおかしくなんかない。

[illegible]

だけど男女の好きは、両方ともが好き、というのは許されない。

――許されるはずがない。

だから私も、耕ちゃんが好きなのは私じゃなくて舞衣、ということが常に引っかかるようになってしまった。

舞衣のことを好きなのに、私にも優しくするアイツの態度に、腹が立つようになってしまった。

よくよく考えたら変な話だ。

別に恋人以外の異性に、優しくしてはいけないなんてことはない。

例え耕ちゃんが舞衣と付き合ったとしても、それでもアイツが私に優しくしてもいい……というか、世間ではそれは当たり前のことだ。

ごナごそそれがなぜか、私には無性にムカつく。

だけどそれなのに、私には無性にムカつく。

なぜか、じゃない。――本当は自分でも理由はわかってる。

耕ちゃんに優しくされたら、もしかしたら耕ちゃんが、自分を好きなのかもしれないって、私自身が勘違いしてしまうからだ。そんな勘違いをするようなことをする耕ちゃんに腹が立つんだ。

そして私が耕ちゃんに優しくしないのは、もしも優しくして、それでも耕ちゃんが舞衣を選んでしまったら……

私が選ばれなかったことで、完膚なきまでに私の心は打ちのめされるからだ。

――そんなの、わかってる。

とっくにわかってる。

だけど今日、耕ちゃんと恋人のように振舞って。

優しくされて。

そのことをはっきりと、よりはっきりと気づいてしまった。

今まではわざとぼんやりとしか解ろうとしていなかったことの、輪郭がはっきりと見えてしまった。

こんなこと――恋人の真似事なんか、するんじゃなかった。

なんかみじめだ。

恋人のように振舞って、でもそれはすべて虚構だなんていう事実を突きつけられて。

――みじめで虚しい。

ふと顔を上げると、部屋の中の色々なものが目に入った。

棚に並べられた大量のぬいぐるみ。置物。学習机。本棚の文庫本。

大きな熊のぬいぐるみは、この前耕ちゃんが誕生プレゼントでくれたも

の。

そう言えば、その下の棚に飾ってある、色鮮やかなマーブル模様の石も、昔耕ちゃんにもらったものだ。

あれは中学二年の時だった。

耕ちゃんが家族旅行先の沖縄の海岸で、すごく綺麗な石を見つけたからと持ち帰ったもの。

私はそれをひと目見て、欲しくなった。

私が欲しいなぁと呟いたら、耕ちゃんはすぐに私にくれると言った。

舞衣も一緒にいたから、耕ちゃんは何度も舞衣に謝ってたっけ。

それまでは耕ちゃんは、私たちへのプレゼントと言えば、必ず二人分用意してくれてた。この前の私たちの誕生日だってそうだ。

[illegible]

だからこの石は、耕ちゃんが私だけにくれた唯一のものだ。

私はベッドの端から立ち上がって、棚に歩み寄る。

そしてその石と、この前貰った熊のぬいぐるみを棚から取り出した。

この二つのものは、よく考えてみたら、両方とも耕ちゃんから私への優しさだ。

さっき私は気づいた。

耕ちゃんの私への優しさが、私をムカつかせるのだと。

ということは、つまり。

この二つの耕ちゃんの優しさが、いつまでも私の部屋の中で存在感を発揮してたら、私はずっとムカつき続けることになる。

そうゞ。

そうだ
この二つのものを、捨ててしまおう。
耕ちゃんの優しさを、もう身近に置いておくのはやめよう。
そう考えて、棚の引き出しから、大きなゴミ袋を取り出した。
耕ちゃんが悪いんじゃないのはわかってる。
人の優しさにムカつくなんて、悪いのは私だ。
理不尽なのは私だ。
だけど私は気づいてしまった。
今日の恋人ごっこのせいで、私は気づいてしまった。
この私のムカつき……いや、正しく表現すると、未練というヤツ。
それを絶たないと、前を向いて高校生活を送れないような気がする。
だから耕ちゃんには申し訳ないけど、この二つの品は、廃棄処分することにする。

ゴミ袋の口を広げて、熊のぬいぐるみと綺麗な石を入れようと、両手にそれぞれを握った。

もう一度、その二つの品をじっと見る。

――あれ？　なぜか滲んでる。

私の目に、水が溢れてるみたい。

水漏れの故障かな？

まあ、いいや。

よく見えないけど、こんな大きなものをゴミ袋に放り込むくらい、なんの雑作もなくできる。

そう思って、両手に力を入れた。

その時――

第45話：亜依と舞衣〈2〉

私の部屋の扉をノックする音が聞こえたとほぼ同時に、ガチャっと扉が開く音もした。

「亜依。亜依の分のお菓子も買ってきた……亜依っ！　何してんの!?」

舞衣が叫ぶ声が聞こえた。そしてばたばたと足音も聞こえる。

そしてその次にばさっとビニール袋が床に落ちる音が聞こえて、私の両手首をガシっとつかまれる感触がした。

ぬいぐるみと綺麗な石をゴミ袋に捨てようと思ってたのに、手が動かない。

「ああ、舞衣。これ、捨てようかと思って……」
「これって両方とも、耕ちゃんが亜依にプレゼントしてくれたやつでしょ!?　なんで捨てるのっ!?」
舞衣はすぐ近くに顔を近づけて、キンキン響く声で叫ぶから耳が痛い。
なんで舞衣は、そんなに焦ったような、怒ったような声を出してるんだろう？
私はぼーっと前を向いたまま、言葉だけで答えた。
「だって、もう要らないから」
「なんで要らないのよ!?　耕ちゃんからのプレゼント、亜依にとっても大事なものでしょ!?」
「舞衣……耳が痛い。ちゃんと聞こえてるから」
「あ……ごめん」

舞衣は声をトーンダウンして、顔を私の耳元から少し離した。
私はゆっくりと舞衣を振り返った。
相変わらず視界が水で滲んでて、舞衣の顔がはっきり見えない。
変なの。
「どうしたの亜依？　泣いてるの？　何があったの？」
「別に、何もない……目が水漏れの故障を起こしてるだけ」
「何もないのに、急に泣いたり大切なプレゼントを捨てないでしょ？　今日、耕ちゃんと出かけて、何か嫌なことがあったの？　耕ちゃんと喧嘩した？」
「ううん。喧嘩なんかしてないよ。今日は喧嘩しないようにしたもん」
「じゃあ耕ちゃんに、凄く嫌なことを言われたとか？」
「ううん。今日の耕ちゃんは、優しかったよ」
「じゃ……じゃあ、なんで？　なんでそんなことをするの？」

「もう疲れた……」
「疲れた？　疲れたってどういうこと？」
「言いたくない」
私の言葉は淡々としたものだけど、意思の強さを舞衣は感じたんだろう。
そのまま舞衣は黙ってしまった。
だけど舞衣は、私の手首をぎゅっと握ったままだ。
舞衣の方からも、耕ちゃんからのプレゼントを捨てさせるもんかという意思の強さを感じる。
「舞衣、痛い。離して」
「離したら、それを捨てるんでしょ？」
「とりあえずは捨てないから、とりあえずは手を離して」
「わかった」

舞衣が手を離してくれたから、私はぬいぐるみと石をそっと床に置いた。

こういう時、私たち姉妹はお互いに信頼しあってるから、変に相手の言うことを疑ったりしない。だからこっちも約束したことは守る。

舞衣は床に落ちたコンビニの袋を持ち上げて、中から細長い棒状のお菓子を取り出した。

「ほら、亜依。あなたの分。食べなよ。うまいよー」

見ると、うまい棒だ。私の大好物。

うまい棒って言うくらいだから、うまいのは当たり前。

私はお菓子の封を切って、先端にかぶりついた。

なんというか、何も考えられなかった。

ただただ、舞衣が私のために買ってきてくれた、私の好物を今すぐ食べたくて、なっこっこと感ぐんだ。

くなって感じた
そしてそのまま何口もざくざくと頬張り、あっという間に全部食べた。
口の中がカスカスして、乾ききった感じがする。
「ほら、亜依の好きなアップルジュース」
私は何も言わないのに、舞衣が小ぶりなペットボトルを目の前にすっと差し出した。
さすが舞衣だ。憎らしいくらいに気が利く。
美人で優しくて、気が利く女の子。
そりゃあ、男子がほっておくわけがない。
私が男子だったら、確実に舞衣を選ぶ。
私なんかじゃなくて。
「あ、ありがと」
私はそれを受け取って、蓋をカチリと捻る。

そして好物のアップルジュースを、ぐびぐびと喉に流し込んだ。
「ぷはーっ！」
「こら、亜依。おっさん臭いことはやめなさい」
「誰に見られるわけでもなし」
「まあ、そうだけど……」
そう言って舞衣は、プッと吹き出した。
「どう、亜依。落ち着いたかね？」
「うん」
舞衣はちょっと気取った言い方をして、人差し指で私の鼻の頭をツイとつついた。
「さあ、亜依。落ち着いたんなら、何があったか私に言いんしゃい」
「あのさ、舞衣……」

「ん？　なにかな？」
「舞衣は、いつになったら耕ちゃんと付き合うの？」
「へっ？　なんの話？」
「何の話って、言ったとおりの話。あんた達、いい加減そろそろ正式に付き合ったらいいのに」
「なんで？」
舞衣は怪訝な顔をしてる。
逆にこっちが、『なんで？』って訊きたい。
なんで付き合わないのって。
「なんでって……耕ちゃんが舞衣を好きだから」
「はぁっ？　亜依、あなたは何を言ってるの？　耕ちゃんが好きな相手は、亜依、あなたでしょ？」

「そんなのあり得なーい。舞衣こそ、なに寝ほけたことを言ってんの？　耕ちゃんは私のことを嫌ってる」

舞衣はアメリカ人みたいに肩をすくめて、ふうーってため息をついた。

「あのね、亜依。耕ちゃんのことをホントにわかってる？」

「えっ？」

耕ちゃんのことを……

ホントに……

わかってる……？

そんなのわかってる！

あのバカ男のことは、私が一番わかってる……はずだ。

「亜依。耕ちゃんのいつもの態度を見てたら、亜依のことが好きだってわかるでしょ？」

「そんなことない。耕ちゃんはいつだって、亜衣こそ、亜衣こそ

こそんなことない、耕ちゃんにはいつだって舞衣に対して優しいし、舞衣とした方が楽しそうだし、舞衣を愛おしい目で見るし……好きな相手は舞衣に決まってる」

「違うよ。耕ちゃんは今までだって私よりも亜依を気にかけてきたし、今だってそう。だから亜依と同じ文芸部に入った」

「あ……あれは耕ちゃんが、テニスなんかしないから、舞衣と同じ部活をしたくてもできないだけであって……」

「別に耕ちゃんは、本好きでもなんでもないじゃない」

舞衣にぴしゃりと言われた。

それは確かにそうだ。

耕ちゃんは特に読書の趣味もないし、小説を書くわけでもない。

でもあれは――

「でもあれは、部活見学に行った耕ちゃんを、私が無理矢理誘ったからであっ

て……」

「亜依が誘ったにしても、大切な高校の三年間を費やす部活に、それも自分が興味がない分野の部活に、好きでもない人と一緒には入らない。もっと言ったら、一緒に部活見学にも行かない」

「う……」

舞衣の言うことにも一理はある。

だけどそれは、たったの一理だ。

「でも舞衣の方が明るいし、優しいし、友達も多いし、それにそれに……可愛いし！」

「ははは、見た目はほとんど同じ、双子の姉妹が何を言ってんの？　それは自分も可愛いって意味かなー？」

「あ、いや、違うって」

「それにさ、亜依。明るいとか友達が多いとか、そんなのと耕ちゃんが好きかどうかって、関係なくない？」

「か……関係あるでしょ。そんな女の子の方がモテるに決まってる」

舞衣は真顔で、ふいふいっと何度か顔を左右に振った。そして私の目を真っ直ぐに見つめる。

目力が怖い……

「それは一般論。耕ちゃんの気持ちは、そうじゃない」

「だって、でも……耕ちゃんの気持ちが一般論どおりだっていう可能性も高いじゃない！」

なんで舞衣は、可能性の低いことをさも真実のように言うのか。

そうであればいい。

[illegible]

――もしもそうであれば、どれほどいいか。

でもそんなのは、泡沫のような希望だ。

それを押しつけようとする舞衣に、つい苛立った声を投げつけてしまった。

そしたら舞衣は、はぁーっとひときわ大きなため息をついた。

「わかったよ亜依。もういい。あなたがそう言うなら、私が、玉砕覚悟で耕ちゃんにアタックする」

「えっ？」

「今まで耕ちゃんの気持ちを考えて我慢してきたけど、亜依がずっとそんな態度なんだったら、もう我慢はやめる！」

舞衣は興奮した感じで、頬が赤い。

ちょっと鼻息も荒くて、こんな舞衣は珍しい。

「我慢……してた？　舞衣が？」

虚を突かれた気分だ。

叫ん　そんなことはあり得ない

なんで舞衣が我慢しなきゃいけないのか？

「そうだよ。耕ちゃんが選ぶのは亜依だ。だから私が耕ちゃんに好きなんて言っちゃうと、耕ちゃんを困らせるし亜依にも悪い。だから今までずっと、自分の気持ちを耕ちゃんに打ち明けるのは我慢してきた」

「嘘でしょ？」

それじゃあ――ああ、まるで私と一緒だ。まさか舞衣が、そんなふうに思ってたなんて……

いや、少し違う。

私は、自分が拒否されるのが怖くて、気持ちを抑えていた。

だけど舞衣は、耕ちゃんを困らせるのが嫌で、そして私に気を使ってたんだ。

私は、自分のことしか考えていなかった。

「ホントよ。だけどその耕ちゃんの気持ちを亜依が受け止める気がないなら……だったらもう我慢する必要なんかない。亜衣に遠慮する必要もない。だから……」

舞衣の目には涙が浮かんでいる。

今まで舞衣が心の奥底に押し込めていたものが、一気に溢れ出している感じがする。

「だから私は……耕ちゃんを私に振り向かせるために全力を尽くすっ！　それでいいのね、亜依!?」

今まで見たことがないような、舞衣の感情の発露。その勢いに、私は反論する勇気を持てない。

「そ……それで……い……」

舞衣は黙って、私をじっと見つめてる。

「それで……い……」

床に転がる、ぬいぐるみと綺麗な石が目に入った。

舞衣だけじゃない。

感情を抑えこんで我慢してたのは、舞衣だけじゃない。私だってそうだ。

このまま舞衣の言うことに同意したら、私は一生この感情を抑えこんだまま、生きていかなくちゃいけない。

それで本当に――いいのだろうか？

「それで……い……い……いいことない！　やっぱり嫌だ！　私だって、やっぱり耕ちゃんが好きだ！」

「亜依……よく言えたね」

舞衣は目に涙をためたまま、優しく微笑んでる。まるで聖母マリア様かっ

てくらい、優しい笑顔だ。

私は我慢ができなくなって、舞衣に抱きついて、胸に顔を埋めた。

「ごめんね舞衣。舞衣だって我慢してるって聞いたのに、私ってホントに我がままで、自分のことしか考えてなくて……ホントにごめんね……」

舞衣の胸でくぐもって響く私の言葉に、舞衣はこれ以上ないくらい優しい声で答えてくれた。

「いいんだよ亜依。大事なのは耕ちゃんの気持ちだから。耕ちゃんが選ぶ相手が亜依なんだったら、私は我慢できる」

「舞～衣～」

もうダメだ。

涙が止まらない。

ひっくひっくとしゃっくりも止まらない。

中学以来、今までずっと感情を押えてきたことのこと。まるでそれが全

口当たりがよくて、と感慨を抱いて生きてきたのは、言えてそれが全部、一気に噴き出したみたいになって、わけがわからない。

いったい私はどれくらいの時間、舞衣の胸で泣いてたんだろう。

その間ずっと舞衣は、私の背中を優しく抱きしめてくれていた。

私は舞衣の胸から顔を上げて、少し後ずさりして離れた。

舞衣は相変わらず優しく微笑んでいる。

「どう？　落ち着いた？」

「うん、ありがとう。あのね、舞衣。でも私、耕ちゃんが私を好きだなんて、やっぱりまだ信じられない。それに……」

「それに？」

「それに、もしそうだとしても、今すぐ耕ちゃんに告白する勇気が持てない」

「いいのよ、亜依。焦ることはない」

舞衣は手を伸ばして、私の頭に手のひらを乗せた。そしてすりすりと、頭を撫でてくれる。

「別に今すぐじゃなくていい。まだ私たちの高校生活は始まったばかりだし」

「うん……」

「亜依が自分の気持ちを認めて、そして耕ちゃんの本当の気持ちに目を向けるなら……私は今までどおり、二人を見守るから」

「ま……舞衣……ありがとう……」

ああ、ダメだ。

また目からぶわっと水が漏れてきた。

ホントに私の目は、水漏れの故障をしてしまったに違いない。視界が滲んで、舞衣の顔がよく見えない。

「亜依、がんばれ。私はいつもあなたを応援してるから」

滲んで歪んだ舞衣がそんなことを言ってる。ホントになんて舞衣は優しいんだろう。

ありがとう。

ありがとう。

それからその日は、舞衣と夜遅くまで話をした。

子供の頃の思い出から、高校に入学した後のことまで、話はずっと尽きない。

そしてその夜は、久しぶりに舞衣と一つのベッドで一緒に、くっつき合って眠った。

◆◇◆◇◆

翌朝。登校しようと玄関を出たら、ちょうど耕ちゃんも家から出てきたところだった。

昨日の舞衣との話どおりなら、耕ちゃんは私に気があるかもしれないから、ちょっとは愛想良く挨拶をしてみようか。

「耕ちゃん、おは……」

「おおっ、おはよーバカ女」

くそ、このバカ男は……

意地悪く顔を歪めて、ニヤニヤ笑ってる。

朝っぱらからくそ腹の立つ態度だ。

「なんだよバカ男」

「バカにバカって言われたくないな」

「そっくりそのまま、そのニヤけた口元コピペ、ってこらるー！」

「そっくりそのまま、その七ーニを二ヒくして返してやる！」

「IーTリテラシーが低いくせに、偉そうに言うな」

「そっちこそIーTリテラシーが低いくせに！」

ああ、またこんな日常だ。

――仲良くケンカしな、って感じ。

いわゆる腐れ縁ってやつだ。

私たちの関係は、きっとこれからもこんな感じだ。

まあ、それも良しとしようか。

私が耕ちゃんを好きだってことは、機会を見ながら徐々に伝えたらいい。

耕ちゃんの気持ちも、焦らずゆっくりと確かめたらいい。

だから……耕ちゃん、今日もよろしく。

そして明日以降も――よろしく。

＝完＝

（本を読み終わりました）